沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 59 集

喜田盛遺跡

平成 22 年度県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査

2011（平成 23）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した平成22年度の県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存を目的とした喜田盛遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。

喜田盛遺跡は石垣市新川に所在し、この一帯は住宅が密集する市街地となっております。そのため、この市街地を東西に走る県道真栄里新川線は、交通量が多い幹線道路であるのみに関わらず道幅が非常に狭いため、早急な改善が求められておりました。

沖縄県では、昭和58年度から継続してこの道路改善のため街路改良工事が実施されてきました。一方、工事に伴って、この一帯には喜田盛遺跡を含め多くの遺跡が確認されることになり、これまで石垣市教育委員会による記録保存のための発掘調査が行われてきました。この調査によって、これらの遺跡より多くの遺構・遺物が確認され、徐々に地域の歴史も明らかになりつつあります。

さて、今回の喜田盛遺跡の調査は、この街路改良工事に伴う最後の発掘調査となりました。調査の結果、15世紀～17世紀を中心とした土坑墓や建物跡と考えられる多くの柱穴群が発見され、地元で作った土器をはじめ、中国や日本本州の陶磁器などが出土しました。

本報告書では、今回の調査成果と共に、本工事に伴う発掘調査が終了することを受けて、この喜田盛遺跡周辺においてこれまで行われた調査成果を整理し、地域における位置付けについても若干の検討を行いました。地域の歴史・文化を学び考え、文化財を保存活用するための基礎資料と役立てば幸いです。

最後になりましたが、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関および関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

2011（平成23）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　守内泰三

例　　言

1．本報告書は、沖縄県石垣市新川 63 番地２に所在する喜田盛遺跡における県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

2．本調査は、沖縄県土木建築部から予算分任を受け、沖縄県教育委員会の指導を元に、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、発掘作業を平成 22 年７月７日から８月６日、資料整理作業・報告書作成を平成 22 年８月６日から平成 23 年３月 31 日まで実施した。

4．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の平成 17 年地形図（縮尺１：25,000、１：50,000）を使用している。

5．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第ⅩⅥ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系で算出している。

6．現地調査および資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、団体五十音順）。

大濵憲二・大濵永寛・下地傑（石垣市教育委員会）
島袋綾野（石垣市立八重山博物館）
藤田佑樹・山崎真治・羽方誠（沖縄県立博物館・美術館）
角南聡一郎（元興寺文化財研究所）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁資料館）
坂井　隆（台湾大学）
金武正紀（石垣市史編集委員会）
菅原広史（浦添市教育委員会）
新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）
伊藤慎二（国学院大学研究開発推進機構）
大濵永亘（先島文化研究所）
向井　亙（東南アジア考古学会）

7．本書の編集は、当センター職員の協力を得て、瀬戸哲也が行った。なお、執筆は第３章第３節１を片桐千亜紀、第４章を土肥直美・片桐千亜紀・徳嶺里江、それ以外を瀬戸が行った。

8．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2009 年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウェントワース法（那須・趙 2003）で表現している。

9．石垣島を含む先島地域おける時代区分は、『沖縄県史　各論編２　考古』においても複数説が提示されている状況である。本書では、喜田盛遺跡の主体的な時期である 15 ～ 17 世紀前後について考古資料により具体的に説明されている、金武正紀・阿利直治・金城亀信による編年に基づいた（金武 1994・石垣市総務部 2007）。

10．本書に掲載された写真は、発掘調査状況を瀬戸哲也、遺物を矢船章浩・伊佐えりなが撮影した。

11．現地調査で得られた遺物および実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序
例 言

第１章　経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 6
第３章　調査の方法と成果 …… 8
　第１節　調査の方法 …… 8
　第２節　層序 …… 8
　第３節　遺構 …… 10
　　１.土坑墓 …… 10
　　２.焼土遺構 …… 15
　　３.土坑 …… 15
　　４.ピット …… 15
　　５.貝集中地点 …… 15
　　６.礎石 …… 16
　第４節　遺物 …… 18
　　１.土器 …… 18
　　２.中国産陶磁器 …… 30
　　３.タイ産陶器 …… 34
　　４.台湾産陶器 …… 34
　　５.本土産陶磁器 …… 35
　　６.沖縄産陶器 …… 36
　　７.近代陶磁器 …… 43
　　８.金属製品 …… 44
　　９.骨製品 …… 44
　　10.石製品 …… 44
　　11.貝製品 …… 44
　　12.円盤状製品 …… 46
　　13.貝類遺体 …… 46
　　14.脊椎動物遺体 …… 55
第４章　喜田盛遺跡土坑墓出土の人骨 …… 61
第５章　総 括 …… 66
　第１節　調査成果のまとめ …… 66
　第２節　喜田盛遺跡における中森期の様相について …… 68
　第３節　喜田盛遺跡の四箇地域及び石垣島周辺における位置付け …… 70

引用文献 …… 73
報告書抄録 …… 90

挿図目次

第１図 石垣島の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図 県道真栄里新川線事業計画図と喜田盛遺跡の位置 ・・・・・・ 3
第３図 喜田盛遺跡周辺の御嶽・井戸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第４図 石垣島のおける主要遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第５図 遺構全体図・南壁断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第６図 土坑墓１ ・・・11
第７図 土坑墓２・土坑墓３・焼土遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第８図 土坑・ピット・・ 14
第９図 土器１ ・・・23
第 10 図土器２ ・・・ 24
第 11 図土器３ ・・・ 25
第 12 図土器４ ・・・ 26
第 13 図土器５ ・・・ 27
第 14 図土器６ ・・28
第 15 図土器７ ・・29
第 16 図青磁・白磁 ・・31
第 17 図青花・中国産色絵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 18 図中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・台湾産陶器 ・・・・・・・ 35
第 19 図本土産陶磁器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 20 図沖縄産施釉陶器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 21 図沖縄産無釉陶器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 22 図沖縄産無釉陶器・陶質土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第 23 図金属製品・骨製品・石製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第 24 図土坑３出土土器・青磁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第 25 図ピット・土坑の時期区分検討図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第 26 図喜田盛遺跡遺構分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第 27 図四箇地域関連遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

図版目次

図版１ 発掘作業状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
図版２ 巻貝（１）・・・52
図版３ 巻貝（２）・・・53
図版４ 二枚貝 ・・54
図版５ 魚類・爬虫類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
図版６ 鳥類・哺乳類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
図版７ 人骨（１）・・・64
図版８ 人骨（２）・・・65
図版９ 調査区全景 ・・ 75
図版 10 土坑墓１ ・・・76
図版 11 土坑墓２・焼土遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図版 12 土坑１・２・３・４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
図版 13 土坑８ ピット１・23・36 ２～４グリッド断面 ・・・・・・ 79
図版 14 土器（１）・・・80
図版 15 土器（２）・・・81
図版 16 土器（３）・・・82
図版 17 土器（４）・・・83
図版 18 青磁・白磁・青花・中国産色絵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
図版 19 中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・
台湾産陶器・本土産陶器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図版 20 沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図版 21 沖縄産無釉陶器・陶質土器・金属製品・骨製品・石製品・・ 87
図版 22 近代陶磁器 ・・88
図版 23 骨製品・貝製品・円盤状製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

表目次

第１表 遺構観察一覧（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第２表 遺構観察一覧（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第３表 遺物出土一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第４表 土器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第５表 土器観察一覧（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第６表 土器観察一覧（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第７表 土器観察一覧（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第８表 青磁出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第９表 青磁観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 10 表白磁出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 11 表白磁観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 12 表青花出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 13 表青花・中国産色絵観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 14 表中国産褐釉陶器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 15 表タイ産褐釉陶器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 16 表中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・
台湾産陶器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 17 表本土産陶磁器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第 18 表本土産陶磁器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 19 表沖縄産施釉陶器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第 20 表沖縄産施釉陶器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第 21 表沖縄産無釉陶器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 22 表陶質土器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 23 表沖縄産無釉陶器・陶質土器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 24 表近代陶磁器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 25 表金属製品・骨製品・石製品観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 26 表貝製品観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 27 表円盤状製品観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 28 表貝生息地の分類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 29 表貝類遺体の種組成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 30 表貝類遺体の生息地類型組成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 31 表貝類遺体出土状況（巻貝） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 32 表貝類遺体出土状況（二枚貝） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 33 表脊椎動物遺体一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第 34 表魚類出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 35 表魚類・爬虫類図版掲載一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 36 表カメ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 37 表トリ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 38 表ニワトリ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 39 表ネズミ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 40 表ネコ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 41 表イヌ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 42 表ヤギ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 43 表鳥類・哺乳類図版掲載一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 44 表イノシシ／ブタ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 45 表ウマ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 46 表ウシ出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 47 表出土人骨一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第 48 表土坑墓１人骨の上肢骨計測値 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 49 表土坑墓１人骨の下肢骨計測値 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

第１章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

石垣市の市街地を東西に走る県道 79 号線真栄里新川線は、交通量が非常に多い幹線道路にあるにも係わらず、道路幅員が狭く市民生活及び観光産業の発展のため、その改善が求められていた。そのため沖縄県では、昭和 58 年度より本道路の街路改良工事を実施することになり、平成 22 年度において完了することになった。

一方、本工事に伴って多くの遺跡が確認されることになり、石垣市教育委員会（以下、市教委）が平成元年から 21 年度に亘って、石垣貝塚、平川貝塚、大川東遺跡、登野城遺跡、八重山蔵元跡、そして喜田盛遺跡において、記録保存を目的とした緊急発掘調査を行ってきた（第２図）。

喜田盛遺跡は、この街路改良工事に先立って石垣市教育委員会により平成 12 年５月に行われた試掘調査により、石垣市字新川小字喜田盛 53・54・63 ～ 67・75・76 番地の範囲において発見された。この結果を受けて、沖縄県土木建築部八重山土木事務所（当時は「八重山支庁土木建築課」、以下、八重山土木）は遺跡発見通知を沖縄県教育委員会（以下、県教委）に提出し、平成 12 年６月 22 日付で埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととして、本遺跡は記録保存の発掘調査を実施するよう指示された。それにより、石垣市教育委員会（以下、市教委）が発掘調査を実施することになったのだが、工事範囲の全ての用地取得は終了しておらず、調査が可能な範囲について順に進めることとなった。この調査は平成 12・13 年度に行われ、中森期（15 ～ 16 世紀）から近世に至る柱穴群、土坑墓などを検出し、集落跡であることが明らかになった（石垣市教委 2004）。

この調査時において、用地が取得されていなかった 63 － 2 番地については、平成 21 年度に持ち越されることになった。八重山土木は平成 21 年 11 月に、市教委へ平成 22 年上半期までに発掘調査を終了すべく協議を行った。しかし、市では既に次年度予算要求が終えてしまっており、市教委が発掘調査を受託することは困難となった。そこで、八重山土木は県文化課と協議したところ、県教委への分任事業として対応することが望ましいと判断され、平成 22 年度に県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が発掘調査・資料整理・報告書作成を行うことで調整がなされた。この内容については、県教委と県土木建築部（以下、土建部）の間で、６月１日付「真栄里新川線街路改良工事における埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」としてまとめた。なお、当該調査に掛かる費用は、本工事の主管課である土建部道路街路課から文化課へ予算分任された。

当センターではこの協定に基づいて、発掘調査の準備を進め、６月 22・23 日に本道路を管轄する八重山土木の担当部局である河川港湾都市班と調整し、現場は７月６日から８月６日までの予定で行うことになった。同時に、発掘作業員確保、重機による掘削、基準点測量などを発掘調査支援業務として、石垣市内に所在する土木設計コンサルタント業者を対象に指名競争入札を行い、有限会社南西土木設計に委託することになった。また、道路使用許可申請書を八重山警察署長あてに６月 30 日付で提出し、７月２日付で許可が下りた。

７月６日に、八重山土木担当に調査手順や工程を説明し、市教委にもその旨を説明し協力を仰いだ。また、南西土木設計とともに付近の下水・上水道、NTT ケーブルなどの埋設物の位置を確認し、７日より調査を開始することにした。

第２節　調査体制

喜田盛遺跡の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成 22 年度に発掘作業・資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

事業主体　沖縄県教育委員会　金武正八郎（教育長）

事業主管　沖縄県教育庁文化課　大城慧（課長）、島袋洋（記念物班長）、上地博（主任専門員）、久高健（指導

主事）

調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　守内泰三（所長）

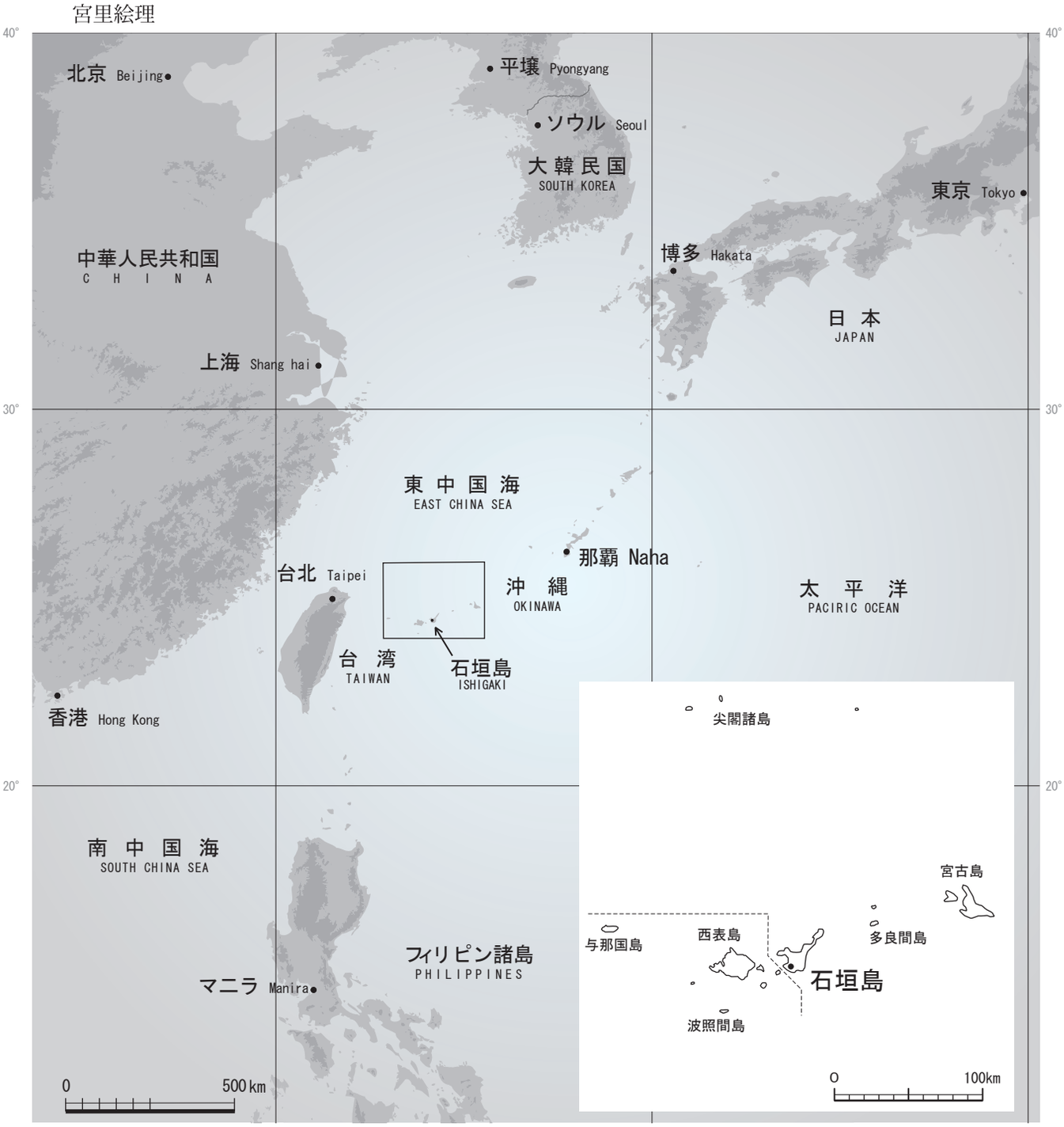
総務班　嘉手苅勤（班長）、玉寄秀人（主査）

調査班　総括…金城亀信（班長）

調査・資料整理担当…瀬戸哲也（主任）

調査協力…片桐千亜紀・徳嶺里江・波木基真

資料整理協力…池原直美・伊佐えりな・上田麻紀子・上地由紀子・上原美穂子・上原留美・請盛智秋・荻堂さやか・国吉咲子・崎原美智子・瑞慶覧尚美・高良三千代・照屋利子・比嘉登美子・比嘉なおみ・野村知子・宮里絵理

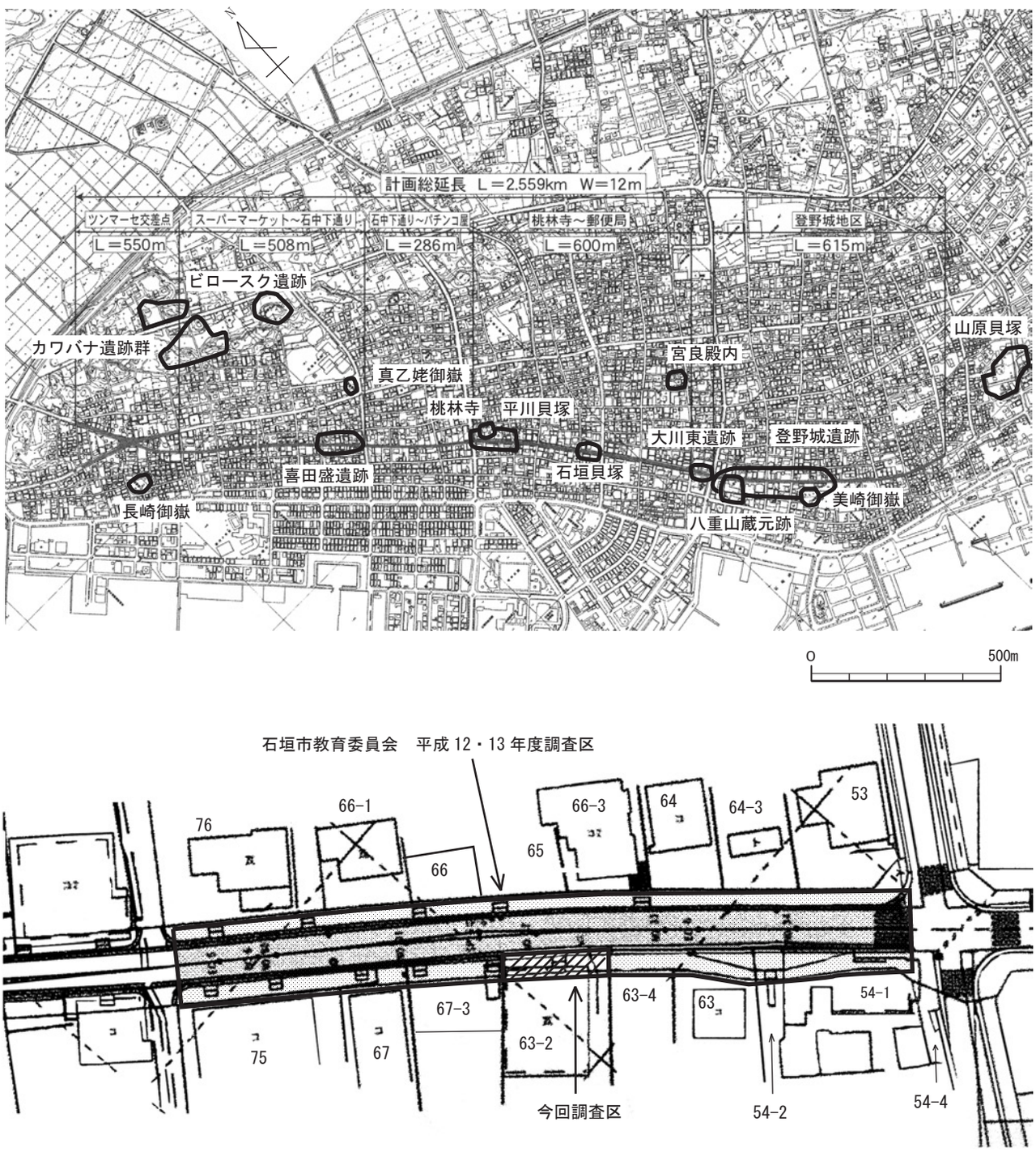


第１図　石垣島の位置

第３節　調査経過

発掘作業

発掘作業は平成 22 年７月７日から８月６日まで行った。調査対象地である新川 63 －２番地は、交通量が多い道路に隣接するため、歩道の確保・安全対策を十分に配慮して調査区を設定したところ、その調査面積は 50 ㎡となった（第２図）。以下、調査日誌の抄録で説明する（図版１）。



第２図　県道真栄里新川線事業計画図と喜田盛遺跡の位置

7月7日　重機による掘削を行い、近現代の盛土約80cmを除去し、近世及び中森期の遺物を含む遺物包含層を検出した。
7月8日　グリッド設定を行い、人力により遺物包含層の掘削を開始した。
7月14日　多くのピットの他、近代の土坑1、土坑2（調査時、水溜遺構）や、焼土遺構などを検出した。
7月20日　地山面まで掘削し、近代、近世、中森期のピットを中心とした遺構がほぼ同一面で確認した。遺構検出段階として全景の写真撮影を行った。
7月21日　検出遺構を半裁し、土層確認後、必要に応じて断面図作成、写真撮影を行い、完掘を進めていった。ピットを掘削中に、後に土坑墓1とする人骨頭部を確認した。
7月23日　土坑墓以外の遺構はほぼ掘削が終わったため、完掘段階として全景の写真撮影を行った。
7月27日　南西土木設計により遺構平面について電子平板測量を行った。
7月28日　平板測量図を元に遺構平面図を作成し、ピットの規模を計測した。
7月29日　調査区南壁の断面図作成。片桐主任、徳嶺嘱託員、県立博物館・美術館博物館班（藤田・山崎主任）の協力を受け、土坑墓1の掘削を開始した。調査を進めていくなかで、土坑墓1周辺で更に土坑墓2・3が存在することが判明した。
8月3日　土坑墓の掘削・図面作成を終了した。
8月4日　土坑1の断割りなどを行い、遺構調査を終了させた。
8月5日　重機により埋め戻しを開始した。
8月6日　埋め戻し終了。八重山土木や市教委に調査終了について報告した。

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、調査面積が50㎡と狭いながら、遺物収納コンテナ20箱を数えることになった。この出土遺物は、当センターから8月10日にその内容を県文化課へ報告し、八重山警察署には8月16日付にて埋蔵文化財発見について通知することにより遺失物法の手続きを経た。

出土遺物の洗浄は、発掘作業の進捗を見ながら、現場作業員が7月13日から8月6日にかけて行い、8月11日に当センターへ搬送された。当センターでは8月11日より資料整理を開始し、第一に遺物の出土地点や大まかな種類の確認を行った。遺物の注記については、非常に短期間での資料整理・報告書作成を行う必要があることから、出土遺物の中でも最も多い土器・瓦の注記については、株式会社パスコに委託し、8月31日より9月13日にかけて行われた。土器は本遺跡で最も多く、破片も比較的大きいため、接合に1カ月程度の期間を掛けてその復元に努めた。一方、量的には少ないが遺跡の時期や特徴を考える上で重要な中国・本土・沖縄産の陶磁器については産地・時期等の分類を行った。貝類の出土も非常に多く、その同定・集計にも時間を要した。獣魚骨については小片が多かったが、石垣島ではまだ情報量が少ないため、時間が許す範囲で種類の同定を行った。これらの遺物については、必要に応じて実測図・写真撮影を行い、報告書に掲載する図面・図版を作成していった。

遺構・層序については小面積の調査でもあり図面の量も多くないことから、現地での見解と大きな矛盾はなく、速やかに報告に必要な図面を選び出すことが出来た。本遺跡で最も重要な遺構である土坑墓から出土した人骨については、株式会社文化財サービスに委託し、土肥直美による形質人類学的な分析が行われた。

このような整理を経て作成した図面・図版については当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてトレース及びレイアウトを行い、編集ソフト（インデザイン）を用いて編集し、全て電子データにより印刷会社へ入稿した。

１．　調査開始前

２．重機掘削状況

３．人力掘削状況

４．土坑墓人骨検出状況

５．測量状況

６．埋め戻し状況

７．埋め戻し後

８．歩道整備後

図版１　発掘作業状況

第２章　位置と環境

地理的環境（第１～４図）

喜田盛遺跡（以下、本遺跡）は、石垣市字新川小字喜田盛に所在する。石垣市がある石垣島は、沖縄本島より南西約 400km に位置し、西表島や与那国島ともに大小 32 の島々で八重山諸島を構成している。石垣島南西部の南北１km、東西３km の範囲である新川・石垣・大川・登野城地域が市街地となっている。本遺跡が位置する新川を含めた先述の四地域を「四箇」と称して、古くから石垣島の中心地となっている。

石垣島の地形は、島の中央に県内最高峰の於茂登岳（標高 525.8 m）が位置し、その北側が低山地、南側が台地・砂丘となっている。本遺跡は、現在は埋め立てられてしまっているが、元来は島の南端縁辺に沿って東西に長く伸びていた砂丘上に位置し、標高は約３mである。本遺跡付近から北側に向かって標高が少し高くなり始め、北方約 300 m一帯からは標高 15 m前後の石灰岩低位段丘となる。つまり、本遺跡は砂丘と低位段丘の境に位置し、現在でも多くの井戸が見られ豊かな水量を誇っており、昔から住みやすい場所であったようだ。

歴史的環境（第４図）

石垣島における最古の遺跡は、近年の新石垣空港建設に伴って２万年前の人骨が複数発見された東海岸の白保竿根田原洞穴遺跡があるが、石器等は出土していない（片桐他 2011）。約 3,000 ～ 4,000 年前とされる下田原期には、西海岸の大田原遺跡（石垣市教委 1982）やピュウツタ遺跡（石垣市教委 1997 ａ）があり、先述の白保竿根田原洞穴遺跡では炉跡や墓も確認されている。これらの時期の遺跡は、本遺跡周辺では確認されていない。

約 2,000 年前から 11 世紀前後は無土器期と呼称される土器が出土しない時期で、東海岸の嘉良嶽東貝塚（県埋文 2009）や、北西端の崎枝赤崎貝塚（石垣市教委 1987）、西海岸の神田貝塚（県教委 1980）などがある。本遺跡から西２km の竿若西遺跡（県教委 1979）で貝斧などが採集されたが、土地改良により半壊されている。

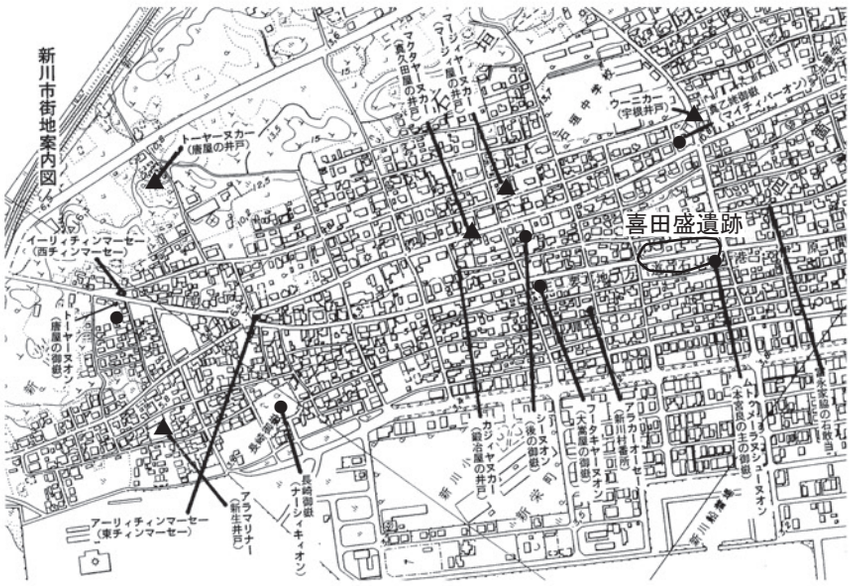
12 世紀からは、再び土器が出土し始め、石鍋を模倣したとされるもので、13 世紀までを新里村期としている。この時期の遺跡も現時点では数遺跡程度であるが、喜田盛遺跡より北方約 300 mのビロースク遺跡でこの時期を示す白磁玉縁碗やカムィヤキなどが多く出土している（石垣市教委 1983）。

13 世紀末～ 17 世紀初頭を中森期としているが、この時期になると遺跡が増加し、海岸縁辺部のほぼ全域に見られ 60 余遺跡を数える。この時期の遺跡は、ビロースク遺跡、国史跡のフルスト原遺跡（石垣市教委 1984）のようにやや小高い標高 20 m前後の段丘上に位置するものが多く、石垣で建物群を区画するものが見られる。中森期でも 15 世紀以降に遺跡が増加し、本遺跡周辺でも多く見られ、カワバナ遺跡群（県教委 1979）・平川貝塚（石垣市教委 1993 ｃ）・石垣貝塚（石垣市教委 1993 ａ・ｂ）・大川東遺跡・登野城遺跡（石垣市総務 2010）が見られる。また、富野岩陰遺跡（石垣市教委 2000）など洞穴や岩陰の利用も見られることや、名蔵シタダル海底遺跡では 15 世紀後半の青磁・白磁・褐釉陶器の散布が見られ、沈船の存在も想定されている。

近世、17 ～ 19 世紀は、パナリ焼を指標としてパナリ期と呼称している。また、この時期には名蔵窯跡などの瓦窯や、黒石川窯跡（石垣市教委 1993 ｄ）などの陶器窯などの生産遺跡が確認され、発掘調査も行われている。近世の八重山を管轄したとされる八重山蔵元跡（石垣市教委 1997 ｂ）では、当時の石垣や礎石が確認された。

民俗的環境（第３図）

本遺跡を取り囲むように４つの御嶽が位置している（石垣市総務 2002）。遺跡の東端は本宮良の主の御嶽（ムトゥメーラヌシューヌオン）があり、1624 年に八重山キリシタン事件とされる元宮良頭であった石垣永将が処刑された場所と伝わる場所で、「オンナー」とも言われている。遺跡より約 400 m北東へ離れた地点には、真乙姥御嶽（マイチィバーオン）、西端には大嵩屋の御嶽（フータキヤーヌオン）、北西約 200 mには後の御嶽（シーヌオン）がある。これらの御嶽がいつから存在したのかは不明であるが、遺跡の周囲を取り囲むように位置していることは興味深い。



第３図　喜田盛遺跡周辺の御嶽・井戸

1. 喜田盛遺跡
2. 平川遺跡
3. 石垣遺跡
4. 登野城遺跡（八重山蔵元跡）
5. 大川遺跡
6. ニラクス遺跡
7. ビロースク遺跡
8. カーフ山遺跡
9. カワバナ遺跡群
10. 石城山遺跡
11. 黒石川窯跡
12. 山原貝塚
13. パーイナーカー遺跡
14. 伝仲本村遺跡群
15. ウイヌスズ遺跡
16. 伝アラスク村遺跡
17. 崎原御嶽遺跡
18. フナスク貝塚
19. カンドウ原貝塚
20. フルスト原遺跡
21. 平喜名遺跡
22. 宮良第四遺跡
23. 宮良第三遺跡
24. 宮良第一遺跡
25. 白保真謝井戸周辺遺跡
26. 白保貝塚
27. ウイズ遺跡
28. 白保竿根田原遺跡
29. アブ遺跡
30. 嘉良嶽東貝塚
31. 桃里恩田遺跡
32. マンゲー山遺跡群
33. 伊野田遺跡
34. ナガタ原遺跡
35. 平野後方第二遺跡
36. 平野後方第一遺跡
37. 平久保御嶽遺跡
38. 吉野遺跡
39. 伝久志真村跡遺跡
40. 水浜遺跡
41. 伝ウッツヌ村跡遺跡
42. 野底石崎遺跡
43. 野底崎遺跡
44. 富野遺跡
45. ヤマバレー第二遺跡
46. ヤマバレー遺跡
47. ピュウッタ遺跡
48. 仲筋遺跡
49. 仲筋第二遺跡
50. 伝仲筋村跡遺跡
51. 仲筋貝塚
52. 仲筋キンバラ遺物散布地
53. 川平貝塚
54. 川平底地遺跡
55. 仲間満慶山墓地遺跡
56. 崎枝崎遺跡
57. 崎枝赤崎遺跡
58. 大田原遺跡
59. 神田遺跡
60. 名蔵遺跡
61. ハラツン岡遺跡
62. クードー遺跡
63. 名蔵シタダル海底遺跡
64. 皆野宿岡遺跡
65. 竿若東遺跡
66. 竿若西遺跡

第４図　石垣島における主要遺跡分布図

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

今回の調査については、新川喜田盛 63 番地２の道路整備範囲である面積 70㎡に対して調査区を設定する予定だった。しかしながら、既に隣接する範囲は工事が完了しており、現在も供用している道路であることから安全面に配慮した結果、約幅３ｍ×長 16.5 ｍ、合計 50㎡の調査区を設定することになった（第５図）。

発掘調査は、過去の市教委の調査を踏まえて、現代の盛土である地表面から約 60 ～ 80cm の土は、重機により全体的に掘削した。人力による掘削時の遺物採取については、調査区内を任意に長軸４ｍごとに区切り、西から東に向けて１、２、３、４グリッド（略す場合は１Ｇ…）と呼称して、４つのグリッドを設定した。

まず、近代の遺物包含層である褐色砂層（後述のⅠ層下部）を人力により掘削したが、中森期から近世の遺物も多く出土した。一方、１グリッドにおいては撹乱が厚さ 1.5 ｍ以上に及んでいたため、遺物が少なく遺構もほとんど確認できなかった。その後、次第に暗褐色砂層（後述のⅡ層）になると遺物が少なくなり、近世・近代の遺物も少量混入していたが主体を占めるのは中森期のものであった。そして、地山と考えた黄褐色砂層（後述のⅢ層）は、上層からの影響で黒っぽくなっているため、明確な遺構ラインが確認できない範囲もあった。そこで、適宜目安として５cm ごとに掘り下げて遺構の有無の確認を行い、ピット・土坑を検出できた。このように検出した遺構は半裁を行い、土色の確認、規模の計測、必要に応じて図面・写真の記録を行った。

一方、土坑墓については、上述のピット・土坑がほぼ検出した段階ではまだ確認できていなかった。しかしながら、ピット 39 を掘削していた際に頭蓋骨を確認したことにより、明確な平面プランを確認するため周辺を 20cm 程度下げることで土坑墓１を検出した。後述するが、これは土坑墓が他の遺構より下層に作られたというのではなく、埋土がピットの色調よりも淡く地山との判断が困難であったことが原因と考えられた。この段階で遺構確認は終えたと考え、土坑墓１以外のピットを全て掘削し、遺構平面図を電子平板で遺構プランを抑え、それを元に手実測により縮尺 20 分の１で平面図を作成した。

最終段階として、土坑墓１の調査を進める際に周辺の地山面も黒ずんでいたため、念押しの意味も込めて掘削を行ったところ、後に土坑墓３とした範囲で人骨がまとまって出土してしまい取り上げてしまった。その失敗を受けて、土坑墓１の西側において慎重に掘り下げたところ、土坑墓２を確認することが出来たのであった。

なお、現地での写真撮影は、35mm のフィルムカメラを用いて、各々白黒とカラーリバーサルフィルムを使用した。また、デジタルカメラ（ニコン D70　624 万画素）も使用している。

第２節　層序（第５図・図版 13）

前述してきたように、本遺跡では既に市教委による発掘調査が行われており、層序を７層として、遺物包含層が２層、地山である無遺物層が４層、最下層に琉球石灰岩が確認されている（市教委 2004）。今回の調査では粒径・土色による分層を行い、大きく５層に分けた。その結果、無遺物層の対応が明確ではない部分も残るが、遺物包含層については同様の理解であった。市調査との対応関係が分かるものについては記載する。

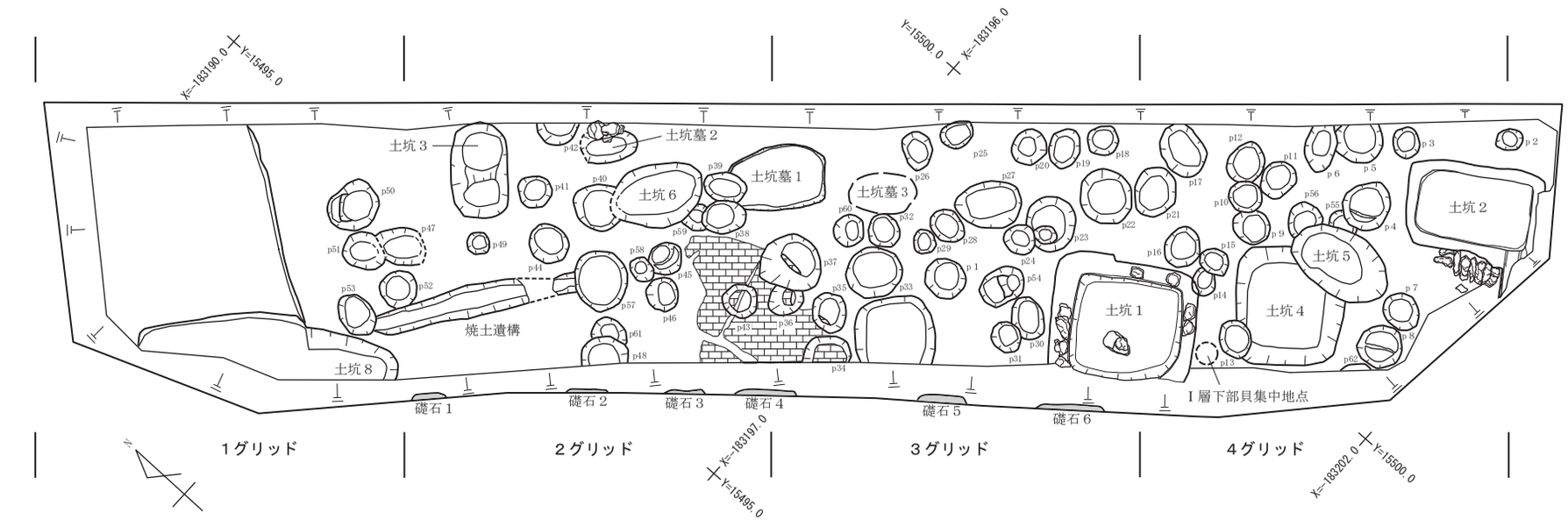
Ⅰ層上部　現代の盛土及び耕作土

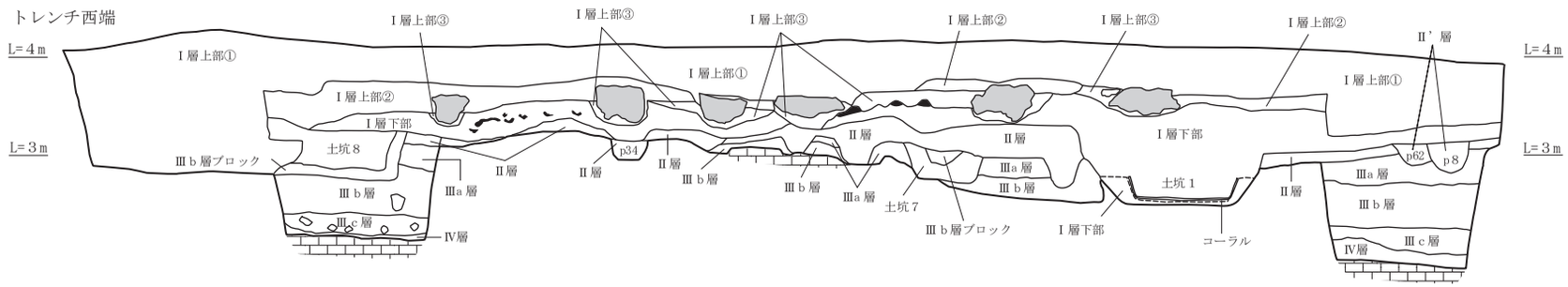
①にぶい黄褐色（2.5Y6/4）シルト混じり細～中砂

巨礫、タイル・コンクリートブロック、パイプ、空缶、プラスチック、ゴムなども多いことから、ここ十数年の造成土と思われる。

②オリーブ褐色（2.5Y4/4）細砂混じりシルト（酸化鉄、マンガン斑あり）

土壌の攪拌も進んでおり、酸化鉄やマンガン斑も見られることから耕作土、水田土壌の可能性もある。





Ⅰ層上部
①にぶい黄　2.5Y 6/4 シルト混中～細砂（巨礫ブロック パイプ タイル含む）
②オリーブ褐 2.5Y 4/4 細砂混シルト（酸化鉄マンガン斑あり）
③黒褐 2.5Y 3/2 中～粗砂

Ⅰ層下部
褐 10YR 4/4 シルト混 細～中砂（部分的にラミナがみられる）

Ⅱ層
暗褐 10YR 3/4 細砂

Ⅱ'層
明褐 7.5YR 5/6 細～中砂（Ⅲ層がⅡ層にブロック状に混じる）

Ⅲa層
明黄褐 10YR 7/6 中～細砂

Ⅲb層
明褐 7.5YR 5/6 細～中砂（わずかにシルト混じる）

Ⅲc層
黄褐 10YR 5/8 細～中砂（中礫サンゴに混じる）

Ⅳ層
深黄橙 10YR 8/4 粗砂（サンゴ中礫混じる）

礎石
ラミナ
岩盤

0　3m

第５図　遺構全体図・南壁断面図

③黒褐色（2.5Y3/2）細～中砂

本層には石灰岩礎石が据えられており、これらを据えるための埋土と思われる。

Ⅰ層下部　中森期～近世の遺物も多く含む近代の遺物包含層

褐色(10YR4/4)シルト混じり細～中砂。２・３グリッドでは灰白色中砂がラミナ状に混入している。土坑１・２・６などの埋土でもある。市調査Ⅰｃ層に相当と思われる。

Ⅱ層　中森期の遺物包含層

暗褐色(10YR3/4)細砂。近世以降の遺物もわずかに見られるが､混入と考えて良い出土量と思われる。また、多くの遺構の埋土である。石垣市調査Ⅱ層と相当する。

Ⅱ´層　暗褐色（10YR3/4）細砂～中砂

Ⅲ層がブロック状に混じっていることが多く、砂質の度合いが強い。遺構の埋土でもあるが、ピット８・68 では明確にⅡ層を切っていることが南壁断面で確認できた。しかし、このⅡ´層の遺構が全てⅡ層よりも新しいと言い切れるまでは確認できておらず、全体としてはⅡ層の範疇で捉えておく。

Ⅲ層　黄褐色砂層

無遺物層のため、地山と思われる。この上面は標高 3.3 m前後であり、先述したⅡ・Ⅱ´層を埋土とする遺構はこの面で確認できた。粒径でさらに３層に分けられる。石垣市調査では赤褐色砂層（Ⅲ層)、白砂層（Ⅳ層)、黄褐色砂層（Ⅴ層）が対応するが、各々の対応関係は確定できなかった。

Ⅲａ層　明黄褐色（10YR7/6）中～粗砂

Ⅲｂ層　明褐色（7.5YR5/6）わずかにシルト混じり細～中砂

Ⅲｃ層　黄褐色（10YR5/8）サンゴ中レキ混じり粗砂

Ⅳ層　白砂層　浅黄橙色（10YR8/4）サンゴ中レキ混じり粗砂

無遺物層であり、市調査では砂利混じり白砂層としているⅥ層に相当するものと思われる。

Ⅴ層　琉球石灰岩

１グリッドでは深掘りを行い、標高 2.1 mで確認した。

第３節　遺構

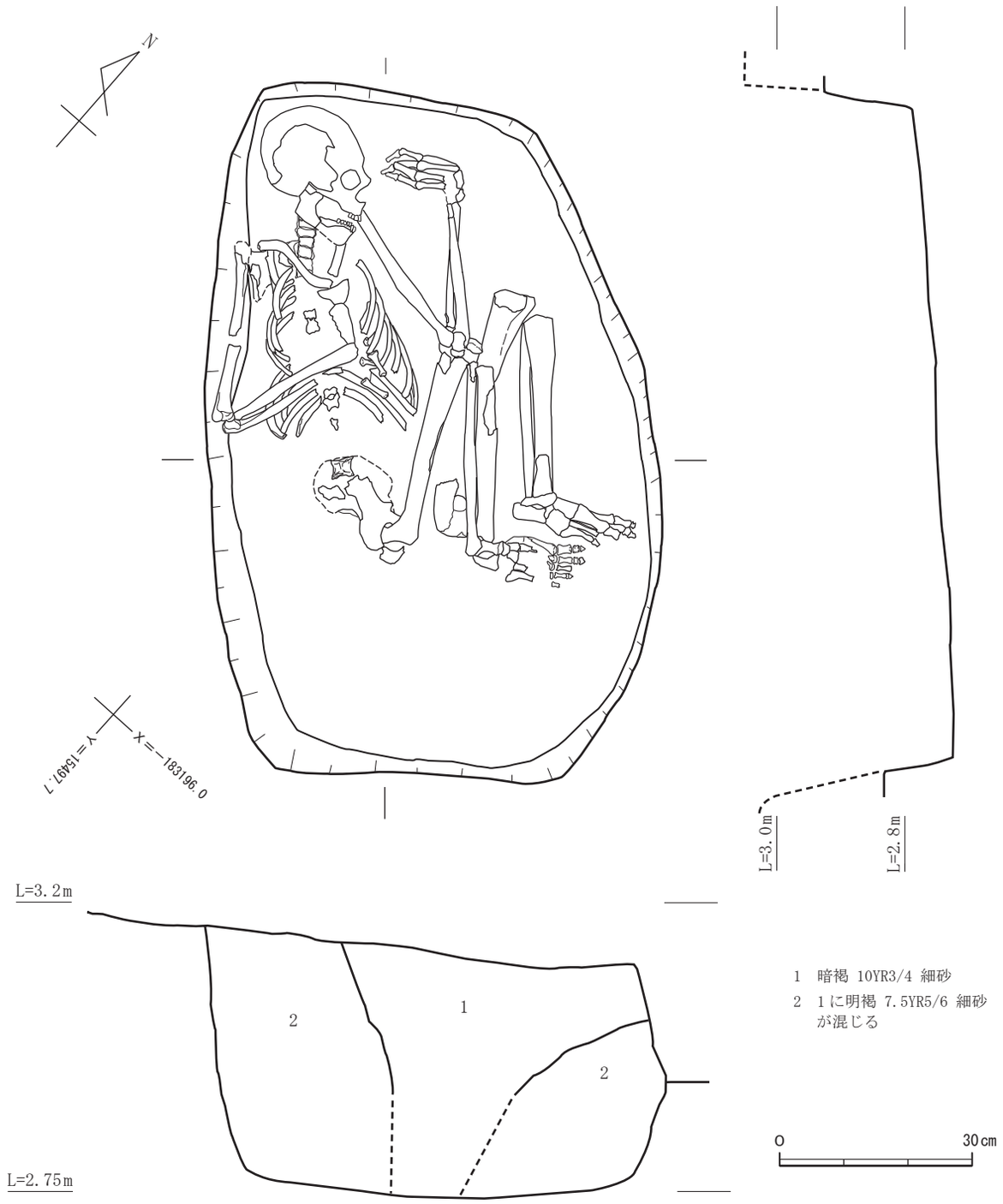
今回の調査で確認した遺構は土坑墓３基､焼土遺構１基､土坑８基､ピット 62 基､貝集中地点､礎石６基である。全体的な配置を述べると、撹乱が及んだ１グリッドを除き全体的に遺構が見られるが、２グリッドはその密度がやや低いように思われる。土坑墓は２・３グリッドの北端に集中し、近代の遺構である土坑１・２は４グリッドに位置している。これらの遺構の埋土は大まかに分けると､先述した層序のⅠ層下部､Ⅱ層､Ⅱ´層に相当できる。出土遺物との対応であるが、Ⅰ層下部を埋土とする遺構は近代であるが、Ⅱ・Ⅱ´層については瓦や沖縄産陶器や染付など近世の遺物が少量見られるが、多くは中森期の土器が主体である。

以下、種類毎に特徴的なものを記載し、個々の規模や遺物等ついては第１・２表を参照していただきたい。

１．土坑墓（第６・７図、図版 10・11）

２・３グリッド北端に集中するように、土坑墓が３基確認された。壮年女性が埋葬された土坑墓１を中心として、北西側に乳児が埋葬された土坑墓２、南東側に幼児が埋葬された土坑墓３が検出されている。どの土坑墓もその主軸は東に 40°の方向である。

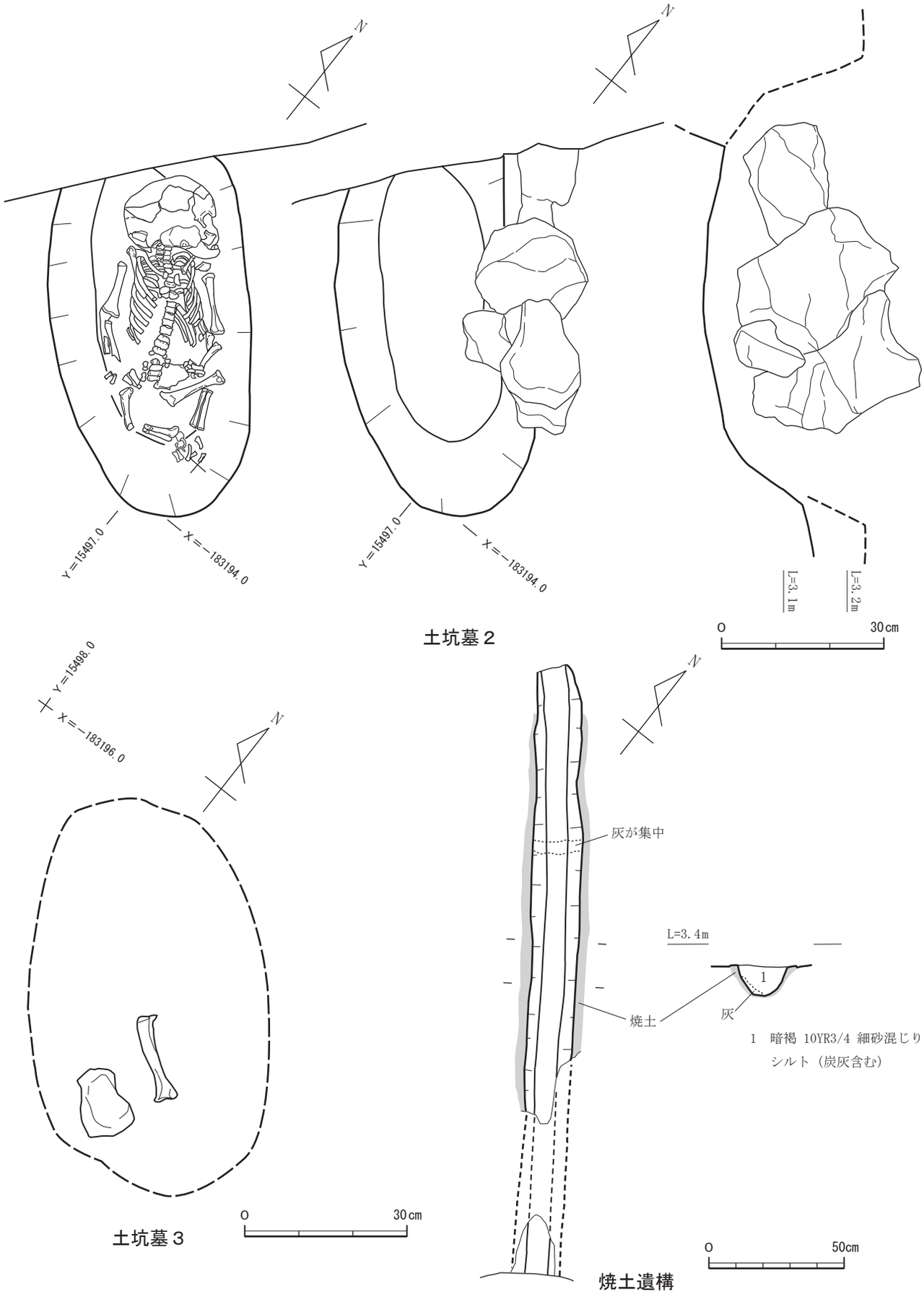
土坑墓１　土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑は略方形を呈し、その規模は長軸 108cm、短軸 70cm、深さ 40cm を測る。先述したように、本土坑墓周辺は基盤であるⅢ層自体が黒ずんでいたため、平面プランを明確に抑えられなかったので､周辺を 20cm ぐらい下げて確認した。被葬者は人骨の状況から壮年女性(30



第６図　土坑墓１

代）と推定される。埋葬姿勢は体を仰向けにし、足を強く曲げる仰臥強屈葬である。頭位は北東を向く。被葬者は、土坑の北西側に偏っており、南西側に 30cm × 60cm 程度の空間が見られている。この土坑プランについては先述したように周辺を掘り下げて念押しを行っているので問題はないと考えているが、この空間がある理由については本来は何らかの有機物があったのかなどと考えられるが、現時点では不明である。

被葬者の姿勢を更に細かく記載する。体部は上を向くが、顔は左を向く。左腕は土坑墓底部に密着しており、上腕を肋骨の脇に配し、肘を上方に強く折り曲げる。手首はさらに折り曲げて指を頭蓋眉間部に向けている。右腕も上腕までは底面壁際に密着させるが、折り曲げた肘はやや上方を向き、肋骨の上に乗せている。椎骨は腰椎骨まで上を向く。左寛骨は上を向くが、右寛骨は内側に倒れている。両足はよく揃っているが、左側に倒れてお



第７図　土坑墓２・土坑墓３・焼土遺構

り、大腿骨を上方に強く折り曲げ、膝から下は下方に向かって強く折り曲げる。踵から先は脛骨とほぼ直角となり、左側を向く。

各関節はそれぞれの骨ときれいに関節し解剖学的位置関係をよく留めており、一部の部分を除いて乱れがほとんどない。乱れが見られる部分は右手骨である。これらは左肋骨内に埋没している。さらに、両膝蓋骨が確認されなかった。検出時の保存状態は良好で、解剖学的位置関係をきれいに留める人骨であったにもかかわらず、膝蓋骨が確認されなかったことは大きな疑問である。

以上の検出状況から埋葬状況を考える。人骨は解剖学的位置関係を良く留めており、右手骨を除き乱れがほとんどない。このことは、埋葬直後にはすでに、遺体の周囲が濃密に密閉された環境であったことを示唆する。右手骨のみが乱れている状況は、遺体の腐食にともなって肋骨内に空間が生まれ、肋骨の上に配されていた右手骨が、その中に落ち込んだことを示している。つまり、埋葬された遺体は、肋骨が土圧によって倒れるよりも早い段階に、右手骨が肋骨内に落ち込んでいた可能性が高く、密閉された空間であったことと矛盾しない。

さらに、人骨は強い屈葬姿勢を呈し、両足がきれいに揃った状態で左に倒れて検出された。解剖学的位置関係にみだれはない。このことから、埋葬時にはすでに下肢は左を向き、土坑底面にほぼ密着した状態であったことが考えられる。左寛骨は上を向き、右寛骨は内側に倒れる状況で検出されているが、もともと下肢がやや左を向けた状態で埋葬されていれば、遺体の腐食にともなって寛骨が内側に倒れることとなり、矛盾しない。このような状況で埋葬するためには、死亡後、死後硬直が始まる前に下半身を紐などで縛っていた可能性がある。両腕はそろっておらず、自然な配置状況を呈することから、下半身のみを固定していたのだろう。

最後に、良好な保存状態で解剖学的位置関係を留めていたのに膝蓋骨が確認されなかった理由であるが、両大腿骨遠位端、脛骨近位端も壊れた状況であったことから、埋葬前には、すでに膝蓋骨が無くなっていた可能性を指摘したい。その要因として、遺体の下肢を強く折り曲げる必要があったことなどが考えられる。死後硬直が始まっており、その必要性が高まったのかもしれない。このような事例は確認したことがないため、推測の域をでることができないが、今後、同様な事例をもつ人骨の状況について検討してみたい。

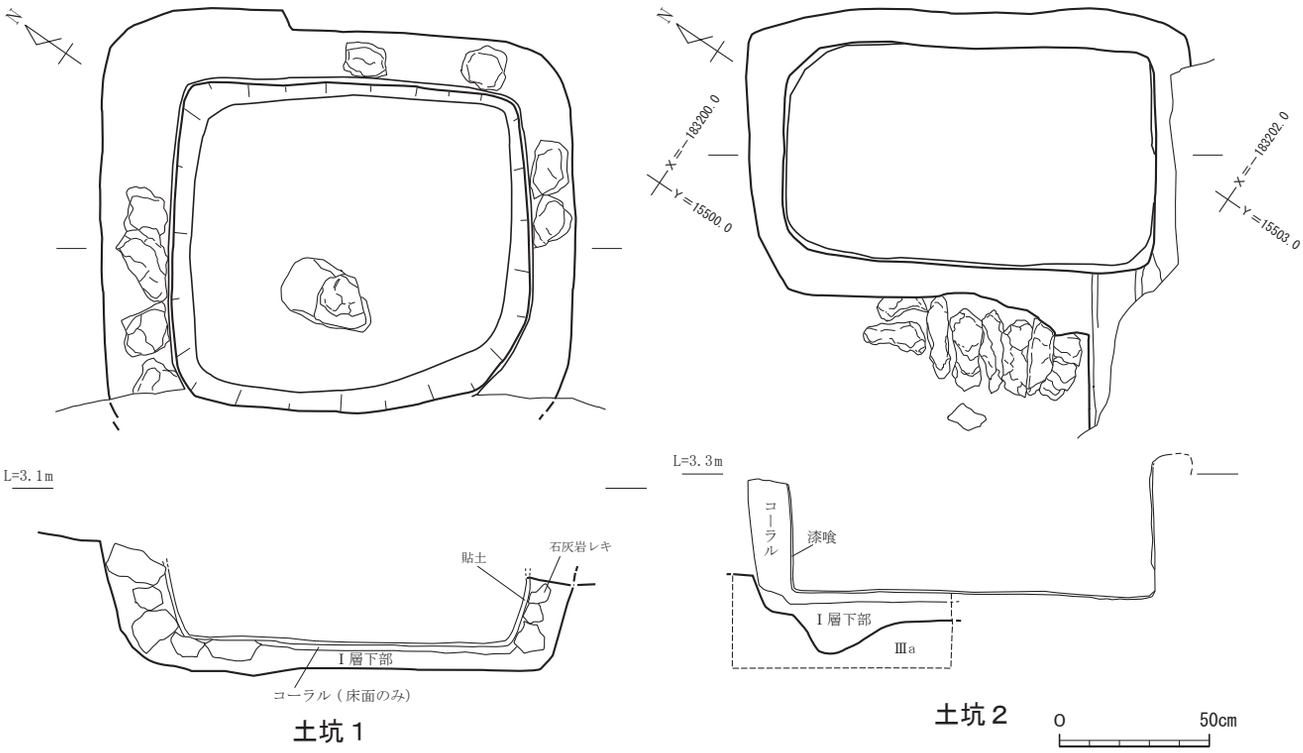
今回の埋葬人骨の調査は、検出段階から解剖学的知識を有する者によって進めることができたため、詳細な埋葬状況を考えることが可能となった。具体的には、膝蓋骨がないことを現場で気づいたため周囲により注意を払えたことや、脆弱なため取り上げが困難だった腰椎骨の向きについても、検出状況で上を向くことが確認できた。人骨は脆く壊れやすいため、検出時点で解剖学的知識に基づき調査を進めることが重要と思われる。

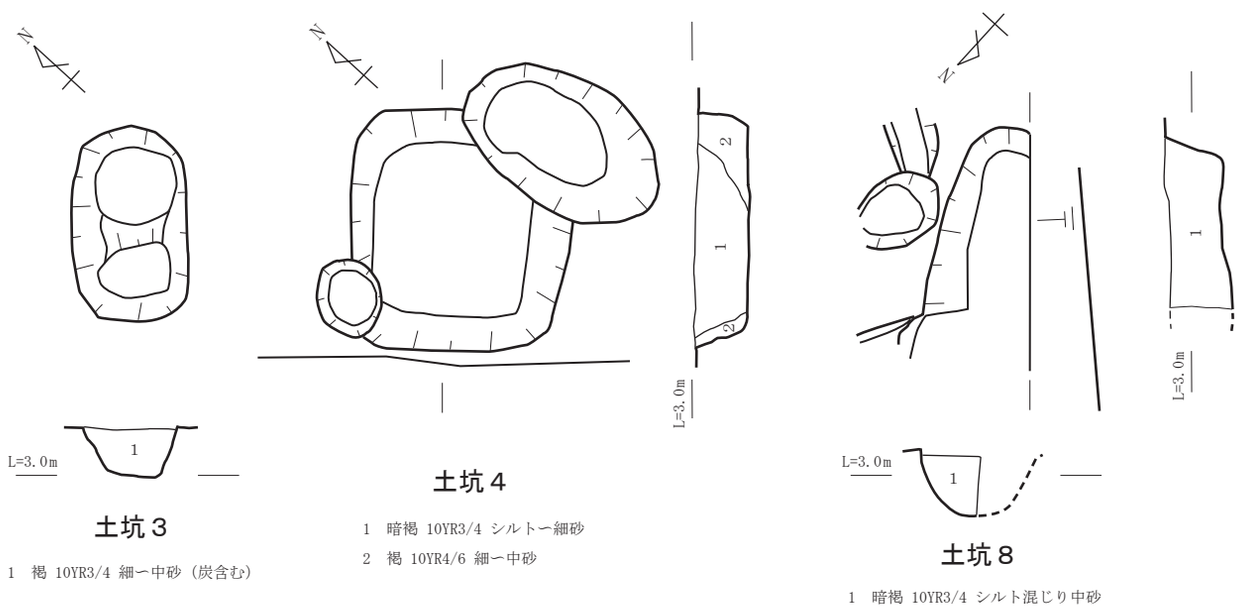
土坑墓２　土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑は楕円形を呈し、その規模は長軸 65cm、短軸 33cm、深さ推定 20cm を測る。被葬者は９ヶ月前後の乳幼児と推定される。埋葬姿勢は体を仰向けにし、足がやや曲がる。詳しく観察すると、体は上を向くが、顔は土坑墓１人骨と同様左を向く。両腕は土坑墓底面に密着するように両脇に自然に配されており、土坑墓１人骨と異なり折り曲げられてはいない。右足はやや曲がった状況であるが下方を向いている。左足は膝を立てた状態で土坑壁際に支えられる状況であった。一見屈葬に見えるが、乳幼児であることから、もともとやや曲がった状態で自然に埋葬されたものと推定される。この意味で、強い屈葬が意識された土坑墓１人骨とは埋葬状況を異にする。

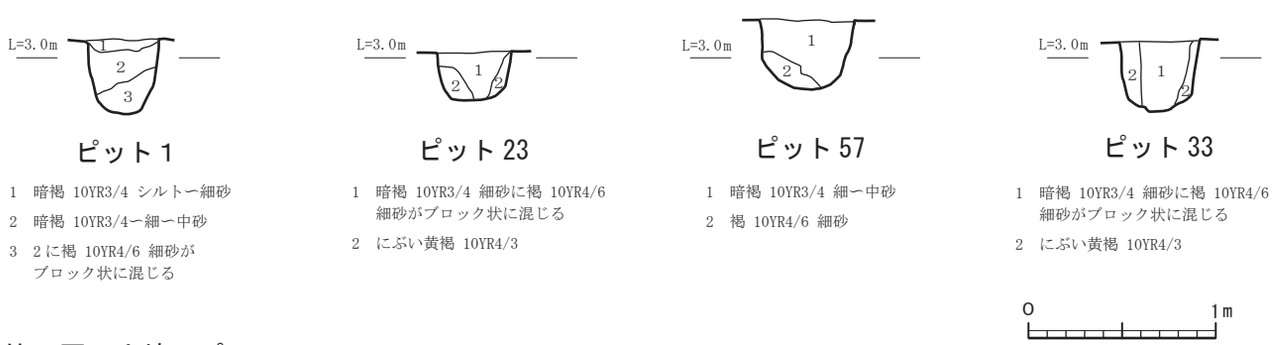
土坑上部の東側に人頭大の石灰岩礫が３つ配されている。もともと、検出が困難だったため、これ以上の数の石が配されていた可能性もあるが、大きな礫はなかったと記憶する。

土坑墓３　土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑墓１が検出されたことから、周辺の掘削を進める過程で確認された。土坑プランを検出することが困難な土壌であり、幼児骨であったことから、その多くを取り上げた状態で確認した。大腿骨のみ現位置で押さえることができた。そのため、詳細な情報を回収することができなかったが、人骨の所見では、土坑墓２の乳児よりはやや成長した段階の幼児が埋葬されていた。土坑の規模は推測の域をでないが、土坑墓２とほぼ同じサイズであったと考えられる。

人骨の解剖学的所見は、第４章を参照していただきたい。


N
L=3.1m
貼土
石灰岩レキ
Ⅰ層下部
コーラル（床面のみ）
土坑１
X＝－183200.0
Y＝15500.0
X＝－183202.0
Y＝15503.0
L=3.3m
コーラル
漆喰
Ⅰ層下部
Ⅲa
土坑２
0
50cm


N
L=3.0m
1
土坑３
1　褐 10YR3/4 細ー中砂（炭含む）
2
1
2
L=3.0m
土坑４
1　暗褐 10YR3/4 シルトー細砂
2　褐 10YR4/6 細ー中砂
1
L=3.0m
L=3.0m
1
土坑８
1　暗褐 10YR3/4 シルト混じり中砂


L=3.0m
1
2
3
ピット１
1　暗褐 10YR3/4 シルトー細砂
2　暗褐 10YR3/4ー細ー中砂
3　2に褐 10YR4/6 細砂がブロック状に混じる
L=3.0m
1
2
2
ピット 23
1　暗褐 10YR3/4 細砂に褐 10YR4/6 細砂がブロック状に混じる
2　にぶい黄褐 10YR4/3
L=3.0m
1
2
ピット 57
1　暗褐 10YR3/4 細ー中砂
2　褐 10YR4/6 細砂
L=3.0m
2
1
2
ピット 33
1　暗褐 10YR3/4 細砂に褐 10YR4/6 細砂がブロック状に混じる
2　にぶい黄褐 10YR4/3
0
1m

第８図　土坑・ピット

２．焼土遺構（第７図、図版 11）

焼土遺構は２グリッドで１基確認している。

この遺構は、規模が長軸 230cm、短軸 18cm、深さ 12cm を測り、焼土帯が約２cm 見られており、非常に被熱している。埋土はⅡ層で、多くの炭化物が含まれ、部分的に白炭になっているものもある。遺構の両端は別の遺構で切られているため、正確な長軸は不明だが 250 ～ 280cm 程度であったものと思われる。遺物は土器や貝が見られたが多くない。

３．土坑（第８図、図版 12・13）

土坑は８基確認している。土坑の時期であるが、土坑１・２・６は埋土がⅠ層下部であり、出土遺物では中森期のものも多いが沖縄産陶器・瓦・近代陶磁器が出土しているので、下限は近代とする。土坑４・６・８は清代青花や染付が出土していることから近世の可能性が高く、また土坑５は切り合い関係から土坑４よりは新しい。一方、土坑３・７については土器・青磁・褐釉陶器と中森期の遺物で限定できる。特に土坑３は一定量の土器と青磁剣先蓮弁文碗が共伴してみられ、中森期における食器組成を示す資料と思われる。

土坑の中で特徴的なものとして、土坑１・２がある。これらは形態と構築技法がやや異なるが、時期的に近代であり、漆喰や貼土により床・壁面を固めたという点で共通している。これらの埋土には陶磁器や骨などの多くの遺物が見られ、最終的には廃棄場として利用されていたと思われるが、水を溜めることが出来るような構造でもある。以下、構築技法を中心にそれぞれの特徴を述べる。

土坑１は、約 150cm を測る方形の穴を掘削後、土を床面には 10cm、壁面は拳大の礫も用いながら 20cm 程度埋める。次に、床面にはコーラル（石灰岩細礫混じり土）を 2cm 程度敷き、壁面にかけて厚さ 1cm 前後の硬く締まった土が貼り付いているような状況で、一辺 110cm の方形を呈している。この土の表面は赤褐色を呈しており、いわゆる三和土（叩き土）と呼ばれるようなものに類している。

土坑２は、深さ 20cm の穴を掘り、コーラルを床面が５cm、壁面が 15cm を積み固めて、その表面に漆喰を張っている。この内法は長軸 125cm、短軸 75cm で平面が長方形を呈し、深さは 47cm を測る。南東隅には南から水を通すような幅 17cm、深さ２cm の溝状の注ぎ口がある。

その他の土坑は性格を限定できるものはないので、特徴をまとめる。土坑３・５・６・８は長軸１m前後の平面が楕円形を呈している。また、土坑４は 140 × 105cm の平面が方形を呈しており、埋土は両端が流れ込むような堆積である。

４．ピット（第８図、図版 13）

ピットは 62 基確認している。埋土はピット 38・39 のみがⅠ層で、他はⅡ層もしくはⅡ´層である。径は 30 ～ 50cm の間である。深さで見ると、10cm 以下が 14 基、11 ～ 29cm が 30 基、30 ～ 45cm 以上が 18 基である。

ピットの多くは、その規模から柱穴と考えられるもので、堆積状況からでもピット 23・33 のように両側と中央部の埋土に違いが見られ、柱痕と柱を立てる際の埋め土という関係が想定される。しかしながら、本調査区は狭小のためもあり、明確な建物プランを確認することは出来なかった。ただ、先述した土坑墓と切り合うものは先述のⅠ層を埋土とするピット 39 しかないため、両者は同時性をもったものと考えられる。

５．貝集中地点（第５図、図版 12）

４グリッドにおいて、Ⅰ層下部を掘削中に、径 50cm の範囲にアラスジケマンガイなどの二枚貝が集中していた地点があった。Ⅰ層下部は近代の包含層であるが、後述するが貝種はⅡ層の遺構に近い傾向があった。

６．礎石（第５図、図版 13）

南壁際にて長さ 40 ～ 60cm､厚さ 20 ～ 40cm の石灰岩礎石を６基確認した。その間隔を（cm 単位）で記すと、西から礎石１（170）礎石２（105）礎石３（85）礎石４（205）礎石５（140）礎石６となる。これらは現在の道路の軸線に並行しているので、一つの建物跡であった可能性が高い。時期的には、Ｉ層下部を掘り込み、耕作土と考えられるＩ層上部②に覆われているので、現代の中でも古い段階と思われる。

第１表　遺構観察一覧（１）

遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	埋土	遺物	貝・骨
Ｐ１	40	40	45	2.63	Ⅱ	土器・青磁・沖施・沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(4)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)､ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾆｼｷｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｵｷﾅﾜｲｼﾀﾞﾀﾐ（1）、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(9)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ（1）、ｸﾓｶﾞｲ(1)、ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ(1)、ﾘｽｶﾞｲ(1)、獣骨
Ｐ２	27	25	25	2.77	Ⅱ´		ｲｯｷﾏｲﾏｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(3)、ｵｷﾅﾜﾔﾏﾀﾆｼ(1)
Ｐ３	30	26	25	2.71	Ⅱ´	土器	ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(3)、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(1)
Ｐ４	54	46	40	2.58	Ⅱ	土器･沖無	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(7)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(9)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ(1)、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(1)、ｱﾏｵﾌﾞﾈｶﾞｲ(1)、ウマ、魚骨
Ｐ５	44+	46	10	2.83	Ⅱ´	土器	ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(3)、ﾏﾙｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｺｼﾀﾞｶｻｻﾞｴ(1)､ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｽﾐﾚﾀﾞﾏ?(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾐﾆﾅ(1)、ｼｵﾎﾞﾗ(1)
Ｐ６	50+	35	20	2.71	Ⅱ´	土器	ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(2)、ｺｼﾀﾞｶｱﾏｶﾞｲ(1)、ﾘｽｶﾞｲ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)
Ｐ７	35	33	15	2.75	Ⅱ	土器	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(4)
Ｐ８	50	45	40	2.48	Ⅱ	土器･沖無	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(9)、ﾏﾀﾞﾗｲﾓ（1）、ﾏｶﾞｷｶﾞｲ(1)、ｺｵﾆｺﾌﾞｼ(1)、ﾆｼｷｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)
Ｐ９	36	32	35	2.63	Ⅱ	青磁･褐釉・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(3)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ（1）、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｶﾈﾂｹｷｸｻﾞﾙ(1)
Ｐ10	37	31	5	2.86	Ⅱ´	土器	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(2)、ｵｷﾅﾜﾔﾏﾀﾆｼ（1）、ｺｼﾀﾞｶｻｻﾞｴ（2）
Ｐ11	40	35	15	2.75	Ⅱ´	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ニワトリ
Ｐ12	44	38	10	2.84	Ⅱ´	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)､ﾍﾞﾆｴｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(3)
Ｐ13	40	35	25	2.87	Ⅱ	土器	
Ｐ14	28+	24	5	2.72	Ⅱ´	土器	獣骨
Ｐ15	32	26	5	2.76	Ⅱ´	土器	ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（2）
Ｐ16	44	38	15	2.64	Ⅱ´		ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（3）、ﾔｸｼﾏﾀﾞｶﾗ(1)
Ｐ17	52	43	25	2.71	Ⅱ	土器･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)､ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾇﾉﾒｶﾞｲ(1)、ｵｵﾄﾘｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ﾆｼｷｳｽﾞ(1)、ｺｼﾀﾞｶｻｻﾞｴ(2)、ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ(1)
Ｐ18	27	27	20	2.74	Ⅱ´	土器･青花（徳化）・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｿﾒﾜｹｸﾞﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ﾆｼｷｳｽﾞ（1）、ｼｵﾎﾞﾗ(1)
Ｐ19	35	27	15	2.80	Ⅱ´		ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(2)、ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ(1)､ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（2）、ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ(1)
Ｐ20	34	30	15	2.81	Ⅱ´		
Ｐ21	48	42	10	2.76	Ⅱ´	土器･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）
Ｐ22	53	53	10	2.75	Ⅱ´	土器･瓦･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）
Ｐ23	56	45	35	2.64	Ⅱ	土器･褐釉・沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(4)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(1)、ｼｬｺﾞｳｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜﾔﾏﾀﾆｼ（1）、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（5）、ﾏｶﾞｷｶﾞｲ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｷｲﾛｶﾆﾓﾘ（1）、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(1)
Ｐ24	32	30	20	2.75	Ⅱ´	土器	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ﾆｼｷｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)
Ｐ25	30	25	20	2.80	Ⅱ´	土器	ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)
Ｐ26	36	28	15	2.80	Ⅱ´	土器・青磁･沖施	
Ｐ27	62	44	25	2.65	Ⅱ´	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ（2）、ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(5)、ｶﾘｶﾞﾈｴｶﾞｲ（1）、ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(4)、ﾘｭｳｷｭｳﾐﾆﾅ(1)、ﾔﾅｷﾞｼﾎﾞﾘｲﾓ（1）、ﾎｳｼｭﾉﾀﾏ(1)、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(1)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ﾒｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ（1）、ﾏﾙｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｺｼﾀﾞｶｱﾏｶﾞｲ(1)、ｺｵﾆﾂﾉｶﾞｲ(1)
Ｐ28	35	30	15	2.80	Ⅱ´	土器･褐釉･タイ･沖施	獣骨
Ｐ29	23	23	10	2.84	Ⅱ´	土器	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)､ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ﾏﾙｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)
Ｐ30	40	30	20	2.77	Ⅱ´	土器･褐釉・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)､ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ（1）、ﾏﾙｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｱﾏｵﾌﾞﾈｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（3）、魚骨
Ｐ31	33	25	30	2.69	Ⅱ´		ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（4）
Ｐ32	35	33	15	2.80	Ⅱ	土器・青磁･沖施・沖無･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾅﾐﾉｺ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、ウシ
Ｐ33	50	50	30	2.77	Ⅱ	土器・白磁･青花（徳化）・褐釉･沖施･沖無	ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ﾘｭｳｷｭｳﾊﾞｶｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾋﾚｼﾞｬｺｶﾞｲ(1)､ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（2）、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ（1）、ｲｯｷﾏｲﾏｲ(1)、ウシ・ハマフエフキ
Ｐ34	50	25+	10	2.97	Ⅱ´	土器･瓦	ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(1)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)
Ｐ35	43	37	10	2.97	Ⅱ´		
Ｐ36	35	28+	10	2.97	Ⅱ´	土器	
Ｐ37	65	60	20	2.89	Ⅱ´	土器	ﾂﾉﾏﾀﾓﾄﾞｷ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）
Ｐ38	48	35	20	2.90	Ⅰ	土器・青磁･沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(44)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(2)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ﾅﾝﾖｳｸﾛﾐﾅｼ（1）、獣骨
Ｐ39	45	25	25	2.85	Ⅰ	土器･青花（徳化）・瓦･近代陶磁	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)､ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(3)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ﾆｼｷｳｽﾞ(1)、ﾔﾅｷﾞｼﾎﾞﾘｲﾓ（1）、ｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ(1)、ｳﾈﾚｲｼﾀﾞﾏｼ(1)、獣骨

第２表　遺構観察一覧（２）

遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	埋土	遺物	貝・骨
P40	50	45	30	2.77	Ⅱ	土器･沖施・沖陶･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(4)､ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｵｼﾗﾅﾐ(1),ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(2)、ﾎﾗｶﾞｲ(1)、ﾅﾝﾖｳｸﾛﾐﾅｼ(1)、イノシシ/ブタ、ハマフエフキ
P41	33	30	20	3.01	Ⅱ	土器･褐釉･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)､ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、獣骨、ハマフエフキ
P42	43	30+	15	3.04	Ⅱ´	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(2)、獣骨
P43	40	35	5	3.08	Ⅱ´		
P44	40	38	30	2.96	Ⅱ	土器･青花（徳化）・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(3)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｵｵｼﾗﾅﾐ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)､ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)､ｾﾝﾆﾝｶﾞｲ(1),ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ(1)、ｵﾆｺﾌﾞｼｶﾞｲ(1)、獣骨、ハタ
P45	33	33	40	2.80	Ⅱ	土器･青花（徳化）・染付・沖施・沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(3)、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(1)、ｶﾘﾘｶﾞﾈｴｶﾞｲ(1)、ｴｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ(1)､ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ(1)､ｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ(1)、獣骨
P46	40	35	30	2.95	Ⅱ	土器･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(5)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾏｽｵｶﾞｲ(1),ｾﾝﾆﾝｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｳﾐﾆﾅ(1)､ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(6)、獣骨
P47	40+	40	30	2.77	Ⅱ´	土器･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、獣骨、魚骨　※P47・51は遺物を同時に取り上げ
P48	46	33+	20	3.01	Ⅱ´	土器･沖施・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾋﾒﾂｷｶﾞｲ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、ｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ(1)
P49	25	23	10	3.11	Ⅱ		
P50	58	52	30	2.81	Ⅱ	土器･青磁	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)､ﾁｮｳｾﾝﾌﾃﾞ(1)
P51	40	38	30	2.77	Ⅱ	土器･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)　※P47・51は遺物を同時に取り上げ
P52	35	30	15	3.03	Ⅱ	土器	
P53	44	35	25	2.97	Ⅱ		
P54	43	30	35	2.63	Ⅱ´	土器･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(3)､ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｾﾝﾆﾝｶﾞｲ（1）、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（1）、ｸﾓｶﾞｲ(1)
P55	20+	20+	15	2.80	Ⅱ´		
P56	44	32+	10	2.81	Ⅱ	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)､ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ（9）、ｳﾈﾚｲｼﾀﾞﾏｼ(1)
P57	63	53	35	2.88	Ⅱ	土器･沖施・沖無・瓦	ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(3)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)､ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(6),ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1),ｷｲﾛﾀﾞｶﾗ(1)
P58	27	22	30	2.87	Ⅱ	土器･褐釉・沖無･瓦	ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(5)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ﾋﾒﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾊﾞｶｶﾞｲ(1),ｷｲﾛﾀﾞｶﾗ(1),ﾆｼｷｳｽﾞ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、獣骨・魚骨
P59	35	25+	35	2.80	Ⅱ´	土器・青磁･沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(3)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)､ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、獣骨
P60	35	33	15	2.77	Ⅱ	土器･沖無・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ（1）、ﾅﾂﾒﾓﾄﾞｷ（1）、ﾘｭｳｷｭｳｳﾐﾆﾅ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)、獣骨
P61	32	24+	20	3.04	Ⅱ	土器･青花（福建）・瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｶｶﾀﾍﾞ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(1)
P62	32+	?	20	2.68	Ⅱ		
土坑１	158 (118)	推定150 (110)	42+ (22+)	2.61	Ⅰ	土器･青磁・青花（景徳鎮・徳化・福建・漳州）・褐釉・染付・沖施・沖無・瓦,･近代陶磁	貝類は第31･32表、イノシシ/ブタ、ウシ、カツオ他魚骨
土坑２	推定150 (125)	95 (72)	57 (47)	2.90	Ⅰ	土器・沖施・瓦･近代陶磁	貝類は第31･32表、イヌ、カツオ他魚骨
土坑３	104	55	35	2.84	Ⅱ	土器・青磁･褐釉	ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(3)、ｵｵﾄﾘｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾍﾞﾆｴｶﾞｲ(1)、ｶﾘﾘｶﾞﾈｴｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(4)、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(1)、ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(27) 、ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ(1)、ﾀｹﾉｺｶﾆﾓﾘ(1)、ﾋﾒﾎﾝﾀﾞｶﾗ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(4) 、トリ、ウシ、ハタ科、ハマフエフキ
土坑４	140	105	30	2.67	Ⅱ	土器・青磁･染付･沖施	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(12)、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(2)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(12)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾅﾐﾉｺ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ｴｶﾞｲ(1)、ｳﾗﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ(1)、ﾎｼﾈｽﾀﾞ(1)、ﾄﾐｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｳﾐﾆﾅ(1)、ﾎﾗﾀﾞﾏｼ(1)、ｵｷﾅﾜｲｼﾀﾞﾀﾐ(1)、ｺｼﾀﾞｶｱﾏｶﾞｲ(2)、ｶﾞﾝｾﾞｷﾎﾞﾗ（1）、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(22) 、ｲｯｼｷﾏｲﾏｲ(1)、獣骨
土坑５	107	67	25	2.71	Ⅱ	土器・青磁	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ（9）、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(2)、ﾍﾞﾆｴｶﾞｲ(1)､ﾋﾒｼﾞｬｺｶﾞｲ(1)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ﾋﾒﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾕｷﾉﾐｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1)、ｶﾝｷﾞｸ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(9) 、ｱﾏｵﾌﾞﾈｶﾞｲ(1)、ﾆｼｷｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ﾋﾒｲｼﾀﾞﾀﾐｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｺｼﾀﾞｶｻｻﾞｴ(1)
土坑６	90	62	30	2.81	Ⅰ	土器・青磁･青花（福建）・褐釉・沖施・沖無･瓦	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(4)、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ｱｺﾔｶﾞｲ(1)、ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(8)、ｱﾏｵﾌﾞﾈｶﾞｲ(1)、ｷｲﾛﾀﾞｶﾗ(1)、ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1)、ｲﾎﾞﾖﾌﾊﾞｲ(1)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(4)、ハマフエフキ
土坑７	83	68	35	2.76	Ⅱ´	土器･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｱｺﾔｶﾞｲ(1)、ｵｵﾄﾘｶﾞｲ(1)
土坑８	90	52	35	2.77	Ⅱ	土器・青磁・青花（福建）･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(7)、ｶﾜﾗｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ(1)、ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ(1)、ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｱｻﾘ(1)、ﾇﾉﾒｶﾞｲ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(3),ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ(1),ﾎﾗｶﾞｲ(1),ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ(1),ﾏｶﾞｷｶﾞｲ(1)、イヌ
土坑墓１	108	70	40	2.72	Ⅱ´		
土坑墓２	推定65	33	推定20	2.97	Ⅱ´	土器･褐釉	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ(1)、ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｼｬｺｶﾞｲ(1)、ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ(1)、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(1)
土坑墓３	-	-	-	2.93	Ⅱ´		
焼土遺構	230+	18	12	3.21	Ⅱ炭	土器	ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ(2)、ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ(1)､ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ(1)､ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ(1)、ﾋﾒｲｼﾀﾞﾀﾐｱﾏｵﾌﾞﾈ(1)、ｺﾞﾏﾌﾆﾅ(2)、ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ(12)、獣骨・クロダイ
貝集中地点	50	50	-	-	-	土器・瓦	貝類は第31･32表　※Ⅰ層下部中で確認

※凡例　・埋土…Ⅰ（Ⅰ層下部）　Ⅱ（Ⅱ層）　Ⅱ´（Ⅱ´層）　・遺物…沖施（沖縄産施釉陶器）、沖無（沖縄産無釉陶器）。貝類は各遺構の最低個体数であるので、第31･32表の合計とは合わない。

第４節　遺物

遺物の種類としては、土器、中国産陶磁器（青磁･白磁･青花･陶器）、タイ産陶器、台湾産陶器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、近代陶磁器、金属製品、石製品、骨製品、貝製品、骨製品、円盤状製品、貝類遺体、脊椎動物遺体がある。

遺物の多くはⅠ層下部から出土しており、中森期から近代までのものが出土している。Ⅱ層からは、量的には少なくなっているが、中森期の遺物が主体である。遺構からの遺物は多くはないが、土坑３では少数の青磁・陶器と一定量の土器が出土しており、その組成を考える上で重要と思われる。一方、ピットからの遺物量は多くはないが、その主体は土器である。

第３表は、獣魚骨・貝類以外の遺物の個体数と全重量である。個体数は、土器・陶磁器は種類ごとに口縁数と底部数の多い方を採用し、胴部や把手等のみの場合は１個体として数えた。陶磁器以外は、全破片数とした。また、瓦は大量ではあったが全て小片であったこと、近代陶磁器は目に付くものを取り上げたので、重量のみ計測した。これにより土器・陶磁器類の個体数による比率を算出すると土器 68％、中国産陶磁器 14％、沖縄産陶器 15％、本土産陶磁器２％である。以上のように圧倒的に土器が多く、陶磁器は中国産・沖縄産のものが多い。

以下、種類毎にその特徴を記載し、個々の遺物は観察表にまとめた。

第３表　遺物出土状況

	土器	中国産					タイ産	台湾産	本土産			沖縄産			陶磁器
		青磁	白磁	青花	色絵	褐釉陶器	褐釉陶器	陶器	陶器	染付	色絵	施釉陶器	無釉陶器	陶質土器	小計
個体数	711	49	22	50	2	5	1	1	10	11	1	92	61	5	310
重量(kg)	91.47	0.99	0.19	0.83	0.02	4.79	1.64	0.04	0.20	0.36	0.04	2.77	19.20	0.13	31.21

(kg)

	金属製品	骨製品	石製品	貝製品	円盤状製品	瓦	近代陶磁器	総　計
個体数	4	3	2	28	6	－	－	1064
重量(kg)	0.19	0.004	0.05	2.18	0.30	62.02	2.78	190.20

(kg)

１．　土器（第９～15 図、図版 14 ～ 17、第４～７表　１～ 59）

土器の大半は中森式土器（高宮 1981）に相当する土器群である。だが、少数ではあるがパナリ焼の特徴が見られるものもあるので、後述する。

中森式土器は、外耳をもち直線的に胴部が伸びる鍋形土器が主体とされており、この前身は石鍋を模倣した新里村式土器、「く」の字状口縁をもつビロースク式土器と考えられている（金武 1994）。一方、中森式土器は西表島上村遺跡や慶来慶田遺跡で多く出土し様々なタイプがあり細分できるものとされており（県教委 1991・1999）、合田芳正（1986）や新里貴之（2004）の研究がある。近年の成果である新里の分類編年案では、緩やかに外反する桃里恩田タイプ→直線的に伸びる石垣タイプ→口縁部がケズリにより厚みが薄くなり断面が歯ブラシ状になる上村タイプの変遷を想定されている。

以下、本調査出土土器について、全体としての特徴をまとめた後に、既往の型式等との対応を検討する。

成形・調整技法　土器の成形は全て粘土紐を積み上げて行っており、底部は全体的に広く平坦なものが多く、まず粘土を円形の板状に加工したものと思われる。

外面の調整については、まずケズリにより大方の形を作るのであるが、その工具幅は 0.8 ～ 2.5cm のものがあるが、1.5cm 前後のものが多い。また、16・17・20・57 のように工具の筋目が粗いものもある。

その後はミガキにより平滑に仕上げていくものが多く、明瞭にその痕跡が分かりにくいものもあるが、0.5cm 前後の浅い筋状のものが重なっているのが見え、器面が研磨され光沢がある。一方、胴部にナデ調整されている

もの（7・36 など）や、ハケ調整されるもの（1）もあるが、量的には少ない。最後の仕上げとして口縁部にヨコナデ調整を行うことにより、胴部との境に稜が生まれ口縁部が横帯状になっているものが多く、これを口縁帯と称する。この口縁帯より下位には、ケズリの痕跡が残るものも多い。

内面は主にヨコナデで調整されるが、幅 1.3 ～ 2.0cm の板状工具の痕跡を使用した痕跡が残るものもある（7・21・24・34・41 ～ 44 など）。また、内面でも口縁帯に対応する部分はヨコナデが丁寧に施され、比較的平滑なものが多い。

器形　明確に認識できたものは、鍋と壺である。

鍋については全体のプロポーションからまずＡ・Ｂ類に分け、Ｂ類は口縁帯の形態からさらに３つに細分した。

鍋Ａ（１～５・７）　口縁から胴部へほぼ直角的に伸びていくタイプ。1 はほぼ全形を復元でき、底部が平坦である。基本的にはいわゆる外耳、細長い把手を有するものと思われる。また、調整については１・７のようにナデによりほとんどケズリの痕を残さないものが多いようである。

鍋Ｂ　約 60 ～ 70 度の角度で伸びていくタイプ。調整は口縁帯のナデが徹底されているが、その下位はミガキによるが、ケズリの痕を残すものも多い。このタイプは口縁帯の形態から３つに細分した。

鍋Ｂ１（６・８～ 20）　口縁帯がほぼ直線的なもの。６・８は把手を有している。胴部まで復元できたものが少ないが、９は平底で深さは 20cm のものであるが、６・10・11 のようにそれよりも深い器形で底部の形態は分からない。口縁の形態は、胴部とあまり厚さが変わらないものが多いが、13 ～ 16 のようにやや厚くなり丸みをもつものも見られる。

鍋Ｂ２（21 ～ 25）　口縁帯が外反するもの。口縁帯と胴部の稜がＢ１よりも明瞭である。口縁帯の長さを見ると、22・23 は 5 cm 以上と他のものより長い。図化はしなかったが、把手を有するものと思われる。

鍋Ｂ３（26・27・33 ～ 36）　口縁帯が断面長方形の肥厚帯をもつもの。胴部との境は明瞭で、Ｂ２と同様に口縁帯が外反することから、近いタイプと思われる。把手があるものは確認できなかった。

出土量としては鍋Ｂが大半を占め、その中でも鍋Ｂ１が多い傾向にある。

上記以外のものについては、これまであまり例が見られていないものである。28・29 は口縁が短く直立しやや深めの器形をもつ。30・31 は厚手で口縁端部が短く外反する。32 は口縁端部が方形状に呈する。

壺（37・39 ～ 44）　幾つかのタイプが見られるが、量自体が多くないので、個々の特徴を述べる。

37 は薄手で口縁端部が短く外反するものであまり例がないタイプと思われる。

39 は口縁が狭く胴長の器形をもつ可能性がある。

40・41 は口縁の長さがやや異なるが、やや外反するものであまり肩が張らない器形と思われる。

42 は直立する口縁で球形の胴部をもつものである。44 もやや小振りだがほぼ同様の器形と思われる。

第４表　土器出土状況

グリッド		1グリッド					2グリッド																3グリッド													
層序・遺構 器形 部位		Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗8	P47, P51	P50	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗3	土抗6	P4	P37	P38	P39	P40	P41	P44	P45	P46	P48	P59	P61	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗7	P1	P17	P18	P22	P25	P26	P28	P33	P54
鍋	口縁部	43	3	4	6	3	101	7	12	6			1	3	1	2	3	1	2		3	1	8	200	20	1	4	2	1		1	1			1
	把手	2					10	2	3							1				1			1	16	3										
壺	口縁部						1		3					1										7											
	把手																							1											
底部		4	3	1		1	14	3	15		1	3	1	1	2	2							3	64	5			2		1			1	1	
小計		49	6	5	6	4	126	12	33	6	1	3	2	5	3	5	3	1	2	1	3	1	12	288	28	1	4	4	1	1	1	1	1	1	1
グリッド 小計		70					207																344												

グリッド		4グリッド														接合	不明			総計	個体数
層序・遺構 器形 部位		Ⅰ層	Ⅰ層下部 貝集中地	Ⅰ層下部	土抗1	土抗4	土抗5	P1	P4	P5	P7	P8	P9	P11	P13	2GⅠ下+Ⅱ層＋P36	Ⅰ層	Ⅰ層下部			
鍋	口縁部	1	3	139	1	5	4	4				2	2	1	4	1	4	54	25	691	691
	把手		1	21	1			1							1			5	1	70	
壺	口縁部			5	1												2			20	20
	把手																			1	
底部			1	45	7	2	5		2	2	1				1			15		209	
小計		1	5	210	10	7	9	5	2	2	1	2	2	1	6	1	6	74	26	991	711
グリッド 小計		263														1	106			991	

43 は肩が張る器形である。

底部（46 ～ 55・57・59） 今回の資料では、口縁と底部が接合したものは多くない。しかしながら、市教委調査の資料（石垣市教委 2004）などをもとに、器形との対応関係を示しておきたい。46・47 は平底で胴部は大きく外に伸びることから、壺ではないかと考えられる。48 ～ 51 は丸みをもった平底で、おそらく鍋Ｂ類の可能性が高いが、他遺跡でも接合資料は少なく断定はできない。52・53 は平底で胴部は直角的であり、他遺跡でも見られることから、鍋Ａ類のものと思われる。54・55 については、鍋か壺かは限定できない。

パナリ焼の特徴をもつもの（38・45・56・58） 八重山地域には近世の土器とされるパナリ焼があり、砂礫や貝殻片等を多く混入させ厚手の土器で、壺・鉢・香炉などの器形がある。1857 年まで新城島で作られた土器とされ、古墓で蔵骨器として使用されていることが多い。特徴とする胎土にもバリエーションが見られ、生産地が新城島だけであったかどうかについても色々な議論があり、概念設定も含めて研究途上の土器である。

このパナリ焼は集落跡で出土することは少ないとされるが、市教委が行った本遺跡の調査では一定量出土している（石垣市教委 2004）。その特徴として、均一な器厚、断面の色調が黒ずむこと、調整については上半が丁寧なナデ、下半が粗いケズリといった点が挙げられている。また、これらには胎土にサンゴが含まれているものも確認している。今回の調査で量的には少なく、全形が分かるものがないが、この特徴をもつものを説明する。

38 は比較的薄手であるが頸部が短く外側に屈曲するもの、45 は厚手の壺の把手であるもので、パナリ焼で見られる器形である。

56・58 は厚めで丸底の底部で器形は限定できないが、胎土や色調からパナリ焼の特徴とした。

小結 以上、本調査の土器はパナリ焼の特徴をもつものも少量見られるが、大半は中森式の範疇にあるとした。ここでは、既往の研究をもとに量的に多く編年研究がなされている鍋型土器を中心に若干まとめる。

鍋Ａは、上村遺跡Ⅰ類、慶来慶田城遺跡Ⅰ類、石垣貝塚の外耳のものに類似しており、新里分類（新里 2004）では石垣タイプⅠに対応するものと思われ、14 世紀後半～ 15 世紀前半とされているようである。

鍋Ｂ１は上村遺跡Ⅱ類の一部、石垣貝塚の直口縁のものに類似しており、新里分類の石垣タイプⅡに対応するものと思われ、15 世紀後半～ 16 世紀とされている。

鍋Ｂ２は上村遺跡Ⅲ類と同様に外反しているが、口縁帯の長さが短い点が異なっており、つまりこれを指標とする新里分類の上村タイプよりも、石垣貝塚の外反口縁のものに近い印象がある。この特徴からすると、新里分類での石垣タイプⅡと上村タイプとの中間的なものと考えられる。そのように考えると、上村タイプは 16 ～ 17 世紀の時期幅で考えられており、その中でも古手と考える 16 世紀代に収まる資料とも思われる。

鍋Ｂ３は、石垣貝塚の肥厚口縁のものや中森貝塚の口縁に膨らみをもつものに近いものがあり、新里によると上村タイプとほぼ同時期と位置付けているようだ。

第５章で詳述するが、鍋Ｂが主体的に出土していることから、時期幅としては 15 世紀後半～ 17 世紀のものと思われる。その中でも鍋Ｂ１・２が多いので、15 世紀後半～ 16 世紀が主体的な時期と考えられる。

第５表　土器観察一覧（１）

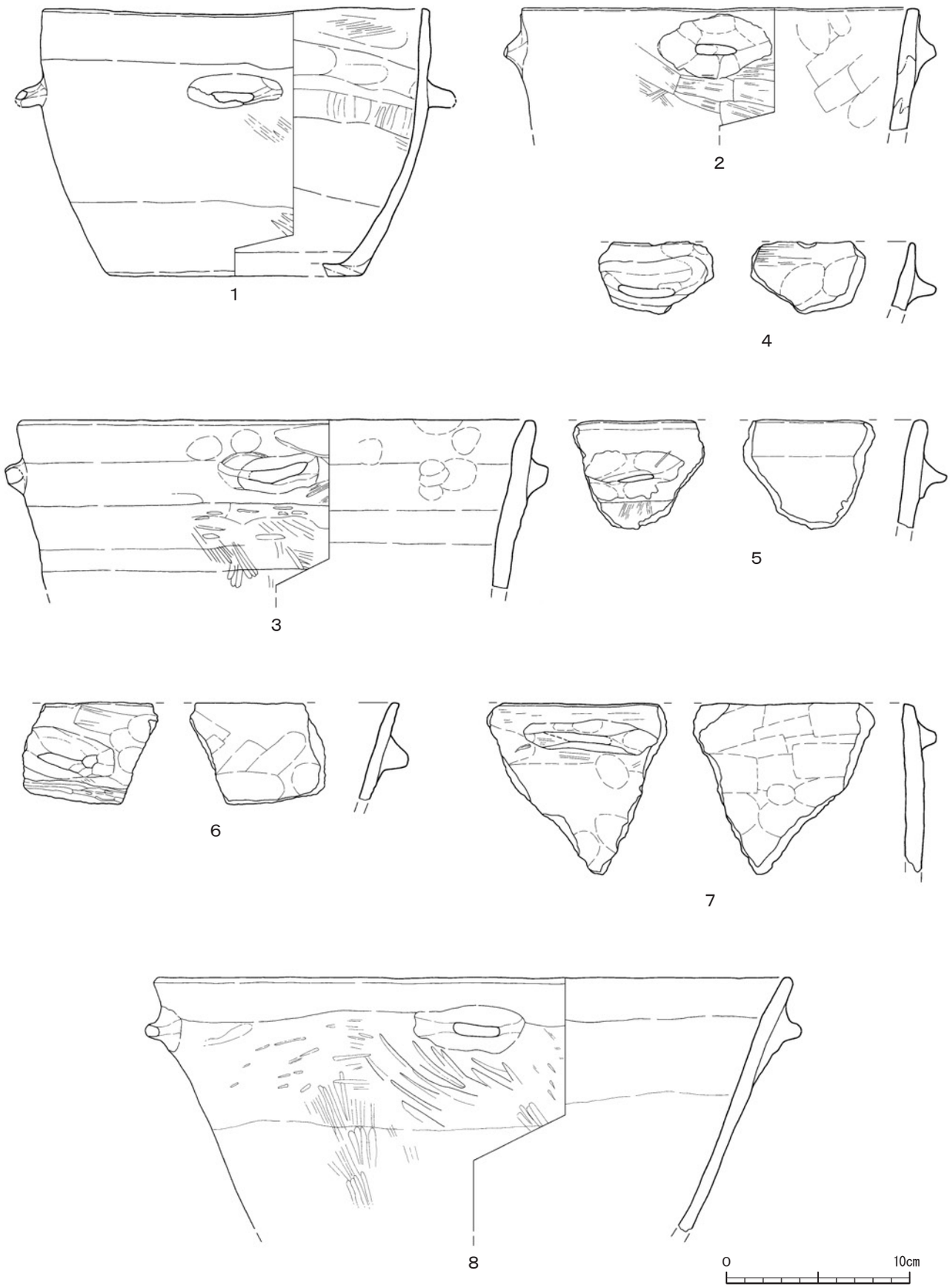
図No	器形	法量			色調			混入物	成形・調整など		その他	出土地点
		口径	器高	底径	外面	断面	内面		外面	内面		
1	鍋Ａ	21.0	14.6	13.4	明褐	明褐	明褐	少	一部ﾅﾅﾒﾊｹ、全面ﾖｺﾅﾃﾞ。把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	部分的に工具によるﾀﾃﾅﾃﾞ、全面ﾖｺﾅﾃﾞ。	把手（残存長4.1、幅1.6、厚1.6cm）	２Ｇ　土坑３
2	鍋Ａ	21.6	－	－	橙	鈍黄橙	橙	少	ﾖｺｹｽﾞﾘ(0.8cm）後、上部をﾖｺﾅﾃﾞ。把手貼付後ﾅﾃﾞ不徹底。	左下からﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。	把手（長5.0、幅0.8、厚2.0cm）	Ⅰ層下部
3	鍋Ａ	27.8	－	－	明赤褐	鈍黄橙	明赤褐	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ後、口縁帯(4.6cm）をﾖｺﾅﾃﾞ、右下からﾅﾅﾒﾐｶﾞｷ。把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	ﾖｺﾅﾃﾞ。部分的に指圧痕が残る。	把手（長4.2、幅1.0、厚2.0cm）	不明
4	鍋Ａ	－	－	－	明赤褐	明赤褐	橙	少	把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	板ﾖｺﾅﾃﾞ。部分的に黒変。	把手（長5.0、幅1.2、厚1.9cm）	２Ｇ　Ⅰ層下部
5	鍋Ａ	－	－	－	明赤褐	橙	橙	多	口縁帯（4.5cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	ﾖｺﾅﾃﾞ。	把手（残存長4.9、幅1.2、厚さ1.7cm）	４Ｇ　Ⅰ層下部

第６表　土器観察一覧（２）

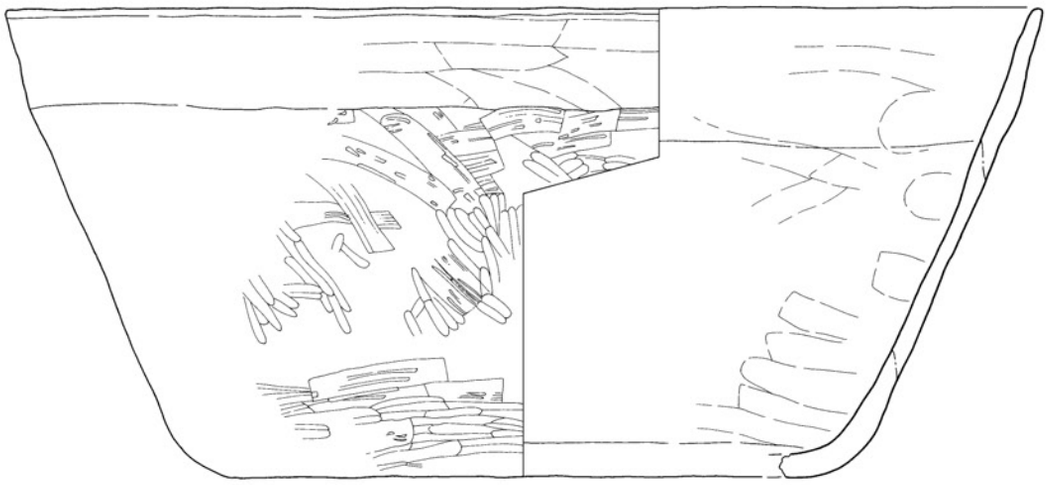
図No	器形	法量			色調			混入物	成形・調整など		その他	出土地点
		口径	器高	底径	外面	断面	内面		外面	内面		
6	鍋Ｂ１	－	－	－	鈍橙	褐灰	鈍橙	少	ﾖｺｹｽﾞﾘ後、口縁帯（4.6cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	指ﾅﾃﾞ。	把手（残存長5.2、幅1.3、厚2.4cm）	３Ｇ　Ⅱ層
7	鍋Ａ	－	－	－	鈍赤褐	鈍赤褐	赤褐	多	ﾖｺﾅﾃﾞ、特に上部は丁寧。	上部は板ﾖｺﾅﾃﾞ、下部は指圧痕比較的残る。	把手（長6.7、幅1.0、厚1.6cm）	４Ｇ　Ⅰ層下部
8	鍋Ｂ１	34.8	－	－	鈍橙	褐灰	橙	多	ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ（1.4cm）後、上部はﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ。把手貼付後ﾅﾃﾞｹｼ。	ﾖｺﾅﾃﾞ。黒色物（炭かは不明）が付着。	把手（長5.3、幅1.1、厚1.4cm）。外面黒斑あり。	４Ｇ　Ｐ13
9	鍋Ｂ１	41.6	20.0	23.0	橙	褐灰	橙	多	ﾖｺ・ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ（1.5cm）後、口縁帯（4.6cm）ﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾀﾃﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ。指圧痕部分的に残る。	外面黒斑２ヶ所（１つは径11cm）。	４Ｇ　Ⅰ層下部
10	鍋Ｂ１	40.6	－	－	鈍橙	橙	橙	多	ｹｽﾞﾘ後、口縁帯（5.5cm）はﾖｺﾅﾃﾞ、下部は丁寧なﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、上半は丁寧。	外面10cm前後の黒斑、内面は全体的に黒変。	２ＧⅠ層下部・Ⅱ層・Ｐ36
11	鍋Ｂ１	33.0	－	－	明赤褐	明赤褐	橙	多	ﾖｺ・ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ(1.6cm）後、口縁帯（2.0cm）はﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾀﾃﾐｶﾞｷ。	上部はﾖｺﾅﾃﾞ、下部は板ﾅﾃﾞ。器面は平滑。		４Ｇ　Ⅰ層下部
12	鍋Ｂ１	37.5	－	－	橙	橙	明赤褐	少	ﾖｺｹｽﾞﾘ(1.5cm）後、口縁帯（2.5cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、上半は丁寧。		４Ｇ　土坑５・Ⅰ層下部
13	鍋Ｂ１	29.5	－	－	赤褐	明赤褐	明赤褐	少	ﾖｺ・ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ(1.5cm）後、口縁帯（3.5cm）ﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷで平滑。	ﾖｺﾅﾃﾞ、上半は丁寧。		２Ｇ　Ⅰ層下部
14	鍋Ｂ１	－	－	－	明褐	明褐	明褐	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（1.5cm）後、口縁帯（4.5cm）やや粗いﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞだが、やや粗く器面が波打つ。	口縁端部やや黒変。	１Ｇ　Ⅰ層
15	鍋Ｂ１	42.0	－	－	明赤褐	鈍褐	橙	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（1.3cm）後、口縁帯(2.5cm）やや粗いﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞだが、やや粗く器面が波打つ。下部は稜がやや目立つ。		４Ｇ　土坑４
16	鍋Ｂ１	－	－	－	灰褐	灰黄褐	鈍黄橙	多	粗いﾖｺｹｽﾞﾘ（1.3cm）後、口縁帯（2.5cm）ﾖｺﾅﾃﾞ。	板ﾖｺﾅﾃﾞ、指圧痕残る。	全体的に色調が暗く、	４Ｇ　土坑１
17	鍋Ｂ１	－	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多	粗いﾖｺｹｽﾞﾘ（1.3cm）後、部分的にﾖｺﾅﾃﾞ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、指圧痕残る。	そらく口縁帯のみの残存。	１Ｇ　Ⅰ層
18	鍋Ｂ１	－	－	－	明褐	灰黄褐	明赤褐	多	粗いﾖｺｹｽﾞﾘ後、口縁帯（4.0cm）ﾖｺﾅﾃﾞ。	丁寧なﾖｺﾅﾃﾞ、指圧痕少し残るが全体的に平滑。		２Ｇ　土坑３
19	鍋Ｂ１	－	－	－	橙	橙	明褐	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（1.5cm）後、口縁帯（4.0cm）をﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、口縁端部はやや外反。	内面に黒色物（炭か不明）付着。	１Ｇ　Ⅰ層
20	鍋Ｂ１	－	－	－	橙	鈍橙	明赤褐	多	粗いﾖｺｹｽﾞﾘ（1.4cm）後、口縁帯（4.0cm）をﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、部分的に板の痕跡も見られる。	外面、口縁より下部は黒変。	４Ｇ　Ｐ８
21	鍋Ｂ２	34.0	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多	ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ（2.0cm）後、口縁帯（4.0cm）をﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷにより平滑。	ﾖｺﾅﾃﾞ、板（1.3cm）の痕跡あり。		３Ｇ　Ⅰ層下部
22	鍋Ｂ２	36.2	－	－	橙	橙	鈍橙	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（2.0cm）後、口縁帯（6.2cm）をﾖｺﾅﾃﾞ。	ﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾅﾃﾞがやや粗い。	内面、部分的にうすく黒変（黒斑か）。	３Ｇ　Ⅰ層下部
23	鍋Ｂ２	41.4	－	－	橙	橙	鈍橙	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（1.8cm）後、口縁帯（5.2cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷ。	器面の剥離が著しいが、おそらくﾖｺﾅﾃﾞ。		３Ｇ　Ｐ17
24	鍋Ｂ２	－	－	－	鈍褐	鈍黄橙	鈍橙	少	ﾅﾅﾒｹｽﾞﾘ(1.5cm）後、口縁帯（4.0cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、板（2.0cm）の痕跡あり。	外面、うすく黒変（黒斑か）。	２Ｇ　土坑３
25	鍋Ｂ２	－	－	－	鈍褐	橙	橙	多	口縁帯（3.5cm）はﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ。ｹｽﾞﾘはﾅﾃﾞｹｼか。	ﾖｺﾅﾃﾞ。		１Ｇ　Ⅰ層
26	鍋Ｂ３	23.6	－	－	明赤褐	明赤褐	鈍橙	少	口縁帯（3.0cm）は肥厚し、ﾖｺｹｽﾞﾘ後、ﾅﾃﾞ。	やや粗いﾖｺﾅﾃﾞ、指圧痕も目立つ。		４Ｇ　Ⅰ層下部
27	鍋Ｂ３	－	－	－	明赤褐	橙	鈍橙	多	口縁帯（4.8cm）は肥厚し、ﾖｺｹｽﾞﾘ後、ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。	ﾖｺﾅﾃﾞ、器面は平滑。	内面、部分的に黒変（黒斑か）。	１Ｇ　Ｐ47・51
28	鍋	24.0	－	－	橙	鈍黄橙	橙	多	口縁帯は不明瞭。上部はﾖｺ、下部はﾀﾃｹｽﾞﾘ後、ﾐｶﾞｷ。器面の剥離著しい。	ﾖｺﾅﾃﾞ、板の痕跡あり。器面は波打つ。	外面、部分的に黒変（黒斑か）。	４Ｇ　Ⅰ層下部
29	鍋	－	－	－	橙	明赤褐	黒褐	少	口縁帯（1.8cm）周辺はﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。器面はかなり平滑。	丁寧なﾖｺﾅﾃﾞで、器面は平滑。	内面は全体的に黒変。	３Ｇ　Ⅰ層下部
30	鍋	－	－	－	橙	明褐	橙	多	ﾖｺﾅﾃﾞ。端部に稜が見られる。下部はｹｽﾞﾘか。	ﾖｺﾅﾃﾞ。		３Ｇ　Ⅰ層下部
31	鍋	－	－	－	明赤褐	鈍褐	橙	多	口縁端部は丁寧なﾖｺﾅﾃﾞ。全体的にはﾐｶﾞｷ。	ﾖｺﾅﾃﾞで、胴部との境に稜あり。		１Ｇ　Ｐ50
32	鍋	－	－	－	赤褐	赤褐	赤褐	多	口縁帯（1.1cm）は肥厚しﾖｺﾅﾃﾞ、下部はﾖｺﾐｶﾞｷ。	板によるﾖｺﾅﾃﾞ	口縁端部は黒変。	２Ｇ　土坑３

第７表　土器観察一覧（３）

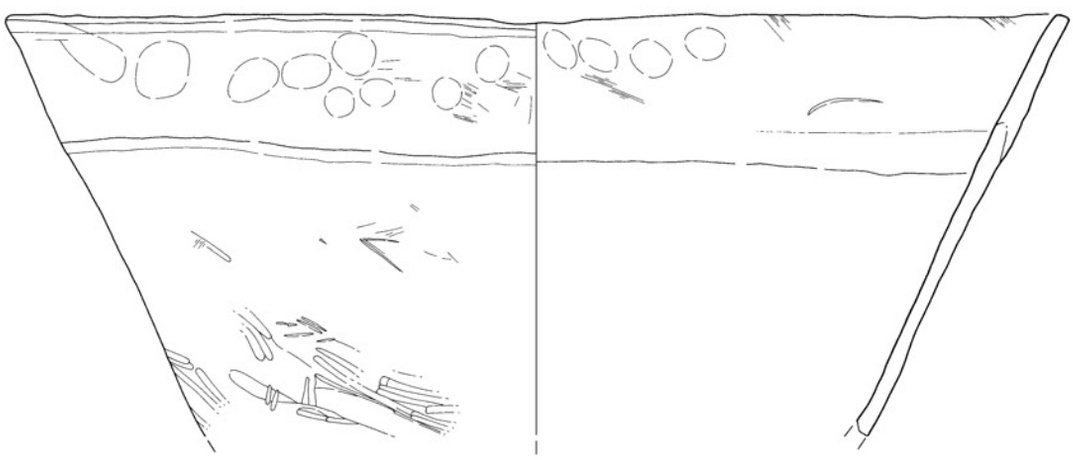
図No	器形	法量			色調			混入物	成形・調整など		その他	出土地点
		口径	器高	底径	外面	断面	内面		外面	内面		
33	鍋Ｂ３	32.4	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（2.5cm）後、口縁帯（2.8cm）はﾕﾋﾞﾖｺﾅﾃﾞ。下部はﾐｶﾞｷ。	ﾕﾋﾞﾖｺﾅﾃﾞ、指圧が多く残る。		４Ｇ　Ⅰ層下部
34	鍋Ｂ３	33.0	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ（2.0cm）後、口縁帯（4.0cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部は丁寧なﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。	ﾖｺﾅﾃﾞで、器面は平滑。板の痕跡あり。	内外面、黒斑あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部
35	鍋Ｂ３	38.6	－	－	明赤褐	明赤褐	鈍橙	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ後、口縁帯（3.8cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部は丁寧なﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。	丁寧なﾖｺﾅﾃﾞで、器面は平滑。		４Ｇ　Ⅰ層下部
36	鍋Ｂ３	40.4	－	－	明赤褐	鈍橙	橙	多	ﾖｺｹｽﾞﾘ後、口縁帯（3.5cm）はﾖｺﾅﾃﾞ。下部は丁寧なﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。	丁寧なﾖｺﾅﾃﾞで、器面は平滑。		４Ｇ　Ⅰ層下部
37	壺	16.0	－	－	明赤褐	橙	橙	多	口縁は丁寧なﾖｺﾅﾃﾞ、頚部はﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、口縁は丁寧。		２Ｇ　土坑３
38	壺	20.4	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多（ｻﾝｺﾞ）	ﾖｺﾅﾃﾞ、特に口縁は丁寧。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ。		４Ｇ　土坑１
39	壺	14.3	－	－	橙	橙	鈍橙	多	ﾖｺﾅﾃﾞ、特に口縁は丁寧。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ。		不明　Ⅰ層下部
40	壺	21.2	－	－	明赤褐	鈍橙	鈍橙	多	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ、頚部はﾅﾃﾞ。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ、指圧痕残る。		２Ｇ　土坑３
41	壺	21.2	－	－	橙	橙	橙	多	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ、板の痕跡残る。胴部はﾐｶﾞｷ。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ、指圧痕残る。胴部は板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞか。		４Ｇ　Ⅰ層下部
42	壺	19.0	－	－	明赤褐	橙	橙	多	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ、頚部はﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ、胴部はﾐｶﾞｷ。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ。頚部はﾅﾃﾞ、指圧痕残る。胴部なﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ。		不明　Ⅰ層下部
43	壺	14.6	－	－	明赤褐	橙	橙	多	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ、頚部はﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ、胴部はﾐｶﾞｷ。	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ、頚部はﾅﾃﾞ、胴部はﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ。		３Ｇ　Ⅰ層下部
44	壺	19.6	－	－	明赤褐	明赤褐	鈍橙	少	口縁はﾖｺﾅﾃﾞ、胴部はﾖｺｹｽﾞﾘ後、丁寧なﾖｺﾐｶﾞｷ。	丁寧なﾖｺﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ。		２Ｇ　土坑３
45	壺（把手）	－	－	－	赤褐	灰褐	赤褐	少（ｻﾝｺﾞ）	手づくね成形後、ﾐｶﾞｷ。			３Ｇ　Ⅰ層下部
46	底部（壺）	－	－	13.6	鈍橙	灰黄褐	黒褐	多	胴部ﾅﾃﾞ、底部際ﾐｶﾞｷ。	胴部ﾅﾃﾞ、底部ﾖｺﾅﾃﾞ。	内面は全体的に黒褐色。	３Ｇ　Ⅰ層下部
47	底部	－	－	16.6	明赤褐	鈍橙	鈍褐	多	全体的にﾐｶﾞｷ。	胴部ﾅﾃﾞ。	内外面、黒斑あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部（貝集中地）
48	底部	－	－	17.0	明赤褐	褐灰	橙	多	胴部・底部共にﾊｹ(14本/1.2cm)後、ﾐｶﾞｷ。	ﾅﾃﾞ。		３Ｇ　Ⅰ層下部
49	底部	－	－	15.4	明赤褐	橙	橙	少	胴部ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ。	ﾅﾃﾞ。		２Ｇ　土坑３
50	底部	－	－	13.4	鈍橙	橙	橙	多	胴部・底部共にﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ。	胴部ﾖｺﾅﾃﾞ、底部ﾅﾃﾞ。	内外面、黒斑あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部
51	底部	－	－	14.0	明赤褐	明赤褐	橙	多	胴部板ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、底部ﾅﾃﾞ。	ﾅﾃﾞ。		不明　Ⅰ層下部
52	底部（鍋Ａ）	－	－	16.0	鈍橙	橙	明赤褐	多	底部際ﾖｺｹｽﾞﾘ（1.5cm）、上方はﾅﾃﾞ。	ﾖｺﾅﾃﾞ。	内面、部部的に黒変。	４Ｇ　Ⅰ層下部
53	底部（鍋Ａ）	－	－	15.2	鈍黄橙	褐灰	黄橙	少（雲母）	胴部ﾐｶﾞｷ。	ﾅﾃﾞ。		１Ｇ　Ⅰ層下部
54	底部	－	－	11.0	鈍橙	灰黄褐	鈍黄橙	少	ﾅﾃﾞか。器面の剥離が著しい。	胴部、ﾖｺﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ。		２Ｇ　土坑３
55	底部	－	－	10.4	明赤褐	褐灰	橙	多	胴部板ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、底部ﾅﾃﾞ。	胴部ﾖｺﾅﾃﾞ。		３Ｇ　Ｐ28
56	底部	－	－	－	明赤褐	褐灰	明赤褐	多（ｻﾝｺﾞ）	ﾅﾃﾞ。	胴部ﾖｺﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ。底部ﾅﾃﾞ、指圧痕残る。		４Ｇ　土坑１
57	底部	－	－	－	明赤褐	明赤褐	明赤褐	多	胴部・底部共に粗いﾖｺｹｽﾞﾘ（1.6cm）。	ﾅﾃﾞ。		２Ｇ　Ⅱ層
58	底部	－	－	－	明赤褐	灰褐	明赤褐	少（ｻﾝｺﾞ）	ｹｽﾞﾘ後、丁寧なﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞにより平滑。	ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞにより平滑。		３Ｇ　Ⅰ層下部
59	底部（鍋Ａ）	－	－	－	鈍橙	橙	鈍褐	多	ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ。指圧痕、工具痕残る。	一定方向ﾅﾃﾞ	内面、部部的に黒斑。	２Ｇ　土坑３



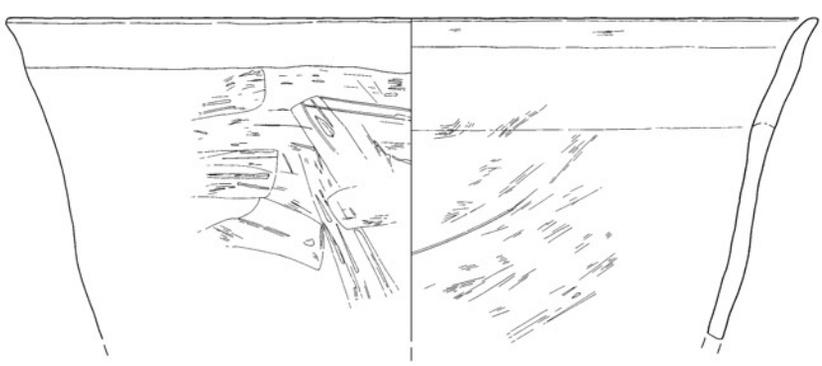
第９図　土器１



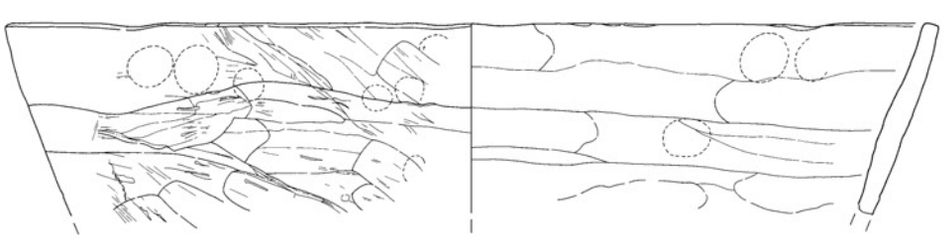
9



10



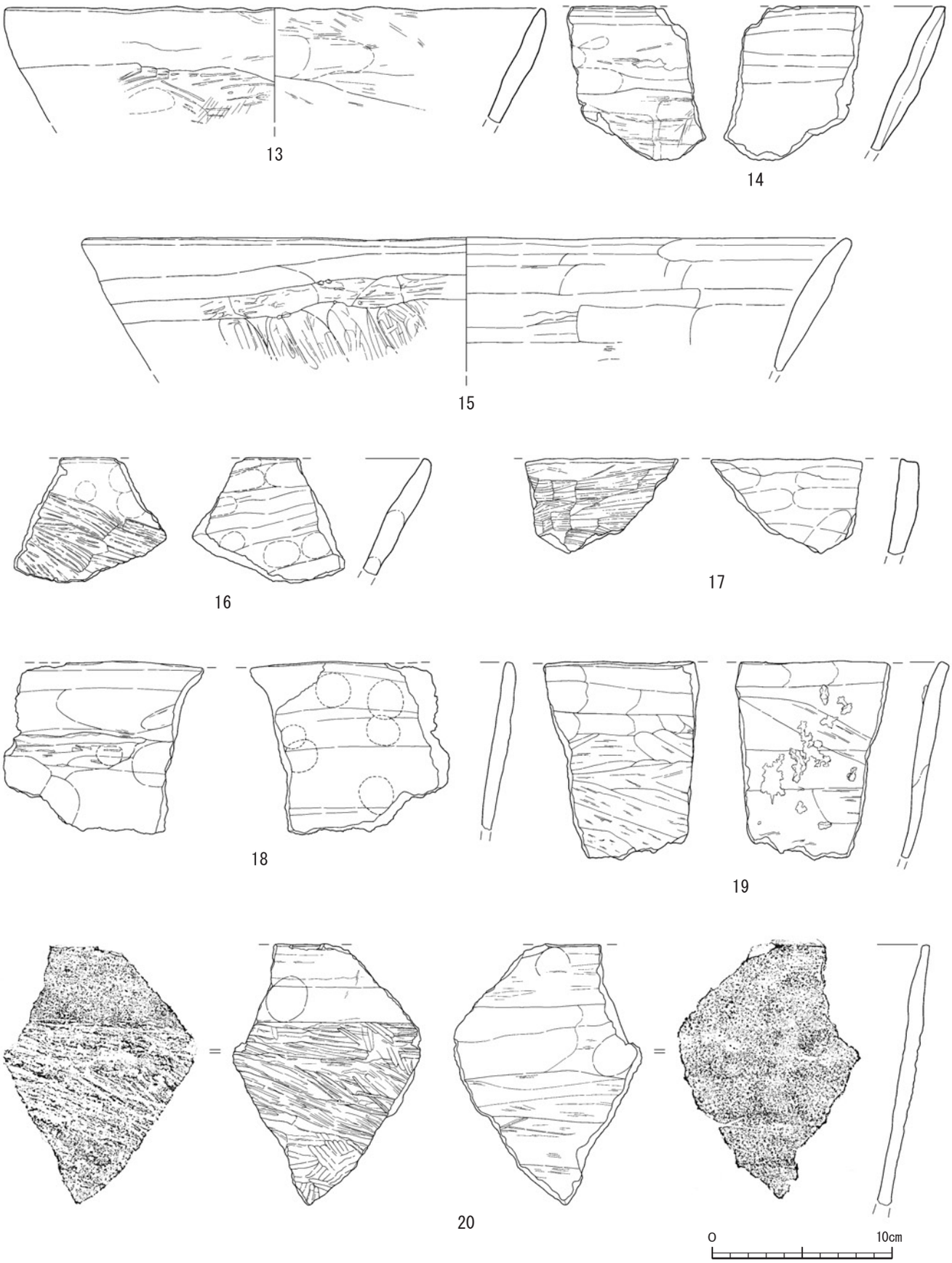
11



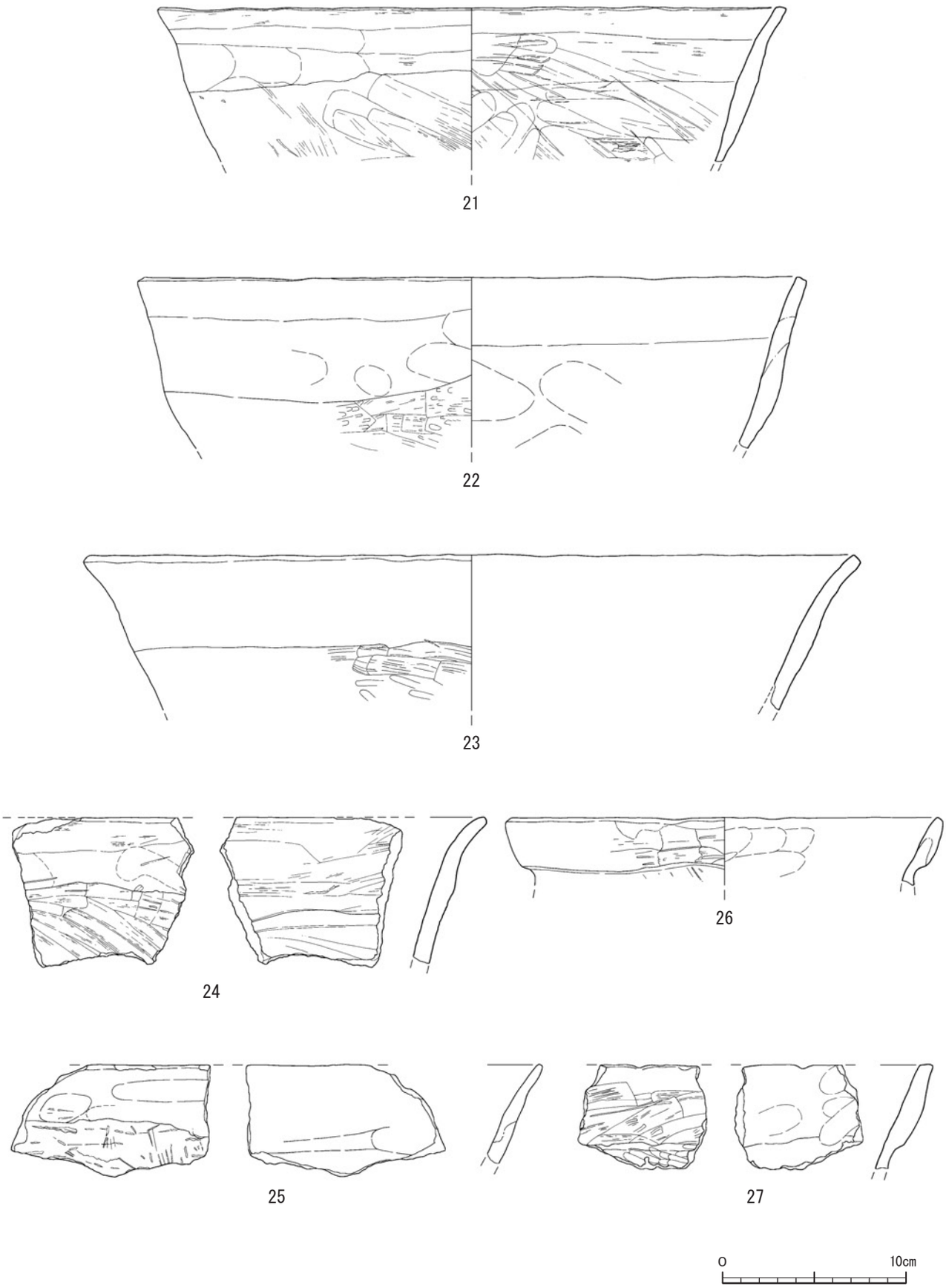
12

0　10cm

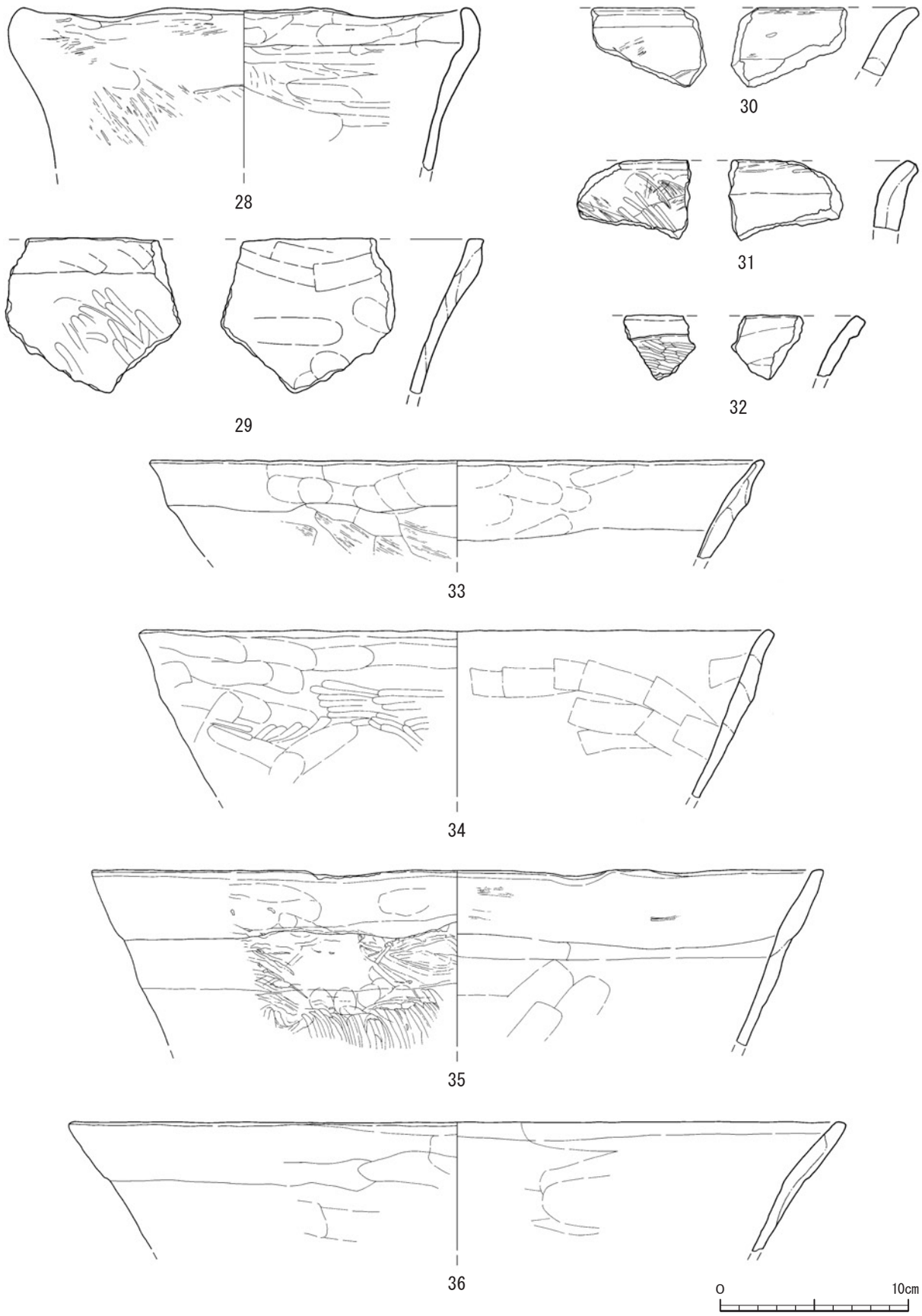
第 10 図　土器２



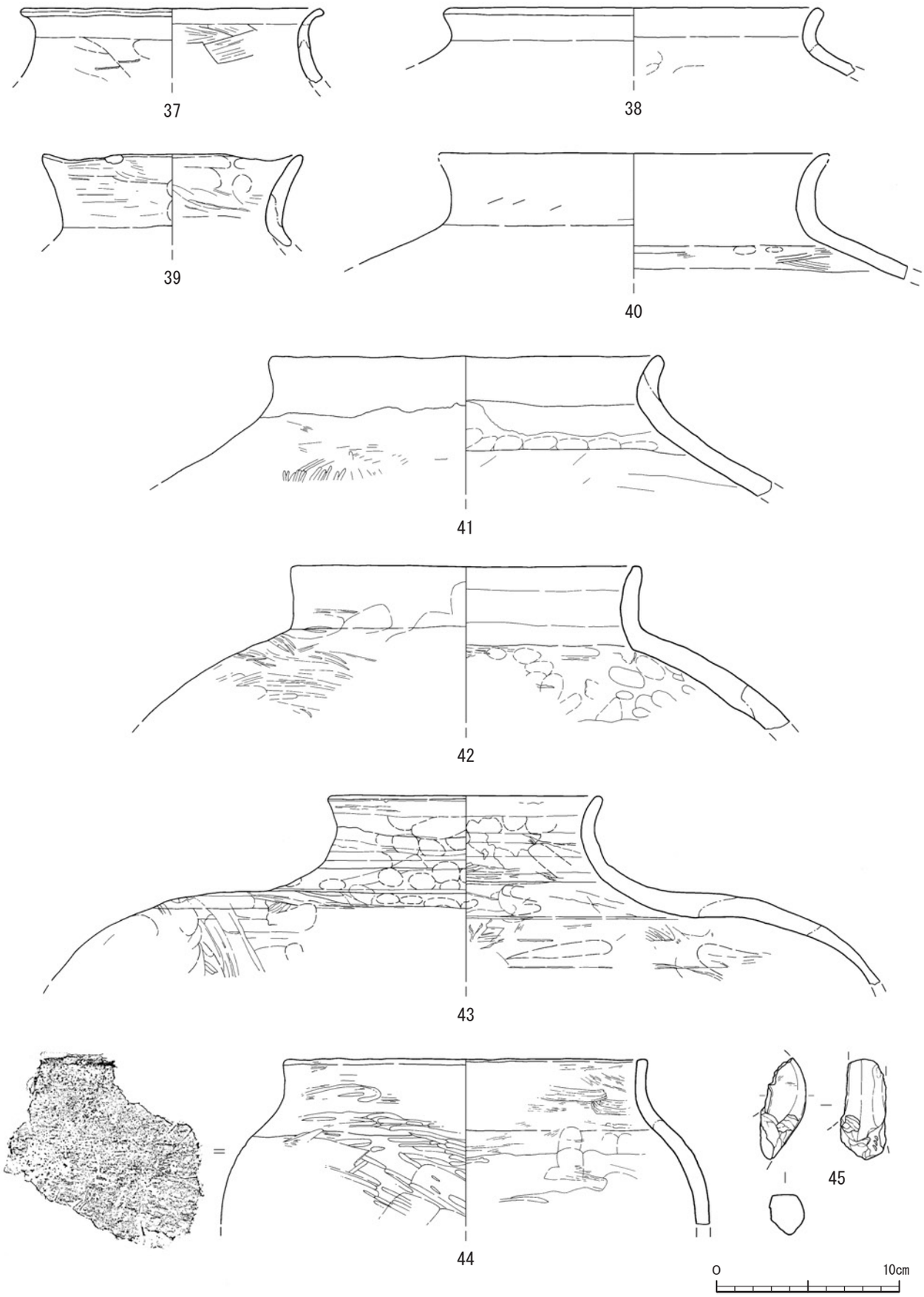
第 11 図　土器３



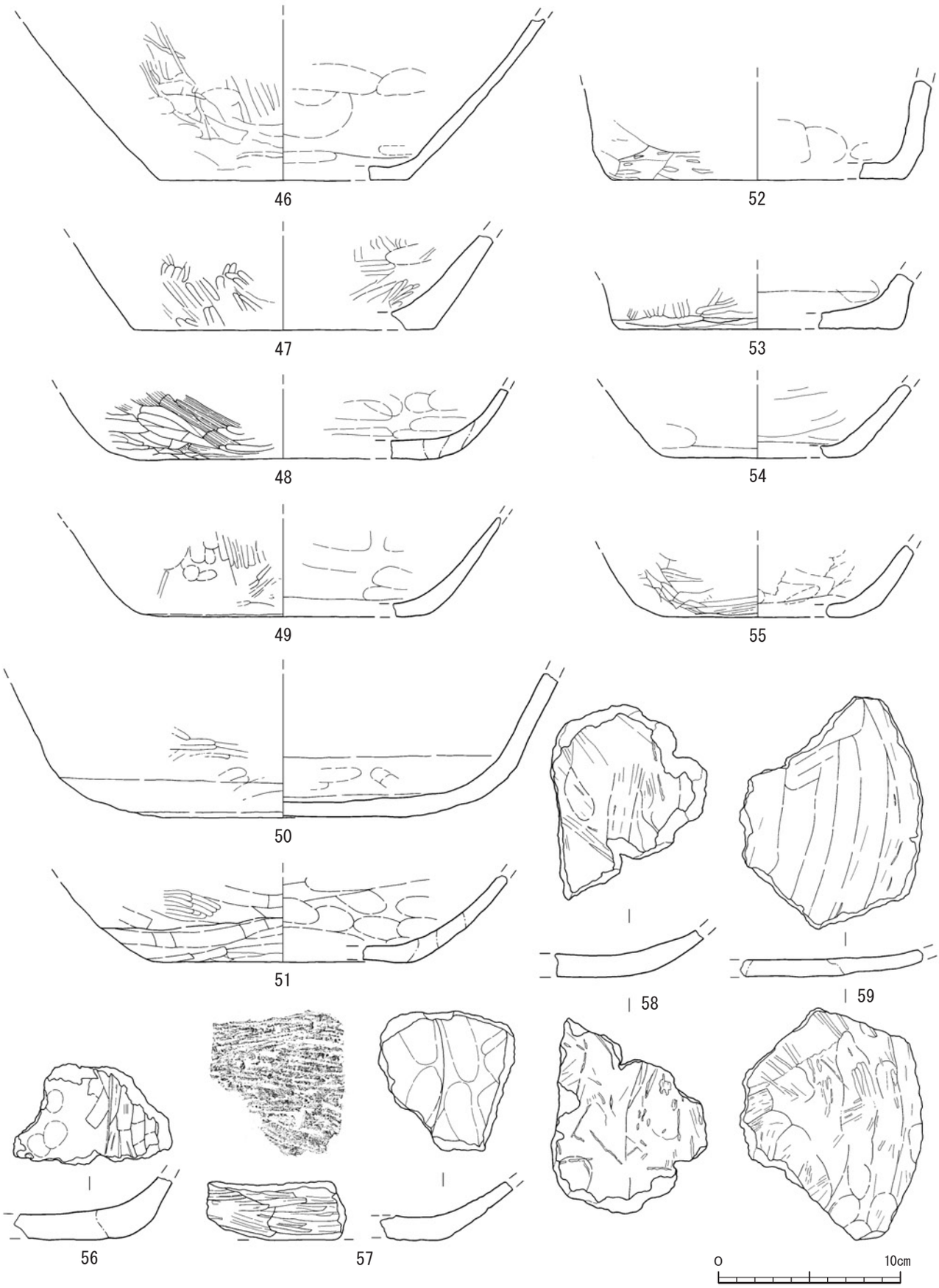
第 12 図　土器４



第 13 図　土器５



第 14 図　土器６



第 15 図　土器 7

２．　中国産陶磁器（青磁・白磁・青花・色絵・陶器）

中国産陶磁器には青磁・白磁・青花・色絵・陶器がある。種類ごとに特徴を述べる。特に説明がない分類記号については、瀬戸・玉城・仁王・宮城・安座間・松原 2007 による。

青磁（第 16 図、図版 18、第８・９表　60 ～ 71）

碗・皿が出土しており、碗が圧倒的に多い。

碗は、古手のものではⅣ類の底部（69）があるが、剣先蓮弁文（62）、雷文（63・64）、玉縁口縁（61・65）、外反口縁（66）、外底を釉剥ぎするもの（67・68）などのⅤ類や線描き細蓮弁文（60）のⅥ類が主体を占める。67 は見込み放射状へ小区画を配した八宝文風の型押し文が見られるもので、比較的良質である。

皿は、Ⅴ類と考えられるゆるく外反する皿（70)、Ⅵ類である稜花皿（71）がある。

白磁（第 16 図、図版 18、第 10・11 表　72 ～ 82）

碗・小碗・皿・瓶がある。中森期のものと近世に分けて説明する。

中森期の中で古手のものは、72 の浦口窯系とされるビロースクタイプⅢ（Ｃ３群）がある。主体を占めるのは邵武四都窯系（田中 2002）とされる内湾皿（Ｄ群）で、下半が露胎するもの（74）と、総釉のもの（75 ～

第８表　青磁出土状況

グリッド			1・2グリッド	1グリッド				2グリッド						3グリッド						4グリッド						不明	総計	個体数
層序・遺構			Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗8	P50	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗3	土抗6	P38	P59	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	P1	P26	P32	Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗1	土抗4	土抗5	P9	Ⅰ層下部		
器形	分類	部位																										
碗	蓮弁	口縁部					1																				1	44
	細蓮弁	口縁部						1		1					4						1	1					8	
	雷文	口縁部	1					1				1		1	2						2					1	9	
	玉縁	口縁部						2	1						1						1						5	
	外反	口縁部													2						1						3	
	直口	口縁部		1				3			1				6	2			1		1	1				2	18	
	胴部			4	1			10					1		20	2		1		1	9	2	1	1	1	4	58	
	底部										1						1					1					3	
皿	外反	口縁部				1																					1	5
	稜花	口縁部						1																			1	
	腰折	口縁部						1							2												3	
小計			1	5	1	1	1	19	1	1	2	1	1	1	37	4	1	1	1	1	15	5	1	1	1	7	110	49
グリッド小計			1	8				25						45						24						7	110	

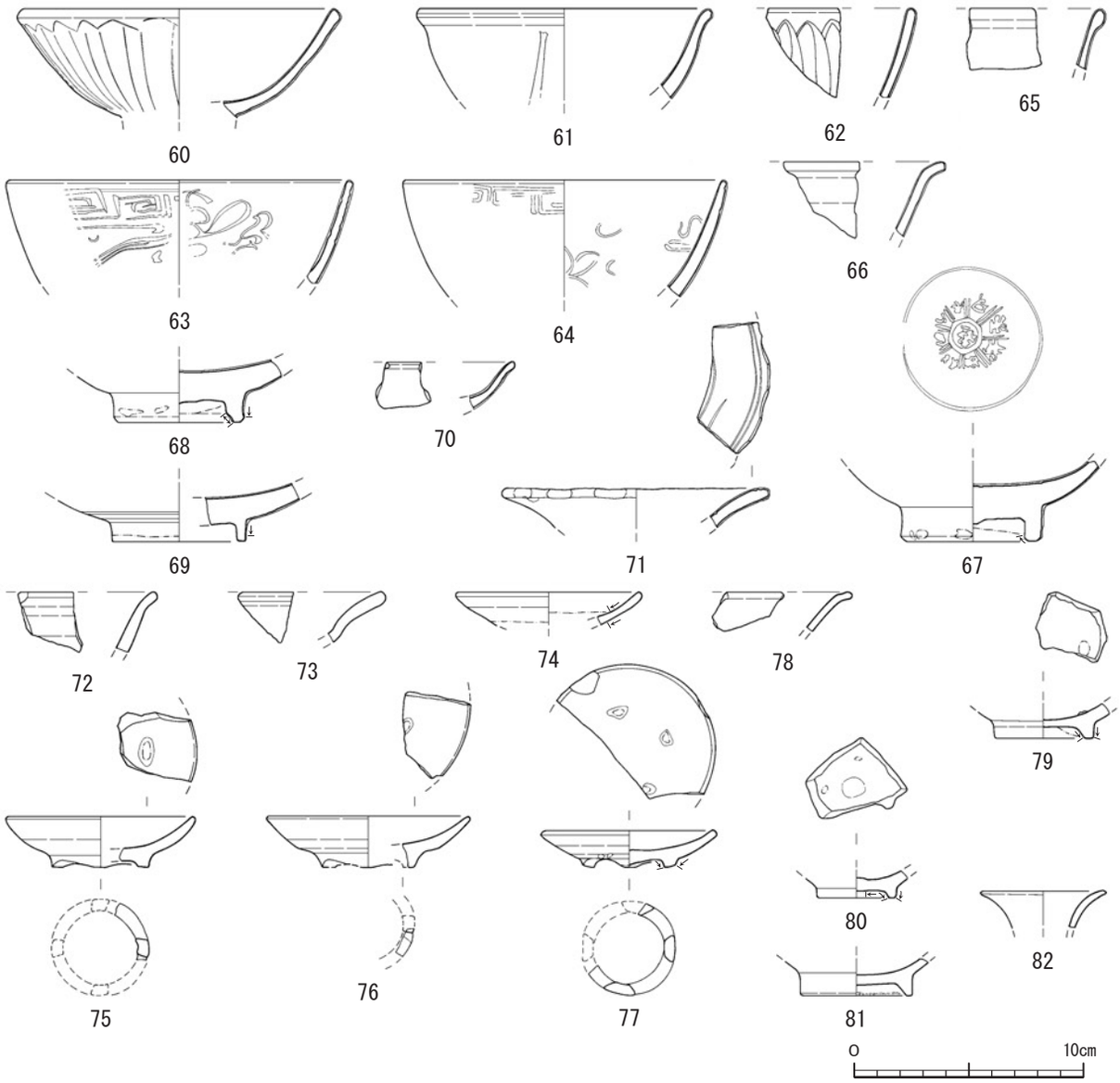
第９表　青磁観察一覧

図No	器形	文様・形態	分類	法量	色調		観察事項	出土地点
				口（底）	胎土	釉		
60	碗	細蓮弁文	Ⅵ－１	13.4	浅黄橙	くすんだ黄	蓮弁は弁先が接し、細線と大まかに対応。焼成不良。混入物の剥落。	３Ｇ　Ⅰ層下部
61	碗	玉縁口縁	Ⅴ－１	12.6	灰	暗緑	浅いヘラ彫により縦線があり、蓮弁かは不明。	２Ｇ　Ⅰ層下部
62	碗	剣先蓮弁文	Ⅴ－１	－	灰白	黄緑	蓮弁は弁先が剣先状で、細線と接し独立している。	２Ｇ　土坑３
63	碗	線刻雷文	Ⅴ－２	14.8	灰白	暗黄緑	ヘラ彫により外面は完結した雷文と草花文？、内面は草花文。	３Ｇ　Ⅰ層下部
64	碗	型押雷文	Ⅴ－２	13.8	灰白	黄緑	外面は型押による雷文、下位は無文。内面はヘラ彫の草花文？文様不鮮明。	１・２Ｇ　Ⅰ層下部
65	碗	玉縁口縁	Ⅴ－０	－	灰	暗緑	器面がざらついており、二次被熱の可能性。いわゆる佐敷タイプ	２Ｇ　Ⅱ層
66	碗	外反	Ⅴ－０	－	灰	暗黄緑	外面のロクロ目はやや顕著に残る。	３Ｇ　Ⅰ層下部
67	碗	型押文（八宝？）	Ⅴ	(4.6)	灰白	黄緑	外底は施釉後丁寧に剥ぐ。見込みは圏線内に、小区画を配し宝珠等を象る。	４Ｇ　土坑１
68	碗	底部	Ⅴ	(5.2)	灰白	緑灰	外底から高台端部の釉処理はやや粗い。	３Ｇ　Ｐ１
69	碗	底部	Ⅳ	(5.8)	灰	青緑	畳付は、施釉後に成形され平滑。外底は無釉で、黄褐色を呈する。	２Ｇ　土坑６
70	皿	外反	Ⅴ－０	－	灰	暗緑	外面の口縁端部は凹線。	１Ｇ　土坑８
71	皿	稜花	Ⅴ－０	11.4	灰白	黄緑	内面、口縁に圏線と細線あり。口縁端部は細かい剥離がある。	２Ｇ　Ⅰ層下部

第 10 表　白磁出土状況

グリッド			1グリッド		2グリッド	3グリッド			4グリッド	総計	個体数
層序・遺構			Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	P33	Ⅰ層下部		
器形	分類	部位									
碗	外反碗	口縁部			1					1	1
	胴部				6		3		4	13	
小碗	徳化窯A	底部			1		1			2	7
	徳化窯B	口縁部	1		1	1	3		1	7	
		胴部					2	1		3	
		底部			1				1	2	

グリッド			1グリッド		2グリッド	3グリッド			4グリッド	総計	個体数
層序・遺構			Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	P33	Ⅰ層下部		
器種	分類	部位									
皿	外反皿	口縁部					1			1	12
	端反皿	口縁部		1						1	
	内湾皿	完形			1		1		1	3	
		口縁部			2		3		2	7	
小杯	徳化窯B	底部					1			1	1
瓶	徳化窯B	口縁部							1	1	1
小計			1	1	13	1	15	1	10	42	22
グリッド小計			2		13	17			10	42	



第 16 図　青磁（60 ～ 71）・白磁（72 ～ 82）

第 11 表　白磁観察一覧

図No	器形	分類	法量			釉調	観察事項	出土地点
			口	器高	底			
72	外反碗	Ｃ３群	－	－	－	緑白色、光沢無	口縁端部が屈曲し外反。無文外反碗、ピロースクタイプⅢ。	２Ｇ　Ⅰ層下部
73	外反皿	Ｄ´群	－	－	－	緑白色、光沢無	外面下半は無釉。高台を有し、屈曲する口縁をもつ皿（浅形碗）。	３Ｇ　Ⅰ層下部
74	内湾皿	Ｄ群	7.8	－	－	薄灰色、光沢無	胴部下半は無釉、あまり見られないタイプ。	２Ｇ　Ⅰ層下部
75	内湾皿	Ｄ群	8.0	2.2	4.2	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡、高台に重ね焼き痕あり。胎土に気泡あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部
76	内湾皿	Ｄ群	8.8	2.2	4.0	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡、高台に重ね焼き痕あり。胎土に気泡あり。	２Ｇ　Ⅰ層下部
77	内湾皿	Ｄ群	7.3	1.55	4.0	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡（推定４つ）、高台に重ね焼き痕あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
78	端反皿	Ｅ群	－	－	－	乳白色、光沢無	口縁端部が丸く、上方にわずかに摘み上げる。	１Ｇ　Ⅰ層下部
79	小碗	徳化窯Ａ	－	－	4.2	黄灰色、貫入・光沢あり	高台まで釉を掛け、畳付は釉を剥ぐ。見込みに目跡あり。	２Ｇ　Ⅰ層下部
80	小碗	徳化窯Ａ	－	－	3.4	黄灰色、貫入・光沢あり	高台まで釉を掛け、畳付は釉を剥ぐ。見込みに目跡あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
81	小碗	徳化窯Ｂ	－	－	4.8	青白色、光沢あり	総釉、畳付砂付着。	２Ｇ　Ⅰ層下部
82	瓶	徳化窯Ｂ	5.4	－	－	薄灰色、光沢あり	細頸瓶の口縁。	４Ｇ　Ⅰ層下部

77）がある。その他、邵武四都窯系に近似するＤ´群外反皿（73）、景徳鎮窯系のＥ群端反皿（78）がある。

一方、近世のものとして、白く精良な胎土で型作りの徳化窯系のものも多く出土しており、大きく２タイプに分けた。Ａ類（79・80）は、透明感がなく見込みに目跡を有し外底が露胎とする小碗で、近いものとして大坂城下町跡の 18 世紀前半とされる資料（森 2001）がある。Ｂ類（81・82）は透明感があり、沖縄では通例出土するもので、小碗（81）と瓶（82）がある。

青花（第 17 図、図版 18、第 12・13 表　83 ～ 107）

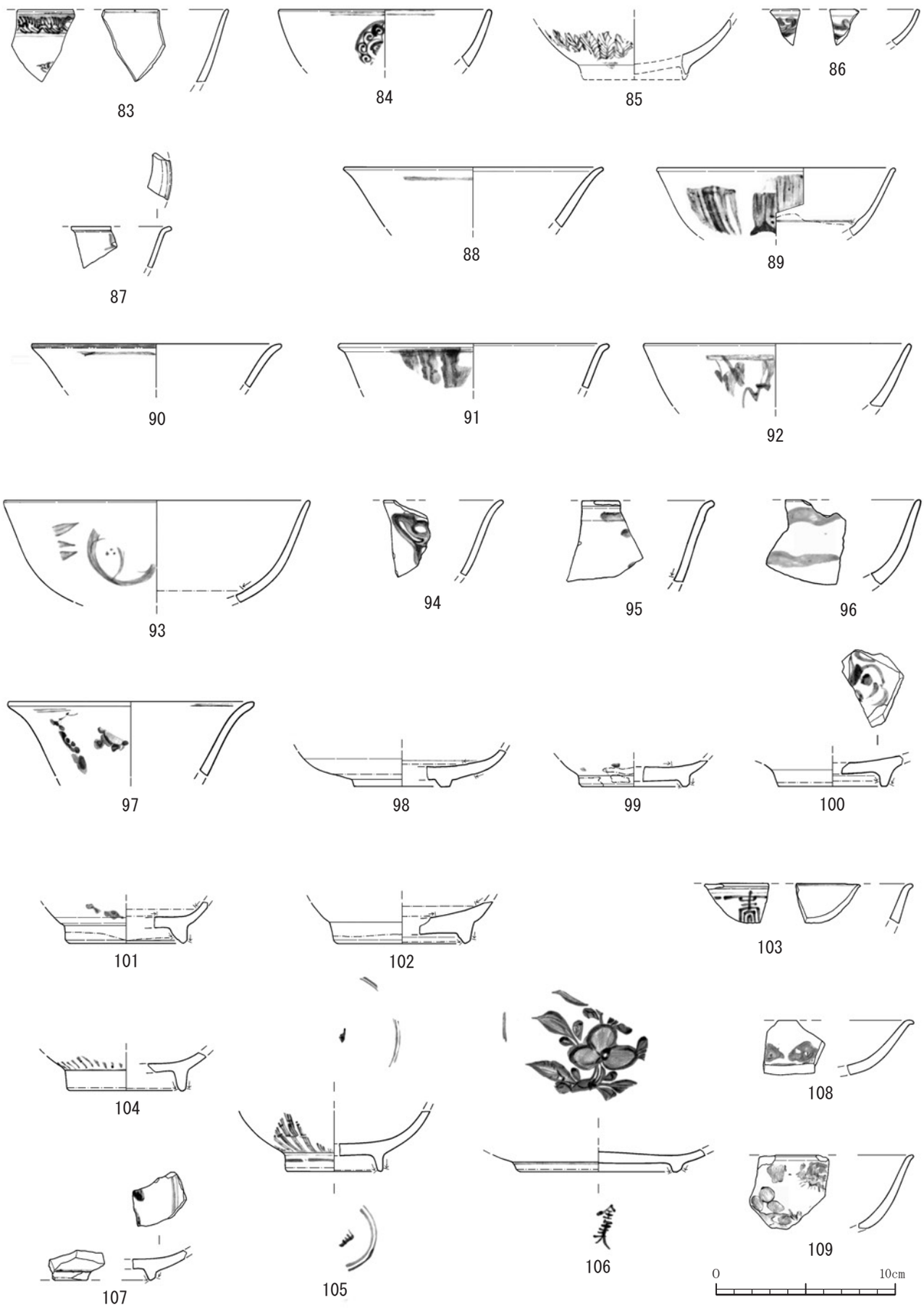
碗・小碗・皿があり、碗が最も多い。生産地により、景徳鎮窯系、漳州窯系、徳化窯系、福建・広東系の大き

第 12 表　青花出土状況

グリッド				1グリッド			2グリッド							3グリッド					4グリッド			接合		不明			総計	個体数
層序・遺構				Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗8	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗6	P39	P44	P45	P61	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	P18	P33	Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗1	2GⅠ下＋4GⅠ下	2G土抗6＋3GⅠ下	Ⅰ層	Ⅰ層下部			
窯・分類		器形	部位																									
青花	景徳鎮	碗	口縁部												1					1	1						3	3
			底部				1								1							1					3	
		小碗	口縁部		1																						1	1
			胴部																		1						1	
		皿	口縁部																						1		1	1
	徳化窯	碗	口縁部	1			5								6	1				6	1		1		1	1	23	23
			胴部				2	1						1	9	1	1			6				1	2		24	
			底部		1		1			1	1				2				1	3							10	
		小碗	口縁部											1													1	1
			底部												1												1	
		皿	口縁部				1																				1	2
			胴部												2												2	
			底部				1					1															2	
	福建・広東	碗	口縁部	2	1		1		1						3	1				3	1				2		15	15
			胴部	1		1	4						1		5	1				4					1		18	
			底部		1										3												4	
	漳洲窯	碗	胴部				1																		1		2	2
			底部															1			1						2	
色絵	碗		口縁部																	1							1	1
	皿		口縁部																1								1	1
小計				4	4	1	17	1	1	1	1	1	1	2	33	4	1	1	2	24	5	1	1	1	8	1	116	50
グリッド小計				9			23							41					31			2		10			116	

第 13 表　青花・中国産色絵観察一覧

図No	器形	窯・分類	法量	色調		観察事項	出土地点
			口（底）	釉	呉須		
83	碗	景徳鎮・Ｄ群	－	薄灰	不良	全体的に発色が鈍い。外面は上部横帯に波涛文。胴部はアラベスク文。	３Ｇ　Ⅰ層下部
84	碗	景徳鎮・Ｅ群	11.6	灰白	良好	外面は２条の圏線、花弁を象った円文。	４Ｇ　Ⅰ層下部
85	碗	景徳鎮・Ｃ群	(推5.6)	灰白	良好	外面、焦葉文。	２Ｇ＋４Ｇ　Ⅰ層下部
86	皿	景徳鎮・Ｅ群	－	灰白	良好	内外面共、圏線１条、草花文か。	不明　Ⅰ層下部
87	小碗	景徳鎮	－	灰白	良好	口縁端部が強く折れる。器壁は２㎜以下と非常に薄い。	１Ｇ　Ⅰ層
88	碗	福建・広東	14.2	薄灰	薄い	外面、上部に３㎜と太目の圏線。	２Ｇ　Ⅰ層下部
89	碗	福建・広東	13.0	灰青	良好	外面は呉須が滲み、文様は縦方向だが不明。内面の圏線は一部無釉。貫入多い。	４Ｇ　Ⅰ層下部
90	碗	福建・広東	14.0	薄灰	良好	口縁端部にロサビ。外面の呉須が滲み、圏線１条と不明文様あり。貫入多い。	１Ｇ　Ⅰ層下部
91	碗	福建・広東	14.8	灰白	良好	外面は呉須が滲み、圏線１条と文様は縦方向だが不明。貫入多い。	４Ｇ　Ⅰ層下部
92	碗	徳化窯	14.8	灰青	不良	外面は圏線１条、曲線による文様、草花文か？	不明　Ⅰ層下部
93	碗	徳化窯	16.8	灰白	良好	外面は円文と折枝文か？	４Ｇ　Ⅰ層下部
94	碗	福建・広東	－	黄白	不良	外面の文様は不明。ロクロ目がやや目立つ。貫入非常に多い。	３Ｇ　Ⅰ層下部
95	碗	福建・広東	－	黄白	良好	外面の文様は不明。釉に黒色の斑点目立つ。貫入非常に多い。	３Ｇ　Ⅰ層下部
96	碗	徳化窯	－	灰青	良好	外面は長く延びる文様があり、草か雲文か？	２Ｇ　土坑６
97	碗	徳化窯	13.6	灰白	良好	外面は２条の圏線、花弁もしくは折枝文か。内面は２条の圏線。	４Ｇ　土坑１
98	碗	漳州窯	(5.4)	薄灰	薄い	胴部下半、見込みを釉剥ぎ。見込みに１条の圏線。露胎部は橙色を呈す。	３Ｇ　Ｐ33
99	碗	漳州窯	(5.8)	黄白	不良	胴部下半より外底は部分的に釉が掛かる。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	４Ｇ　土坑１
100	碗	景徳鎮・Ｄ群	(6.0)	灰青	良好	胎土の気泡・剥落が目立つ。見込みは花弁か草花文か。畳付は褐色を呈す。	３Ｇ　Ⅰ層下部
101	碗	福建・広東	(6.4)	黄白	不良	畳付は釉剥ぎ。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面の文様は不明。	３Ｇ　Ⅰ層下部
102	碗	福建・広東	(7.0)	黄白	不良	畳付は釉剥ぎ。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面の文様は不明。	１Ｇ　Ⅰ層下部
103	碗	徳化窯	－	灰青	良好	外面は、薄めの呉須による圏線２条と「寿」文。内面は、１条の圏線。	３Ｇ　Ⅱ層
104	碗	徳化窯	(6.4)	灰青	良好	外面は細線による蓮弁。	４Ｇ　Ⅰ層下部
105	碗	徳化窯	(5.4)	灰青	良好	外面は縦長の梵字文。外底は不明字款。畳付は褐色を呈す。見込みは不明文様。	１Ｇ　Ⅰ層下部
106	皿	徳化窯	(8.8)	灰青	良好	見込みは太線描きによる花折枝文。外底は「全美」の字款。	２Ｇ　Ⅰ層下部
107	皿	徳化窯	－	薄灰	良好	見込みは圏線２条に不明文様。高台部に圏線あり。	２Ｇ　Ｐ45
108	色絵碗	徳化窯	－	灰白	－	色絵は変質しており、文様は不明。緑・赤・黒を使用。	４Ｇ　Ⅰ層下部
109	色絵皿	徳化窯	－	灰白	－	色絵は変質しており、文様は不明。	４Ｇ　Ⅰ層



第 17 図　青花（83～107）・中国産色絵（108・109）

く４つに分類した（新垣 2003）。量的には徳化窯系が最も多く、次に福建・広東系が多いことから、近世のものが主体と言える。

景徳鎮窯系は、83・100 が腰折碗（Ｄ群）、85 が蓮子碗（Ｃ群）、84 が饅頭心碗（Ｅ群）、86 が見込みの広い直口皿（Ｅ群）、87 が端反の小碗である。

漳州窯系（福建博物館 1997）は、98 が見込みと外底、99 が見込みと畳付が無釉の碗である。

徳化窯系（陳 1999）は、92・93・96 が直口碗、97 は端反碗、103 は寿字銘の碗、104 は同種の可能性がある碗底部、105 が梵字文の碗、106・107 が直口皿である。

福建・広東系は見込みが露胎もしくは釉剥ぎすることが特徴で、88・90・91・94・95 が端反碗、89 が直口碗、101・102 は蛇の目釉剥ぎの底部である。

色絵（第 17 図、図版 18、第 12・13 表　108 ～ 109）

徳化窯系のものである。碗（108）、皿（109）がある。

褐釉陶器（第 18 図、図版 19、第 14・16 表　110 ～ 113）

褐釉陶器は壺である。110 は玉縁状口縁のもの（陶器３類）、111・112 は方形口縁で上げ底の底部のもの（陶器５類）、113 は平底のものである。

３．タイ産陶器（第 18 図、図版 19、第 15・16 表　114）

タイ産陶器は、褐釉陶器の壺（114）が出土しており、産地はシーサッチャナライ窯系である（向井 2003）。その他、胴部片は釉・胎土の特徴から、本来は数個体があったものと思われる。

４．台湾産陶器（第 18 図、図版 19、第 16 表　115）

115 は、ロクロ成形された上面が平坦な蓋で耳状の把手が貼り付けられたものである。胎土に赤色鉱物が含まれていることが特徴的である。その特徴から台湾台北郊外の新北市鶯歌などで近代（日本植民地時代）に生産さ

第 14 表　中国産褐釉陶器出土状況

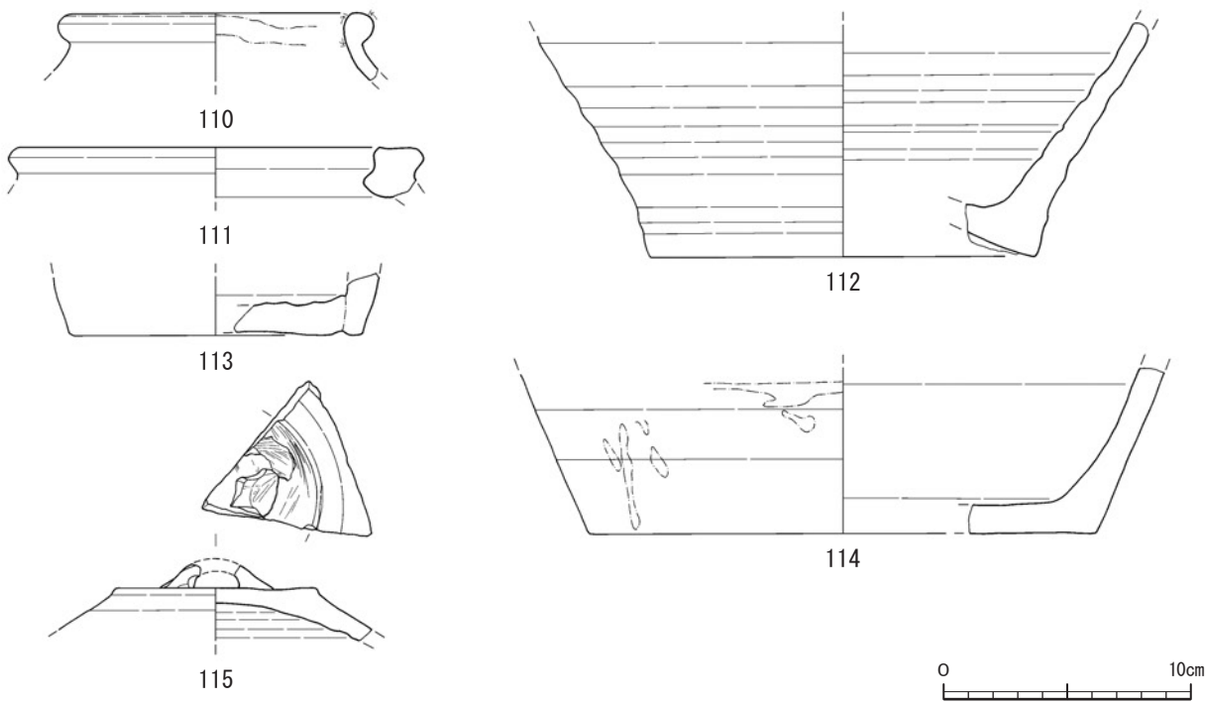
グリッド		1グリッド			2グリッド							3グリッド										4グリッド					接合		不明			総計	個体数
層序・遺構		Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗8	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗3	土抗6	P41	P58	土抗墓2	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗7	P17	P21	P23	P28	P30	P33	Ⅰ層	Ⅰ層下部		土抗1	P9	3GⅠ下＋土抗1	3GP22＋土抗1	Ⅰ層	Ⅰ層下部			
器形　部位																							貝集中地										
壺	口縁部												1											1								2	5
	胴部	5	1	1	26	1	2	3	2	2		2	102	6	2	1	2	2	1	1	1	1	1	49	11	1	1	1	1	25	1	255	
	底部					1					1			1											1					1		5	
小計		5	1	1	26	2	2	3	2	2	1	2	103	7	2	1	2	2	1	1	1	1	1	50	12	1	1	1	1	26	1	262	5
グリッド小計		7			38							122										65					2		28			262	

第 15 表　タイ産褐釉陶器出土状況

グリッド		1グリッド		2グリッド		3グリッド				4グリッド		不明	総計	個体数
層序・遺構		Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	P28	Ⅰ層下部	土抗1	Ⅰ層下部		
器形　部位														
壺	胴部	3	1		4	4	16	3	1	3	2	5	42	1
	底部			1									1	
小計		3	1	1	4	4	16	3	1	3	2	5	43	1
グリッド小計		4		5		24				5		5	43	

第 16 表　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・台湾産陶器観察一覧

図No	種類	器形	法量 口（底）	観察事項	出土地点
110	中国産褐釉陶器	壺	11.6	胎土は橙色、混入物は少ない。釉は口縁は掛からず、胴部は薄い黄緑色。玉縁状口縁。	３Ｇ　Ⅰ層下部
111	中国産褐釉陶器	壺	15.6	胎土は褐灰色、混入物は石英等だが少ない。釉は黄赤黒色。方形口縁。	４Ｇ　Ⅰ層下部
112	中国産褐釉陶器	壺	(15.4)	胎土は褐灰色、混入物は少ない。釉は黄赤黒色。外底は厚く砂礫が付着。	不明　Ⅰ層下部
113	中国産褐釉陶器	壺	(11.8)	胎土は褐灰色、混入物は石英等で多い。釉は灰黄赤色。内底はロクロ目が顕著。	２Ｇ　土坑墓２
114	タイ産褐釉陶器	壺	(20.6)	胎土は灰色、混入物は長石等だが少ない。釉は暗赤色で、外底は露胎。器面は平滑。	２Ｇ　Ⅰ層
115	台湾産明陶器	蓋	8.0	胎土は黄橙色、混入物は赤色鉱物でやや多い。耳状把手がつく破片だが、現況では無釉。	１Ｇ　Ⅰ層



第 18 図　中国産褐釉陶器（110 ～ 113）・タイ産褐釉陶器（114）・その他の輸入陶磁器（115）

参考写真　沖縄県立博物館・美術館蔵 台湾産陶器

れた狗母鍋の蓋と考えられる（黄 2009）。

参考資料として、鶯歌製品として収蔵されていた沖縄県立博物館美術館収蔵品を挙げておく（参考写真）。口縁端部には内側への返し部があり、口径 16.4cm、上面径 6.5cm、高さ 4.3cm である。色調は口縁端部が橙色、他は淡黄色を呈している。また、同様の産地とする短い把手付の鍋と共に収蔵されていたが、その色調や胎土からはやや異なっており、対応するものかは不明である。

５．本土産陶磁器（染付・陶器・色絵）

本土産陶磁器には、染付・陶器・色絵があり、産地では肥前及び波佐見・薩摩・京系がある。

染付（第 19 図、図版 19、第 17・18 表　116 ～ 126）

碗・皿・瓶・小杯・小碗がある。産地は肥前及び波佐見である（九州近世陶磁学会 2000）。時期幅としては肥前Ⅱ～Ⅴ期（17 世紀中葉～ 19 世紀前半）に当たるが、Ⅲ期（17 世紀後半～ 18 世紀中葉）のものが多い。

碗（116 ～ 119）　118 が見込み蛇の目剥ぎの碗で波佐見であるが、他は肥前と思われる。119 は見込みの五弁花は大振りで丁寧なもので、外底が「大明年製」銘である。

皿（120・121）　120 は青磁に近い釉調である。121 は見込みの五弁花は小振りで、外底が２列３文字の「年製」銘である。

瓶（122 ～ 126）　122 は口縁端部の段が明瞭、126 は碁笥底であることから、共にⅡ－２期（17 世紀中葉）のものである。

陶器（第 19 図、図版 19、第 17・18 表　127 ～ 133、）

碗・皿・鉢・壺がある。産地は肥前、薩摩、京系がある。

肥前（127 ～ 131）　碗（127 ～ 129）、皿（130）は銅緑釉のもので、内野山窯のⅢ期に相当する。鉢（131）は、刷毛目調整の三島手のもので、肥前Ⅳ期である。

京系（132）軟質な胎土をもち透明釉を施す碗である。

薩摩（133）口縁が平坦面をもつ壺で、苗代川窯製品と思われる。

色絵（第 19 図、図版 19、第 17・18 表　134）

赤色で絵付がされる瓶（134）があり、肥前Ⅲ期のものである。

６．沖縄産陶器

土器の次に多いもので、施釉陶器、無釉陶器、陶質土器がある。これらの生産地であるが、壺屋などの沖縄本島、いわゆる八重山焼とされる石垣島が考えられるが、全てを確定することは困難であるため、特徴的なものについて個別に触れる。

施釉陶器（第 20 図、図版 20、第 19・20 表　135 ～ 161）

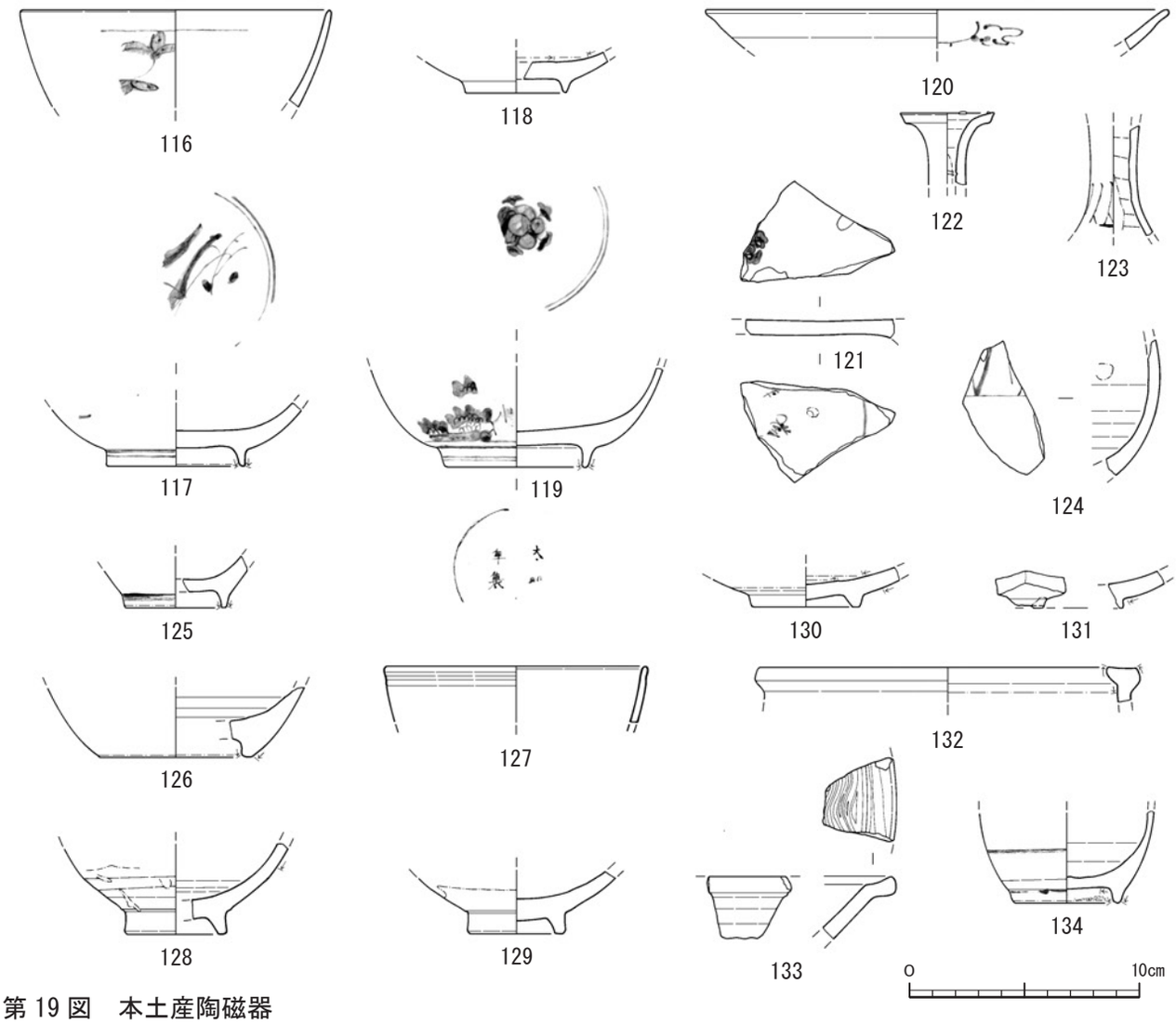
方言では「上焼（ジョウヤチ）」と称され、施釉や絵付を生地土に直接行うものと、化粧土の上から行うものがある。器形には、碗・小碗・皿・鉢・壺・瓶・急須・蓋・火入がある。

碗（135 ～ 145）　施釉方法から、大きく２種類に分けられる。

碗Ａ（135 ～ 137・141・145）　灰もしくは褐釉を直接生地土に掛けるもので、胴部下半は露胎しており、

第 17 表　本土産陶磁器出土状況

グリッド				1グリッド		2グリッド		3グリッド		4グリッド			接合	不明		総計	個体数
層序・遺構				Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層下部	P45	Ⅰ層下部	Ⅱ層	Ⅰ層下部	土抗1	土抗4	2GⅠ下＋3GⅠ下	Ⅰ層下部			
種類	産地・分類	器形	部位														
陶器	肥前	碗	口縁部					2		2				1		5	5
			胴部			1		3		3			1	1		9	
			底部					2								2	
		皿	口縁部					1								1	1
			底部							1						1	
		鉢	底部							1						1	1
	京系	碗	口縁部			1										1	1
		急須	胴部					1								1	1
	薩摩系	壺	口縁部		1											1	1
染付	肥前（波佐見を含む）	碗	口縁部					2			1	1				4	4
			胴部	1		5		5		4	1			1		17	
			底部							1		1			1	3	
		小碗	胴部							1						1	1
		皿	口縁部							1						1	2
			底部				1			1						2	
		小杯	胴部					1								1	1
		袋物	胴部					1								1	1
		瓶	口縁部											1		1	2
			頸部						1							1	
			胴部		1			1		1						3	
			底部			1		1								2	
色絵	肥前	瓶	底部											1		1	1
小計				1	2	8	1	20	1	16	2	2	1	5	1	60	22
グリッド小計				3		9		21					1	6		40	



第 19 図　本土産陶磁器

第 18 表　本土産陶磁器観察一覧

図No	種類	器形	産地・分類	法量 口（底）	釉調	観察事項	出土地点
116	染付	碗	肥前・Ⅲ期	13.4	灰青	外面は圏線１条、草花文。	４Ｇ　土坑４
117		碗	肥前・Ⅲ期	(6.0)	明灰青	外面は胴部が不明文様、高台２条の圏線。見込みは圏線２条、草花文か。	４Ｇ　土坑４＋Ⅰ層下部
118		碗	波佐見・Ⅴ－Ⅰ期	(4.4)	明灰青	見込みは蛇の目釉剥ぎするが、露胎のまま。外面は胴部が圏線１条、高台に２条。	４Ｇ　Ⅰ層下部
119		碗	肥前・Ⅳ期	(6.2)	明灰青	高台内「太明年製」銘。外面は山水文。見込みは手描きの丸みがある五弁花。	不明
120		皿	肥前・Ⅲ期	20.0	白緑	釉調は青磁に近い。胴部内面は線描きにより折枝文か？	４Ｇ　Ⅰ層下部
121		皿	肥前・Ⅳ期	－	明灰青	高台内はおそらく２列３文字で「□□？□年製」銘。見込みは小ぶりの五弁花。	４Ｇ　Ⅰ層下部
122		瓶	肥前・Ⅱ－２期	4.0	黄白	胎土は軟質で、釉は白濁。口縁端部外面の段は明瞭である。内面頚部に絞り目あり。	不明　Ⅰ層下部
123		瓶	肥前・Ⅲ期	－	明灰青	胴部に一重網目文。内面頚部はロクロ目が顕著だが、絞り目は見られない。	４Ｇ　Ⅰ層下部
124		瓶	肥前・Ⅲ期	－	明灰青	胴部上半に一重網目文の下に圏線１条。	１Ｇ　Ⅰ層下部
125		瓶	肥前・Ⅲ期	(4.4)	灰白	外面の釉は光沢がない。高台に圏線２条。	３Ｇ　Ⅰ層下部
126		瓶	肥前・Ⅱ－２期	(6.6)	灰白	底部は碁笥底、端部のみ釉剥ぎ。器面が泡立っており、二次被熱の可能性。	２Ｇ　Ⅰ層下部
127	陶器	碗	肥前内野山・Ⅲ期	11.4	青緑	銅緑釉。口縁外面に４条の細線。	４Ｇ　Ⅰ層下部
128		碗	肥前内野山・Ⅲ期	(4.2)	灰緑	銅緑釉。腰高で撥状の器形。外面下半は露胎。ロクロ目は明瞭。	３Ｇ　Ⅰ層下部
129		碗	肥前内野山・Ⅲ期	(4.0)	灰緑	銅緑釉。丸みのある胴部。外底は切り離し痕が残る。外面下半は露胎。	３Ｇ　Ⅰ層下部
130		皿	肥前Ⅲ期	(4.7)	灰緑	銅緑釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半は露胎。	４Ｇ　Ⅰ層下部
131		鉢	肥前Ⅳ期	－	暗赤黄	内面は白化粧の刷毛目調整。口縁は屈曲し端部が直立。	４Ｇ　Ⅰ層下部
132		碗	京系	－	淡黄緑	透明釉。高台は無釉。	２Ｇ　Ⅰ層下部
133		壺	薩摩・苗代川窯	16.2	暗灰	口縁上面は無釉、筋目が見られる。内面は口縁より下は無釉。	１Ｇ　Ⅰ層下部
134	色絵	瓶	肥前Ⅲ期	(4.4)	灰白	高台、胴部に１条の赤色の圏線。畳付釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外底中央が無釉。	不明　Ⅰ層下部

方言で「フィガキー」と称される。八重山においてもこの種の碗が生産された可能性が指摘されており、その大きな特徴として釉薬の剥離現象が挙げられているが（阿利 2011）、今回の資料では明確ではなかった。しかしながら、別個体の口縁が付着するもの（137）、本島ではあまり見られない外底が大きく突出するもの（141）などは、この石垣島で生産された可能性も考えられよう。

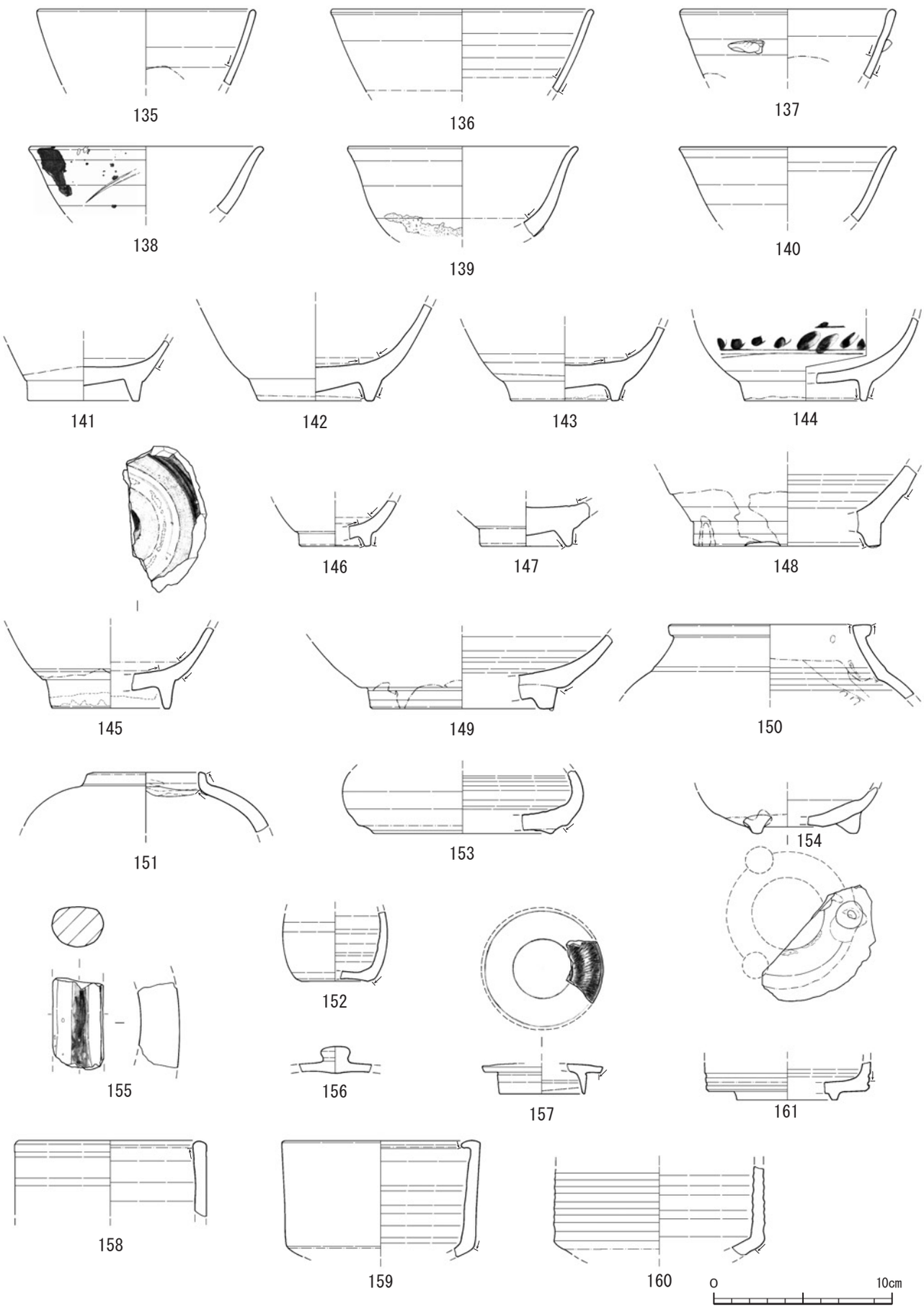
碗Ｂ（138 ～ 140・142 ～ 144） 白土を塗布した上に白釉を全体に掛け、見込みは蛇の目に、畳付を釉剥ぎするもので、白化粧碗と称される。部分的に黒釉などがかかる資料があり、138 はごく一部に、

第 19 表　沖縄産施釉陶器出土状況

グリッド		1グリッド		2グリッド						3グリッド							4グリッド					接合							不明			総計	個体数
層序・遺構		Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗6	P45	P48	P57	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	P1	P26	P28	P32	Ⅰ層	Ⅰ層下部	土抗1	土抗2下層	土抗4	2GⅠ下+4GⅠ下	2GP40+3GⅠ下+3GP33	3GⅠ下+1GⅠ下	3GⅠ下+2GⅠ下	3GP1+Ⅰ下	4GⅠ下+2GP45	4GⅠ下+3GⅠ	Ⅰ層	Ⅰ層下部			
器形	部位																																
碗	口縁部		1	4	2	1		1		2	18	1	1	1	1		2	13	9					1	1	1			1	3		64	64
	底部	1	2	1						1	9							9	1						1			1		1	27	
	胴部			7	1		1		1		29	3				1	1	11	4	1							1			5	66	
小碗	口縁部										3	2							1												6	6
	底部										2							2											1	1	6	
皿	口縁部										1	1							1												3	3
	底部																1														1	
鉢	口縁部			1																											1	3
	底部			1							1						1														3	
	胴部			1		1					1												1								4	
小鉢	口縁部		1																												1	1
壺	口縁部																	1	1												2	2
	底部					1																									1	
小壺	胴部																	1													1	1
	底部										1																				1	
瓶	底部							1																							1	1
急須	把手	1																													1	1
	把手（耳）										1																				1	
	底部																		1												1	
	胴部			1							8		1					2													12	
急須（フタ）	口縁部										1																				1	1
蓋	口縁部			1															1												2	2
火入	口縁部																	1				1									2	4
	胴部										1							1													2	
	底部	1										1																			2	
袋物	胴部			1							3	1	1					4											1		11	1
香炉	口縁部										1																				1	1
器種不明	胴部										1							5			2										8	1
小計		3	4	18	3	3	1	2	1	3	81	9	3	1	1	1	5	50	19	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	11	1	232	92
グリッド小計		7		28						99							77					8							13			232	

第 20 表　沖縄産施釉陶器観察一覧

図No	器形	法量 口（底）	胎土の色調・混入物等	釉の通称（色調）・施釉範囲・呉須	その他観察事項	出土地点
135	碗Ａ	12.0	鈍黄、精良	灰釉（灰緑）、胴部上半のみ（ﾌｨｶﾞｷｰ）	直口口縁、端部丸い。	４Ｇ　Ⅰ層下部
136	碗Ａ	14.4	鈍黄橙、精良	褐釉（暗赤黄）、胴部上半のみ（ﾌｨｶﾞｷｰ）	直口口縁、端部丸い。	１Ｇ＋３Ｇ　Ⅰ層下部
137	碗Ａ	11.6	灰、気泡あり	灰釉（薄黄緑）、胴部上半のみ(ﾌｨｶﾞｷｰ)	直口口縁、端部丸い。外面に別個体片が付着。	４Ｇ　土坑１
138	碗Ｂ	12.8	灰黄褐、精良	白釉（薄黄灰）、部分的に黒釉（黒褐色）掛かる	ゆるい外反口縁。外面線刻による文様あり。	２Ｇ　Ⅰ層下部
139	碗Ｂ	12.6	鈍黄橙、長石等少	外面黒釉（黒）、内面白釉（薄黄白）蛇の目釉剥ぎ	ゆるい外反口縁。外面下半に砂礫多く付着。	４Ｇ　Ⅰ層下部＋土坑１
140	碗Ｂ	11.8	鈍黄橙、気泡あり	白釉（薄黄白）	端部がわずかに外反する口縁。	３Ｇ　Ⅰ層下部
141	碗Ａ	(6.2)	灰、長石等少	灰釉（灰緑）、胴部上半のみ（ﾌｨｶﾞｷｰ）	高台の削り出しが明瞭、外底はやや突出。	４Ｇ　Ⅰ層下部
142	碗Ｂ	(6.3)	鈍黄橙、褐色粒含	白釉（薄黄白）、畳付・内面蛇の目釉剥ぎ	無文。見込みに重ね焼き痕。外底はやや突出。	４Ｇ　土坑１
143	碗Ｂ	(6.1)	浅黄橙、気泡あり	白釉（薄黄白）、畳付・内面蛇の目釉剥ぎ	無文。見込みに重ね焼き痕。胴部ロクロ目顕著。	３Ｇ　Ⅰ層下部
144	碗Ｂ	(6.8)	褐灰、精良	白釉（黄灰）、畳付釉剥ぎ、呉須（青１色）	外面の文様は横方向。外底に同心円状の刷毛目。	３Ｇ　Ⅰ層
145	碗Ａ	(6.4)	鈍黄橙、精良	褐釉（暗赤黄）、高台下露胎　見込蛇の目釉剥ぎ	内面は部分的に白釉を塗る。釉剥ぎ部は露胎。	３Ｇ　Ⅰ層下部
146	小碗Ｂ	(3.8)	鈍黄橙、気泡あり	白釉（薄黄白）、畳付・内面蛇の目釉剥ぎ	見込みは内湾。	４Ｇ　Ⅰ層下部
147	小碗Ｂ	(4.7)	鈍褐、褐色粒等含	褐釉（暗緑黄）、畳付・内面蛇の目釉剥ぎ	見込みの釉剥ぎ部は露胎。	不明　Ⅰ層下部
148	鉢	(10.0)	灰、気泡あり	黒釉（黒）、外面は胴部・外底、内面	釉は外面が１㎜と厚いが、内面は薄い。	３Ｇ　Ⅰ層下部
149	鉢	(10.0)	灰褐、気泡あり	黒釉（黒）、外面高台上のみ	内面は明褐色を呈す。釉は１㎜と厚い。	２Ｇ　Ⅰ層下部
150	壺	11.0	灰黄、精良	黒釉（黒褐）、口縁上面・内面胴部は露胎	内面胴部は部分的に薄い黒透明釉。	４Ｇ　Ⅰ層下部
151	壺	6.6	淡黄、気泡あり	白釉（薄黄白）、外面は瑠璃釉（暗紫青）重ねる	口縁端部釉剥ぎ。	４Ｇ　土坑１
152	壺	(3.6)	暗褐、白色粒含	白釉（薄黄白）、外面胴部	丁寧なロクロ成形。内面はロクロ目顕著。	２Ｇ　土坑６
153	瓶	(10.0)	灰、精良	黒釉（黒）、外面胴部高台より上のみ	高台は貼付により低い。最大径13.2㎝。	２Ｇ　Ｐ48
154	急須	(6.9)	灰白、精良	黒釉（黒）、外面胴部下半より上のみ	丁寧なロクロ成形。内面はロクロ目顕著。	４Ｇ　土坑１
155	急須	－	灰黄、石英等含	なまこ釉（青白）、部分的に緑青	厚み2.1㎝、幅2.8㎝と厚手大型の把手。	１Ｇ　Ⅰ層
156	蓋	－	赤褐、石英等含	褐釉（黄赤）、外面のみ	つまみ径1.6㎝、高0.9㎝。	４Ｇ　土坑１
157	蓋	(4.8)	灰黄、精良	緑釉（灰黄緑）、外面のみ	最大径6.7㎝。上面、櫛による線状文。	２Ｇ　Ⅰ層下部
158	火入	10.2	橙、石英等含	褐釉（暗褐）、口縁端部より外面	内面、布目状の細線が顕著。	４Ｇ　Ⅰ層下部
159	火入	10.6	灰白、精良	灰釉（淡灰緑）、口縁端部より外面、外底は褐色	釉は透明感があり、貫入が多い。	２Ｇ＋４Ｇ　Ⅰ層下部
160	火入	－	灰、精良	黒釉（黒褐）、外面胴部のみ、露胎部は黄褐色	胴部径11.0㎝。外面はロクロ目が波板状を呈す。	４Ｇ　Ⅰ層下部
161	火入	(5.6)	灰黄、石英等含	黒釉（黒）、外面胴部のみ	胴部径9.0㎝。底部端に凹線２条。	３Ｇ　Ⅱ層



第 20 図　沖縄産施釉陶器

139 は外面に見られる。後者には多くの砂礫が付着しており、やや不良品の印象がある。144 は、青色の呉須で絵付けがされる。

小碗（146・147） 小碗は、碗の分類でＢ類に相当する。

鉢（148・149） 比較的厚い黒釉が掛けられる資料である。

壺（150 ～ 152） 150 は頸部が屈曲しないもの。151 は直立する短い頸部をもつ白化粧されるもの。152 は油壺と称される徳利形の小壺で、胎土が硬質、暗褐色であまり見られない資料である。

瓶（153） 方言で「カラカラ」と称される注口つきで下膨れの胴部をもつ瓶である。

急須（154・155） 154 は急須の底部で、155 は白化粧された大型急須の把手である。

蓋（156・157） 共におそらく急須の蓋と思われる。

火入（158 ～ 161） 筒型の胴部をもち内面が露胎するものである。

無釉陶器（第 21・22 図、図版 20、第 21・23 表　162 ～ 184）

方言では「荒焼（アラヤチ）」と称され、比較的高温で焼成された焼き締め陶器で、自然釉やマンガン釉が掛かったものもある。石垣島では、名蔵・阿香花・平田・高山壺屋の各窯跡では無釉陶器が採集されており（佐賀県 1998）、黒石川窯跡では発掘調査が行われており無釉陶器が生産されていた（石垣市教委 1993 d）。現時点では、形態的に八重山と限定できる出土資料は明確とは言えない。しかしながら、胎土や色調の特徴として、石英等の混入物が比較的多く（166・175 など）、色調が灰もしくは黒色を呈するもの（177・184）などは本遺跡でも見られる。

器形には、壺・甕・擂鉢・鉢・瓶・蓋・急須・火入・焜炉・香炉がある。

壺（162 ～ 166･168･169） 162 は小さな玉縁口縁をもつ小型のもの。163 は短い頸部をもち肩が張るもの。164 ～ 166 は方形口縁とあまり張らない胴部をもつもので、166 は口縁上面に 4 条の凹線をもちあまり見られない。168 はあまり張らない胴部の底部で、棒状工具の痕跡が明瞭に残り、あまり例をみない。169 は大型のもので、おそらく水甕とされるものだが、最大径が胴部に見られることからここでは壺とした。

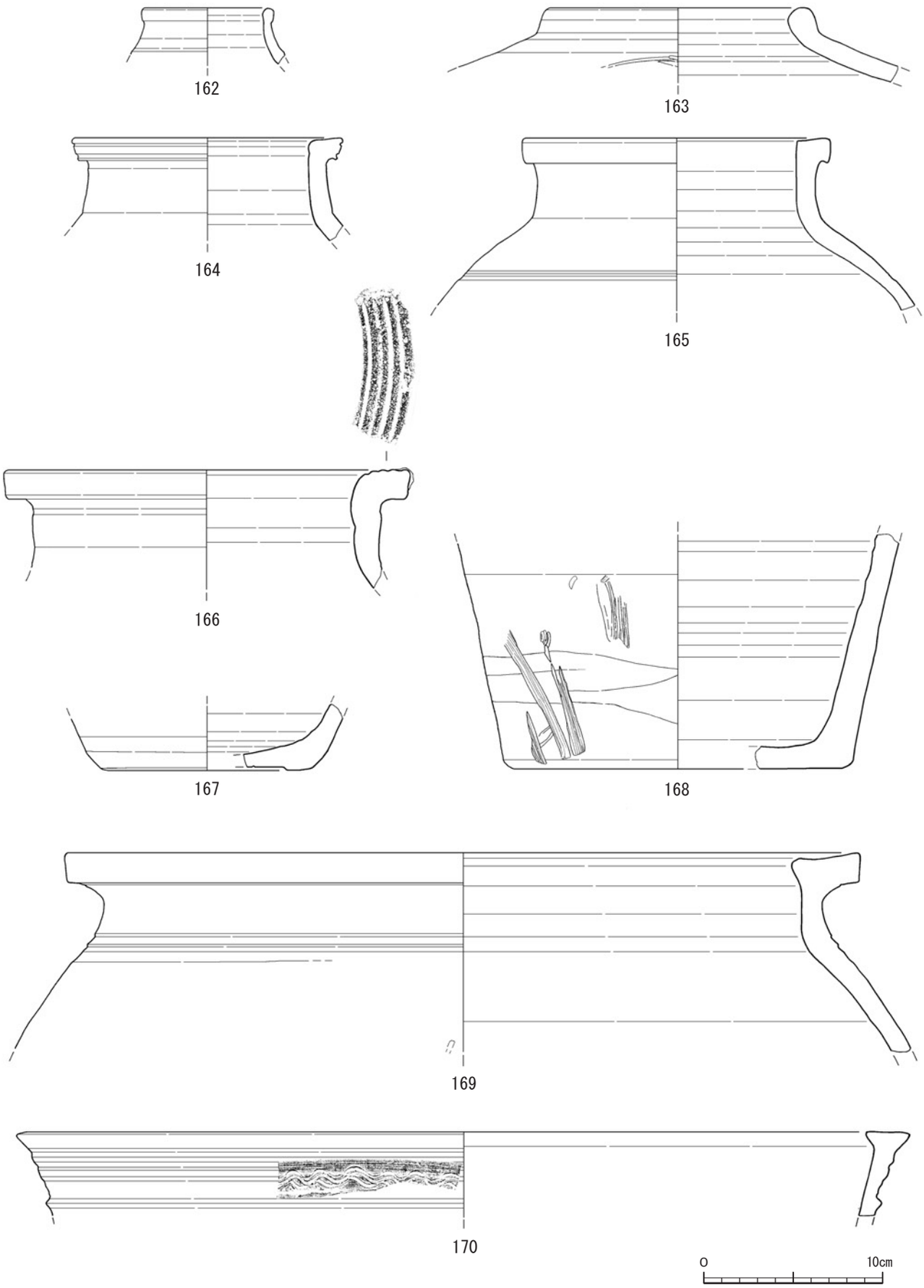
甕（170） 凹線と波状文が施された直立する口縁のもので、胴部は直線的なものと思われる。

擂鉢（171 ～ 175） 口縁が長く水平に伸びるもの（171）、短く屈曲部をもつもの（172・173）、底部では丸みがあるもの（174）、直線的なもの（175）がある。

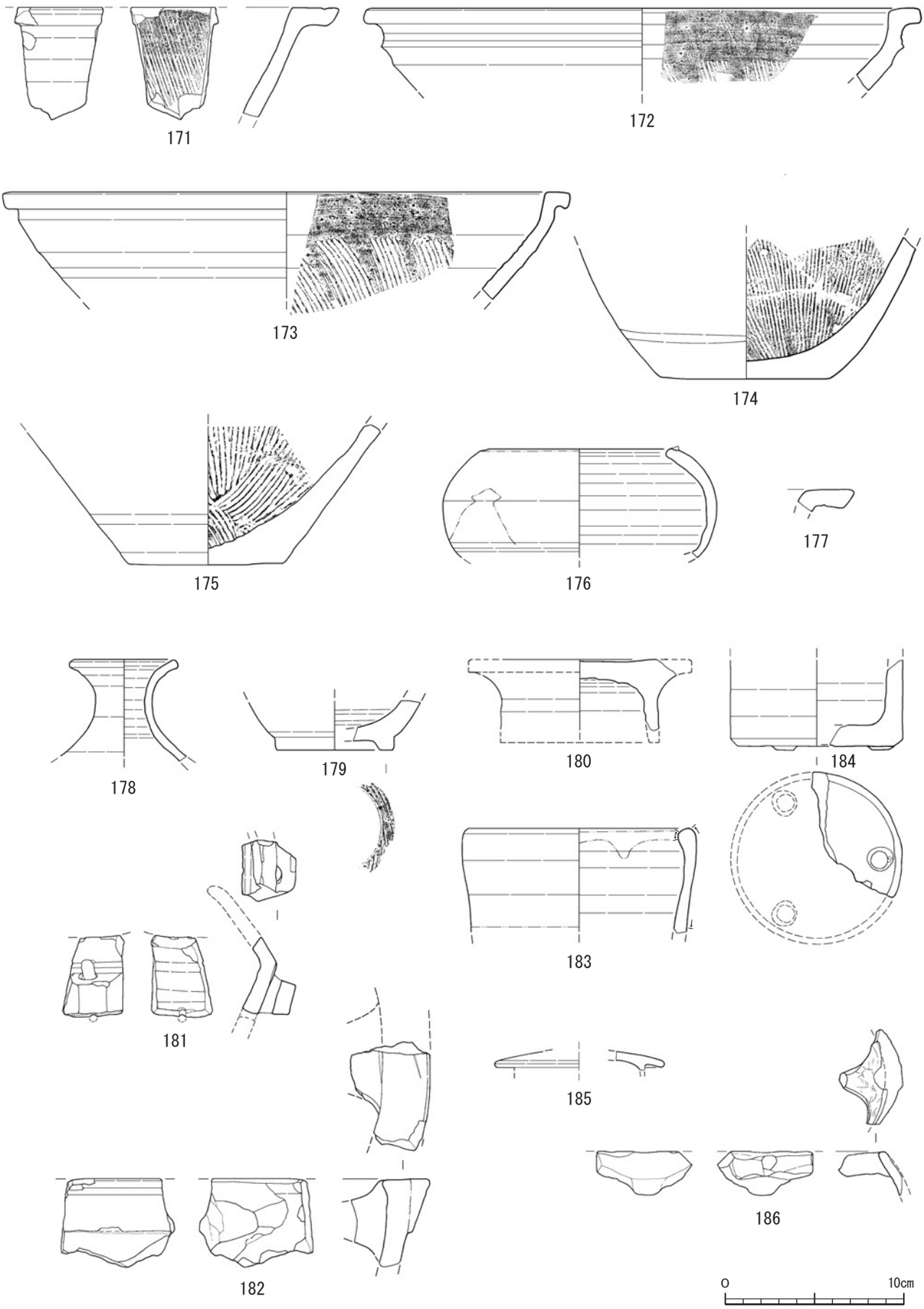
鉢（176・177） 176 は無頸で胴部がまるく寸胴形のもので、自然釉がかかっている。177 は深鉢の鍔状口

第 21 表　沖縄産無釉陶器出土状況

グリッド		1グリッド		2グリッド									3グリッド						4グリッド						接合			不明		総計	個体数
層序・遺構		Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	土抗6	P38	P45	P57	P58	P59	Ⅰ層	Ⅰ層下部	Ⅱ層	P1	P23	P60	Ⅰ層	Ⅰ層下部 貝集中地	Ⅰ層下部	土抗1	P4	P8	3GP32+不明Ⅰ層	3GP33＋2GⅠ下	4GⅠ下＋土抗1	Ⅰ層	Ⅰ層下部		
器形	部位																														
壺	口縁部		1	1	1				1					5					1		1	4	1						1	17	17
	底部													1																1	
壺or甕	把手																1													1	
	胴部	13	10		45	2	2	1		2		1	3	102	1	1		1	3	1	79	19		1		1	1	5	20	314	
	底部	1	2		4									8							4	1								20	
小壺	口縁部													1																1	1
甕	口縁部													1																1	1
擂鉢	口縁部		1		2								1	7	1						4									16	16
	胴部	1	1		9									22					1		17	3						1	1	56	
	底部		2								1			2							2	1								8	
水鉢	口縁部													1																1	1
	胴部													1																1	
鉢	口縁部				2				1					4							2	2			1					12	12
瓶	口縁部													1																1	1
	底部													1																1	
袋物	胴部													3							5									8	1
急須	把手	1																												1	1
蓋	口縁部																				1									1	1
火入	口縁部													1																1	1
香炉	口縁部													1							1									2	2
	底部													1							1									2	
焜炉	口縁部													3																3	3
器種不明	口縁部													1							1								1	3	3
	胴部																				2									2	
	底部													2							1									3	
小計		16	17	1	63	2	2	1	2	2	1	1	4	169	2	1	1	1	5	1	121	30	1	1	1	1	1	6	23	477	61
グリッド小計		33		75									178						159						3			29		477	



第 21 図　沖縄産無釉陶器



第 22 図　沖縄産無釉陶器（171〜184）・陶質土器（185・186）

縁で、色調が暗灰色で八重山のものに多い特徴である。

瓶（178・179）　178 は大形の徳利。179 は高台がつく球形の胴部をもち口縁が直立する瓶と思われる。

蓋（180）　石英・雲母等を多く含む軟質で焼成が甘いもので、口が狭い大型壺の蓋と思われる。

焜炉（181・182）　181 は直線的な胴部から内側に延びる口縁をもつもの。182 は内側に突起を有する七輪状のもの。

火入（183）　筒型の胴部を持つものである。

香炉（184）　ボタン状の脚部をもつ筒型香炉で、黒石川窯跡（石垣市教委 1993 d）、市教委調査（石垣市教委 2004）でも比較的多く出土しているものである。

器形不明（167）　碁笥底状の底部であり、植木鉢などであろうか。

陶質土器（第 22 図、図版 21、第 22・23 表　185 ～ 186）

方言では「アカムヌー」と呼ばれ、精良な胎土で、器壁が薄い素焼きの土器である。

185 は急須の蓋。186 は球形の胴部を持つ焜炉。

7．近代陶磁器（図版 22、第 24 表　196 ～ 216）

近代陶磁器は、大正～昭和初頭のものが多い。特徴的なものについて説明する。

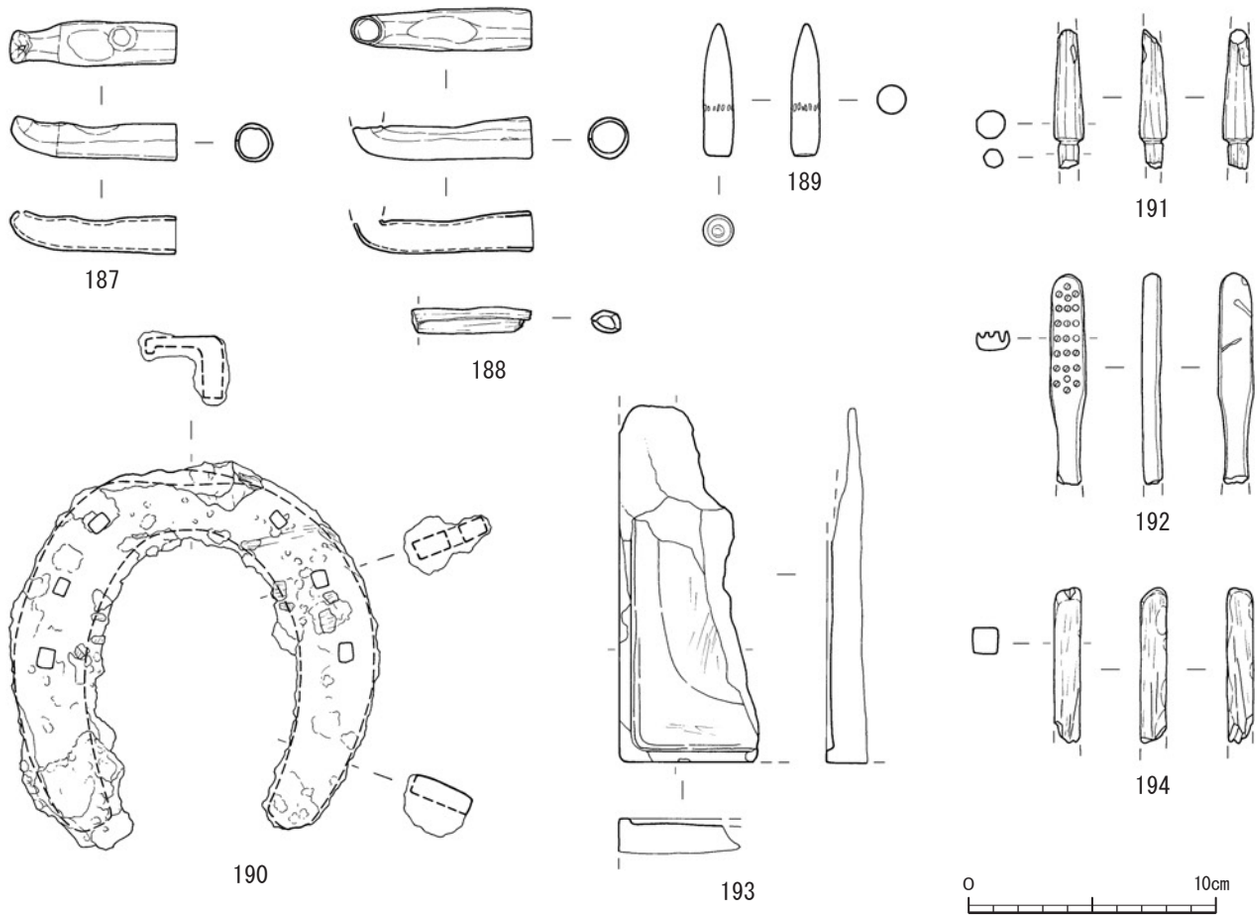
第 22 表　陶質土器出土状況

グリッド / 層序・遺構 / 器形	部位	2グリッド Ⅰ層下部	2グリッド P40	3グリッド Ⅰ層	3グリッド Ⅰ層下部	4グリッド Ⅰ層下部	総計	個体数
焜炉	口縁部				1		1	1
	胴部	1			3	1	5	
急須	胴部			1		1	2	1
鍋or急須	胴部	1	1		2	4	8	1

グリッド / 層序・遺構 / 器種	部位	2グリッド Ⅰ層下部	2グリッド P40	3グリッド Ⅰ層	3グリッド Ⅰ層下部	4グリッド Ⅰ層下部	総計	個体数
蓋	口縁部				1		1	1
器種不明	胴部					2	2	1
小計		2	1	1	7	8	19	5
グリッド小計		3		8		8	19	

第 23 表　沖縄産無釉陶器・陶質土器観察一覧

図No	器形	法量 口（底）	色調 外面	色調 断面	色調 内面	混入物	観察事項	出土地点
162	壺	7.0	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	ほとんど無し	小振りの玉縁口縁。丁寧なロクロ成形。	４Ｇ　土坑１
163	壺	14.4	褐灰	明赤褐	明赤褐	微量（石英）	玉縁口縁。短頸で肩が張る。胴部上半は線刻の不明文様。	２Ｇ　Ⅰ層
164	壺	14.8	鈍赤褐	赤褐	明赤褐	微量（石英）	口縁端部外面に凹線２条、上面に籾痕あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
165	壺	16.6	赤褐	灰赤	赤褐	少量（石英）	口縁端部に弱い凹線１条。胴部内面に漆喰？付着。	４Ｇ　土坑１
166	壺	22.2	暗赤灰	灰赤	赤灰	中量（石英・褐色粒）	口縁上面に凹線４条。外面に自然釉か、微細な白班あり。	４Ｇ　土坑１
167	底部	(11.0)	鈍赤褐	赤褐	赤褐	中量（石英）、気泡あり	碁笥底。外面のｹｽﾞﾘ目が粗い。	３Ｇ　Ⅰ層下部
168	壺	(18.0)	鈍橙	灰褐	橙	中量（明褐色粒）	外面底部から縦方向の静止での強めのﾍﾗﾅﾃﾞ（幅７㎜）	３Ｇ　Ⅰ層下部
169	壺	44.2	暗赤灰	赤褐	赤褐	中量（石英）、気泡あり	口縁上面に自然釉か、浅黄色班あり。胴部内面に縦ﾅﾃﾞ。	１Ｇ　Ⅰ層下部
170	甕	49.0	灰褐	明赤褐	灰赤	微量、気泡あり	口縁外面凹線２条、波状文（ｽﾄﾛｰｸ2.0cm）２条は単ﾍﾗか？	３Ｇ　Ⅰ層下部
171	擂鉢	－	明赤褐	赤褐	赤褐	中量（石英・褐色粒）	口縁上面に凹線１条。擂目（10本/2.0cm）は密。	２Ｇ　Ⅰ層下部
172	擂鉢	30.4	極暗赤褐	赤褐	鈍赤褐	少量（石英・黒色粒）	擂目（７本/1.7cm）は上部で1.5cmの間隔を空ける。	４Ｇ　Ⅰ層下部
173	擂鉢	30.4	灰赤	赤褐	明赤褐	中量（石英）、気泡あり	擂目（８本/2.0cm）は上部で0.8cmの間隔を空ける。	１Ｇ　Ⅰ層下部
174	擂鉢	(9.2)	明赤褐	明赤褐	明赤褐	中量（石英・褐色粒）	擂目（８本/1.7cm）は密、見込みは横。底部等に籾殻痕。	２Ｇ　Ｐ58
175	擂鉢	(8.6)	赤灰	暗赤褐	赤褐	多量（石英・褐・黒色粒）	擂目（10本/2.3cm）は密、見込みは横。底部等に籾殻痕。	３Ｇ　Ⅰ層下部
176	鉢	10.0	黒褐	赤褐	赤褐	微量（石英）	自然釉（緑灰）が外面上半。口縁端部は自然釉が剥離。	３Ｇ　Ｐ32＋不明Ⅰ層
177	鉢	－	暗灰	暗灰	暗灰	中量（石英）	口縁端部がやや厚くなっている。	４Ｇ　Ⅰ層下部
178	瓶	5.6	極暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	中量（石英）	全体的に丁寧なロクロ成形。頸部内面は絞り目。	３Ｇ　Ⅰ層下部
179	瓶	(6.4)	褐灰	赤褐	灰	中量（石英・褐色粒）	畳付に静止時での板？によるﾅﾃﾞが見られる。	３Ｇ　Ⅰ層下部
180	蓋	推9.0	黄橙	鈍黄橙	明黄褐	多量（石英・褐色粒・雲母）	焼成は甘く軟質で、器面の崩落多い。ロクロ成形。	４Ｇ　土坑１
181	焜炉	－	鈍赤褐	暗赤褐	灰赤	ほとんど無し	外面は微細な白班が見られる。自然釉か。	３Ｇ　Ⅰ層下部
182	焜炉	－	灰褐	鈍橙	橙	少量（石英）、気泡あり	内面突起と口縁から外面胴部にかけて、黒変しており被熱か。	３Ｇ　Ⅰ層下部
183	火入	12.4	灰褐	赤褐	明赤褐	微量（石英）	外面と、端部を除いた口縁内面に自然釉（緑灰）が掛かる。	３Ｇ　Ⅰ層下部
184	香炉	(9.6)	暗赤灰	赤褐	鈍赤褐	中量（石英）、気泡あり	外底の脚部は、径1.3、厚さ0.2cmの円形の粘土を貼付。	３Ｇ　Ⅰ層下部
185	陶質蓋	－	明黄褐	鈍黄橙	鈍黄橙	少量（雲母）	最大径9.4cm、器壁厚0.3cm。	３Ｇ　Ⅰ層下部
186	陶質焜炉	－	橙	鈍黄橙	明褐	中量（石英・赤色粒・雲母）	内面突起は黒変し、被熱。	３Ｇ　Ⅰ層下部



第 23 図　金属製品（187 ～ 190）・骨製品（191・192）・石製品（193・194）

200･201 は第二次世界大戦中の統制陶器。208 は軍杯で方形高台をもつことから、大正期のものとされる（西川 2008）。205 は不明な漢字、206 は簡体字の「銀山」など、これまで県内及び国内で見られない資料である。

8．金属製品（第 23 図、図版 21、第 25 表　187 ～ 190）

青銅製品（187 ～ 189）と鉄製品（190）がある。

187・188 は青銅製の煙管であり、187 は竹製の羅宇が吸口内に残っていた。

189 は青銅製の弾丸で 6.5mm 径の小銃弾である。

190 は鉄製の蹄鉄である。X線写真により、6 ヶ所の釘穴があることを確認した。

9．骨製品（第 23 図、図版 21、第 25 表　191・192・195　※ 195 は図版のみ）

191 は尖頭器、先端及び基部は欠損している。市教委調査でも同様なものが出土している（石垣市教委 2004）。

192・195 はハブラシである。

10．石製品（第 23 図、図版 21、第 25 表　193・194）

193 は粘板岩製硯である。194 は蝋石製の石筆である。

11．貝製品（図版 23、第 26 表　217 ～ 244）

全て有孔製品で 28 点出土している。素材で見るとタカラガイ 19 点（内訳はホシダカラ 1、ヤクシマダカラ 1、

第 24 表　近代陶磁器観察一覧

図No	器形	技法・名称等	法量			観察事項	出土地点
			口	器高	底		
196	碗	型紙摺り・砥部	10.7	5.9	4.1	口縁はゆるく外反する。見込みは平坦、擦痕あり。	１Ｇ　Ⅰ層下部 ４Ｇ　土坑１
197	碗	銅版転写	10.9	5.4	4.3	口縁は直口。見込みに擦痕あり。	不明
198	碗	クロム青磁･染付	11.6	5.8	4.1	口縁はゆるく外反する。見込みはやや凹む、擦痕あり。	４Ｇ　土坑２上層
199	碗	緑釉	12.0	5.0	5.5	口縁は直口、断面が逆台形を呈する。見込みは著しい擦痕あり。	４Ｇ　土坑１
200	碗	白磁(統制陶器)	11.0	5.5	4.7	外底「岐1075」のクロム印。口縁は直口、端部は丸い、緑色の圏線２条。見込みは擦痕あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部
201	小碗	白磁(統制陶器)	－	－	3.2	外底「岐524」のクロム印。見込みはやや擦痕あり。	不明　Ⅰ層
202	小碗	染付・印判	8.0	4.8	2.9	口縁は直口。明瞭な擦痕はなし。	不明　Ⅰ層
203	小碗	銅版転写	8.0	4.6	3.2	口縁は直口。端部に砂礫付着。見込みにやや擦痕あり。	３Ｇ　Ⅰ層
204	小碗	銅版転写	8.0	4.6	3.5	口縁は直口。口縁端部やや太く丸い。明瞭な擦痕はなし。	３Ｇ　Ⅰ層下部
205	小碗	染付	7.0	－	－	胴部に漢字（残存部分では２文字）が書かれるが、異体字のため解読困難。	４Ｇ　土坑１
206	小碗	染付	－	－	3.6	外底に簡体字により「銀山」銘。外面にも文様あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
207	杯	染付	5.0	2.7	1.7	口縁端部がゆるく外反。胴部に不明文様あり。	４Ｇ　土坑２上層
208	杯	色絵	6.0	2.6	1.8	方形高台。軍杯。金・赤色で見込みに連隊旗もしくは日章旗、「七四歩」銘を描く。	４Ｇ　Ⅰ層下部
209	皿	銅版転写	11.6	2.3	6.0	内湾皿。胎土は灰白色で、やや軟質。白濁釉。	４Ｇ　Ⅰ層
210	皿	銅版転写	12.8	2.4	6.6	内湾皿。胎土は灰白色で、やや軟質。白濁釉。	３Ｇ　Ⅰ層下部
211	皿	銅版転写	11.0	2.5	6.8	内湾皿。胎土は灰白色で、やや軟質。白濁釉。剥離部に、鉄？付着。	３Ｇ　Ⅰ層下部
212	皿	白磁	13.2	2.8	6.6	輪花皿。釉は青白色で透明感がある。	４Ｇ　Ⅰ層下部
213	蓋	緑釉、色絵	－	－	－	199と釉は類似。外面には赤・白・緑・金色で草花文を描く。	４Ｇ　土坑２上層
214	大瓶	型紙刷り・砥部	－	－	10.0	外底は無釉。	不明　Ⅰ層
215	急須	色絵	－	－	7.0	底部。外面に金・黒・赤で鶴を展開的に描く。216と同一固体か？	２Ｇ　Ｐ39
216	急須	色絵	－	－	－	注口部。外面に金・黒・赤で鶴を展開的に描く。215と同一固体か？	２Ｇ　Ⅰ層下部

第 25 表　金属製品・骨製品・石製品観察一覧

図No	種類	形態	法量(cm)	観察事項	出土地点
187	青銅製品	煙管	長4.3　小口径1.0　厚0.1	火皿は欠損。竹製羅宇（長径0.7、短径0.6、厚さ0.1、残存長3.2cm）が残存。	４Ｇ　Ⅰ層下部
188	青銅製品	煙管	長4.7　小口径1.1　厚0.1	火皿は欠損し、先端がつぶれている。脂反しの凹みが顕著。不明の刻印？あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
189	青銅製品	弾丸	長3.6　口径0.65	底部に径３㎜、深さ１㎜の凹み。ライフルマークは見られない。１条の刻み目。	２Ｇ　Ⅰ層下部
190	鉄製品	蹄鉄	長9.9　幅9.6　厚0.6	５×４㎜の釘穴６ヶ所。中央上部に幅3.5cm、高2.0cmの突出部あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
191	骨製品	尖頭器	残存長3.7　最大径0.8　茎部径0.4	先端及び茎部は欠損。繋ぎ目には浅い沈線あり。身に研磨の稜あり。	４Ｇ　Ⅰ層下部
192	骨製品	ハブラシ	残存長5.6　最大幅0.9　厚0.4	ブラシ部に径1.5㎜の小孔が３列（７・９・７）あり。研磨は丁寧。	２Ｇ　Ⅰ層下部
193	石製品	硯	残存長9.5　残存幅3.6　残存高1.5	粘板岩製。ｵｶ部分の左側が残存。ｵｶ部は摩滅あり。	３Ｇ　Ⅰ層下部
194	石製品	石筆	残存長4.1　幅0.6	蝋石製。短辺下部は欠損。上部は摩滅し、先端は割れている。	不明　Ⅰ層下部
195	骨製品	ハブラシ	残存長2.3　幅1.2　厚0.3	欠損。ブラシ部の小孔は４列。	３Ｇ　Ⅰ層下部

第 26 表　貝製品観察一覧

図No	素材	法　量					出土地点
		長	短	厚	孔（長・短）	重量(g)	
217	ﾎｼﾀﾞｶﾗ	8.5	5.7	3.1	6.4　5.3	83.9	３Ｇ　Ⅰ層下部
218	ﾔｸｼﾏﾀﾞｶﾗ	5.5	3.8	1.7	4.2　2.8	26.5	１Ｇ　Ⅰ層
219	ﾊﾅﾋﾞﾗﾀｶﾗ	2.2	1.7	0.6	1.5　1.2	2.1	４Ｇ　Ⅰ層下部
220	ﾊﾅﾋﾞﾗﾀｶﾗ	2.1	1.5	1.8	1.5　1.0	1.6	３Ｇ　Ⅰ層下部
221	ﾊﾅﾋﾞﾗﾀｶﾗ	2.2	1.6	0.7	1.5　1.1	2.2	４Ｇ　Ⅰ層下部
222	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	2.9	2.2	0.9	2.0 1.5	4.7	４Ｇ　Ⅰ層下部
223	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	2.8	1.8+	0.7	孔部欠損	2.6	３Ｇ　Ⅰ層下部
224	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.7	2.8	1.0	2.4　1.6	9.1	２Ｇ　Ⅰ層下部
225	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.2	2.8	1.0	2.0　1.3	9.2	２Ｇ　土坑６
226	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.3	2.7	1.1	1.9　1.4	8.6	３Ｇ　Ⅰ層下部
227	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.3	2.5	1.1	2.0 1.6	7.0	１Ｇ　土坑８
228	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.6	2.7	0.9	2.3　1.7	8.2	１Ｇ　Ⅰ層
229	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.2	2.5	0.8	2.1　1.6	7.2	４Ｇ　Ｐ７
230	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.5	2.6	0.9	2.3　1.7	7.8	３Ｇ　Ⅰ層下部

図No	素材	法　量					出土地点
		長	短	厚	孔（長・短）	重量 (g)	
231	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.3	2.3	1.0	2.2　1.5	5.6	２Ｇ　土坑３
232	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.2	2.5	1.3	1.9　1.4	7.0	４Ｇ　Ⅰ層下部
233	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.0	2.2	0.8	2.1　1.5	5.3	４Ｇ　土坑１
234	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.5	2.6	1.1	2.2　1.5	9.0	４Ｇ　土坑１
235	ﾊﾅﾏﾙﾕｷ	3.1	2.3	0.9	2.0　1.4	4.2	２Ｇ　Ⅰ層下部
236	ﾋﾒｼﾞｬｺｶﾞｲ	13.8	10.6	4.1	3.4　1.7	297.9	４Ｇ　土坑１
237	ﾋﾒｼﾞｬｺｶﾞｲ	10.9	7.3	3.2	1.3　1.6	133.2	４Ｇ　Ⅰ層下部
238	ﾋﾒｼﾞｬｺｶﾞｲ	7.8	5.7	2.3	0.6　0.9	31.6	４Ｇ　Ⅰ層下部
239	ﾋﾒｼﾞｬｺｶﾞｲ	10.1	6.7	2.7	0.8　0.9	78.2	４Ｇ　土坑１
240	ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ	6.7	5.0	2.5	0.6　0.7	41.6	４Ｇ　土坑１
241	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	7.5	6.2	4.9	0.4　0.5	81.2	１Ｇ　土坑８
242	ﾔｺｳｶﾞｲ	14.9	13.0	8.0	1.0　1.0	51.0	１Ｇ　Ⅰ層下部
243	ﾇﾉﾒｶﾜﾆﾅ	4.3	1.5	1.3	３ヶ所	4.5	４Ｇ　Ｐ６
244	ﾁｮｳｾﾝﾌﾃﾞ	5.3	1.7	1.6	0.3　0.3	11.6	４Ｇ　土坑２下層

第 27 表　円盤状製品観察一覧

図No	素材	法量				出土地点
		長	短	厚	重量	
245	沖縄産無釉陶器	3.8	3.5	0.9	21.4	２Ｇ　Ⅰ層下部
246	沖縄産無釉陶器	5.6	5.4	0.8	39.1	３Ｇ　Ⅰ層下部
247	沖縄産無釉陶器	6.5	6.2	1.1	68.5	３Ｇ　Ⅰ層下部

図No	素材	法量				出土地点
		長	短	厚	重量	
248	平瓦	3.7	3.5	1.7	27.6	４Ｇ　Ⅰ層下部
249	平瓦	6.3	6.0	1.6	84.7	３Ｇ　Ｐ23
250	近代陶磁器碗（型紙）	5.3	4.60	1.8	44.2	２Ｇ　Ⅰ層

ハナビラタカラ３、ハナマルユキ 14)、ヒメジャコガイ４点、リュウキュウサルボウ１点、チョウセンサザエ１点、ヤコウガイ１点、ヌノメカワニナ１点、チョウセンフデ１点である。

243 は３ヶ所穿孔しており、244 は１ヵ所の孔に溝状の摩擦痕が横断して見られる。

12. 円盤状製品（図版 23、第 27 表　245 ～ 250）

６点出土している。素材は、沖縄産無釉陶器３点、瓦２点、近代陶磁器１点である。

13. 貝類遺体（図版２～４、第 28 ～ 32 表）

本遺跡では、土器の次に貝類遺体が多く出土した。この貝類遺体は、調査現場において通常の遺物と共に取り上げたピックアップ資料である。貝種の同定は当センターの標本、出土資料により判断した。集計表（第 31・32 表）については、グリッド・層序ごとに分けて、遺構は明らかに近代の遺構である土坑１と土坑２、まとまって出土した４グリッドⅠ層下部貝集中地点以外は、概ね中森期に当たるⅡ層の遺構として４つに分けている。なお、遺構で出土した貝類の詳細は、第１・２表を参照していただきたい。最低個体数の算出は、巻貝は完形と殻頂の合計、二枚貝は左（L）右（R）ごとに完形と殻頂を合計し、多いものとした。破片だけ出土している場合は、１個体とした。

第 29 表には、出土最低個体数が多い 10 種類とそれ以外に分けて出土傾向を示した。

全体の傾向を見ると、アラスジケマンガイが最も多く、オキナワウスカワマイマイ、イソハマグリ、シレナシジミが続く。また、巻貝ではチョウセンサザエが目立つ。オキナワウスカワマイマイについては食用にしていたかどうかは様々な見解があるのでここではその是非については保留したい。

グリッド間においては、貝種の差は明確ではないが、出土量については３・４グリッドで 70％を占めている。層序においてはⅠ層下部が 47％と最も多く、貝種の差はアラスジケマンガイガ最も多いという傾向は共通している。しかしながら、遺構ではホソスジナミガイとナミノコマスオが目立つこと、Ⅱ層ではチョウセンサザエなどの巻貝がほとんど見られないという傾向がある。また、より顕著な貝種の違いが見られるのは、４グリッドⅠ層下部貝集中出土地点で、やはりアラスジケマンガイは一番多いが、ナミノコマスオ・マルアマオブネも比較的見られる点で、他の傾向と異なっている。これらの違いの原因については、他遺跡の調査事例が更に必要だが、採取もしくは消費される貝種に本遺跡においては時期的な違いがあった可能性が指摘できる。４グリッドⅠ層下部貝集中地点は、ナミノコマスオが多いという点でⅡ層の遺構との共通点が見られることから、時期的に近接する可能性も考えられよう。

このような傾向を生息地で見ると、最も多いアラスジケマンガイが生息する干潟・マングローブ域が４割を占め、外洋・サンゴ礁域のものは３割である（第 30 表）。この傾向について、次に挙げる石垣島南東部に位置する中森期の３遺跡との比較により少し考えてみたい。

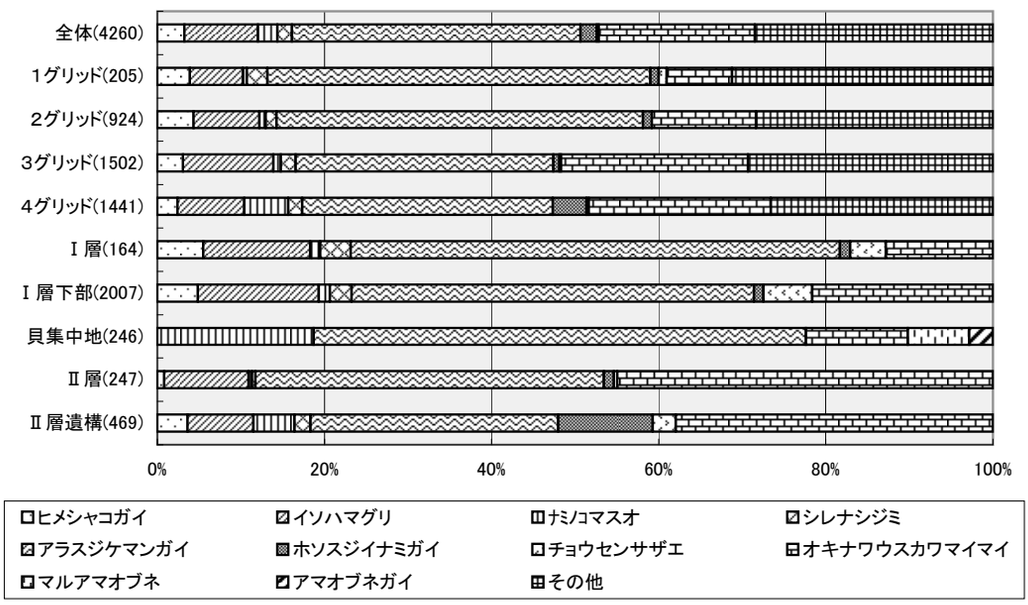
本遺跡とは５km ほど離れた南東部の海岸沿いに位置するカンドウ原遺跡では、マガキガイ・ヒメジャコガイが圧倒的で、サラサバティ・コオニコブシ・アラスジケマンガイ・チョウセンサザエと続く（県教委 1984）。ここから約２km 内陸部に位置するアラスク村跡でもマガキガイが圧倒的に多い（県教委 1985）。また、この 500 m南のウイヌスズ遺跡では、チョウセンサザエ・マガキガイ・オニツノガイ・コオニコブシガイとなる（県教委 1985）。

以上より、これらの３遺跡はマガキガイが多いということが言え、これはサンゴ礁域の内側の礁湖（イノー）に生息するものである。他の貝種もサンゴ礁域で採取できるものが多い。本遺跡でもチョウセンサザエやイソハマグリなどサンゴ礁域のものも見られるが、マガキガイは多くはない。このことから、石垣島の中森期の遺跡においては、南東部がサンゴ礁、本遺跡が位置する南西部では干潟・マングローブ域というように、採取できる貝にやや違いがある可能性が現時点では想定できる。

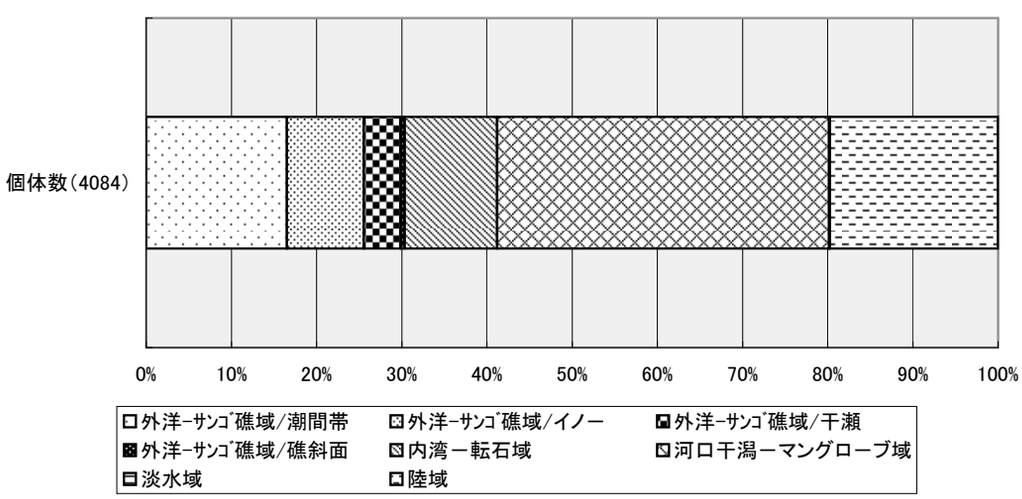
第 28 表　貝生息地の分類　（黒住 1987）

外　洋　～　内　洋		水　　深		底　　質	
Ⅰ	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a	岩板
		1	潮間帯中・下部	b	転石
Ⅱ	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬（Ⅰにのみ適用）	d	マングローブ植物上
Ⅲ	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
Ⅳ	淡水域	5	止水		
		6	流水		
Ⅴ	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
Ⅵ	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

第 29 表　貝類遺体の種組成



第 30 表　貝類遺体の生息地類型組成



第 31 表　貝類遺体出土状況（巻貝）

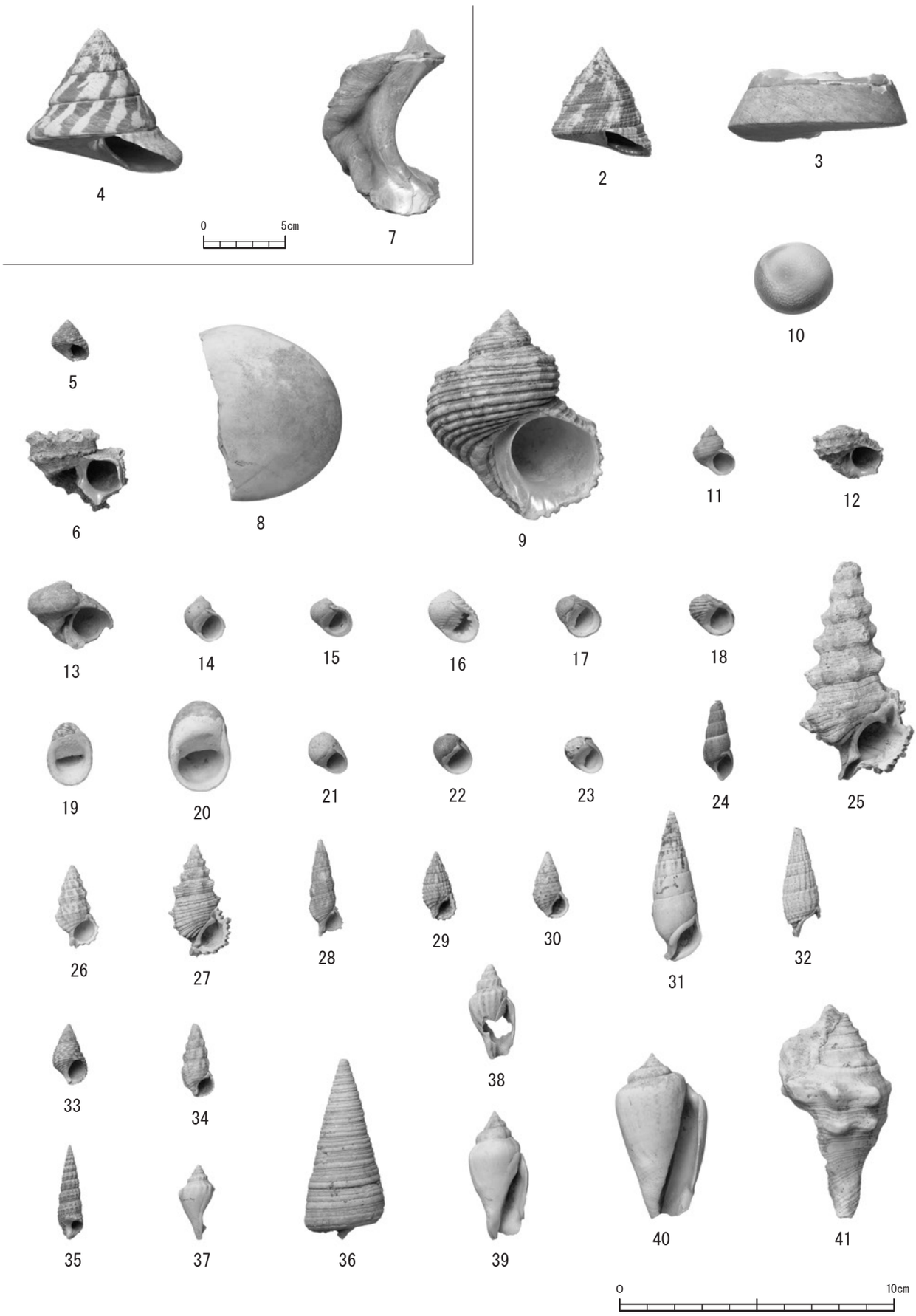
種類 ＼ 出土地				１グリッド						２グリッド									３グリッド								
				Ⅰ層			Ⅰ層下部			Ⅱ層遺構			Ⅰ層下部			Ⅱ層			Ⅱ層遺構			Ⅰ層			Ⅰ層下部			Ⅱ層		
番号	科名	種名	生息地	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片	個体	完形	殻頂	破片
1	ミミガイ科	ミミガイ科不明																													
2	ニシキウズガイ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a	1			1	1			1					5	3	2	4	1	1			1			2					
3		ギンタカハマ	Ⅰ-4-a																									4	4		7			
4		サラサバテイ	Ⅰ-4-a	2		2	9	3	3		3	1			3	4	2	2	10	1			1	1		1	6	1			1	10	8	2	58	1	1		1
5		オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b													1	1																					
6	サザエ科	リュウキュウカタベ																						1		1												
7		ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	1			2									1			4												9							
8		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a																									1		1	5							
9		チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a					1	1			1	1	0	0			1	3				1					2	1	1	1		1	1	7	1			1
10		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	7	7				1							23	23			1	1			10	10				1			71	71		1				
11		コシダカサザエ	Ⅰ-2-a																																			
12		カンギク	Ⅱ-1-b													2	1	1		1		1										3	2	1	2				
13		オオベソスガイ	Ⅰ-1-a													1	1																					
14	アマオブネガイ科	ヒメイシダタミアマオブネ																						1	1							2	2					
15		コシダカアマガイ	Ⅱ-1-b																													1	1					
16		キバアマガイ	Ⅰ-0-a																																			
17		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b													1	1		1													4	4			1	1		0
18		オオマルアマオブネ	Ⅰ-1-a																													1	1					
19		アマオブネガイ	Ⅰ-1-b																					1		1						11	11		2	1		1	1
20		ニシキアマオブネ	Ⅰ-0-c													3	3											1	1							1	1		1
21		ドングリカノコ																																				
22		イガカノコ	Ⅳ-5																													1	1					
23		カノコガイ	Ⅲ-1-e																																			
24	トウガタカワニナ科	ヌノメカワニナ	Ⅳ-5																													1			1			
25	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c													1	1		1					1			1					3		3	4	1			2
26		コオニツノガイ	Ⅰ-4-a																																			
27		メオニノツノガイ	Ⅰ-4-a																													2		2				
28		キイロカニモリ																																				
29		カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b																													2		2				
30		イワ（ウミニナ）カニモリ	Ⅱ-1-b	1	1																											2	2					
31		タケノコカニモリ	Ⅱ-1-c													4	2	2	1	1	1			2	1	1						4		4				
32		ヨコワカニモリ	Ⅰ-2-c													1		1														1			1	1		1
33	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ-0-a													1	1							3	3							5	4	1		1	1	
34	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c													2	1	1		2	2			1	1							4		4		1		1
35		イボウミニナ	Ⅲ-1-c																													3		3				
36	フトヘナタリ科	センニンガイ	Ⅲ-1-c	2		2		1			1					8		8	1	1		1		2		2						14		14	19			
37	ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c																													1		1				
38		フトスジムカシタモト	Ⅱ-2-c																													1		1				
39		ネジマガキ	Ⅰ-2-c	1	1											7	5	2						3	2	1						13	7	6		2		2
40		マガキガイ	Ⅰ-2-c	1		1			1			1		1		4	3	1														17	5	12	2	1	1	
41		クモガイ	Ⅰ-2-c													1		1	1													1			9	0		
42	タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a													1	1															1			5	1		1
43		ホシダカラ	Ⅰ-2-c																													1			1			
44		ヒメホシダカラ	Ⅰ-2-a													1	1							1			1											
45		ホシキヌタ	Ⅰ-2-a																													1			1			
46		ナツメモドキ	Ⅰ-2-a													1	1															3	3					
47		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	1	1											9	9															19	14	5		1		1
48		キイロダカラ	Ⅰ-1-a													1		1						2	2		1					2	2			1	1	
49		ハナマルユキ	Ⅰ-3-a													1		1	2													4	1	3				
50		タカラガイ科不明																																				
51	タマガイ科	トミガイ	Ⅰ-2-c																																			
52		リスガイ	Ⅰ-2-c																													1	1					
53		ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c																																			
54		スミレダマ？																																				
55	フジツガイ科	シオボラ	Ⅰ-2-a																																			
56		ホラガイ	Ⅰ-4-a									1			1									1			1					1			2			
57	アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a													1	1																			1	1	
58		ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b																					1		1												
59		シロレイシダマシ														1	1																					
60		ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a																																			
61	オニコブシガイ科	オニコブシガイ	Ⅰ-3-a													1			1					1		1						1			1			
62		コオニコブシ	Ⅰ-1-c					1		1						2	2			2	1	1										2	2			1		1
63	フトコロガイ科	フトコロガイ	Ⅱ-2-d																													1	1					
64	ムシロガイ科	オリイレヨフバイ																																				
65		イボヨフバイ	Ⅱ-1-c													1	1							1	1							4	3	1		1	1	
66		アワムシロ	Ⅱ-2-c																													2	2			1	1	
67		ヒメオリイレムシロ	Ⅱ-2-c													1	1																			1	1	
68		アツムシロ	Ⅰ-2-c																																			
69		リュウキュウムシロ	Ⅰ-2-c													2	1	1														1	1			1	1	
70	エゾバイ科	ホラダマシ	Ⅰ-2-b	1	1											2		2																				
71	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a													2	1	1	3					2	2		1	1				3	1	2	4			
72		ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a																																	1		1
73		ハシグロツノマタモドキ																																				
74		リュウキュウツノマタガイ	Ⅰ-3-a																													1			1			
75		ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a																																			
76		チトセボラ	Ⅰ-2-c													1		1																				
77	フデガイ科	チョウセンフデ	Ⅰ-2-c									1	1																									
78	イモガイ科	ナンヨウクロミナシ														3	2	1						2	1	1						3	3		1	2	2	
79		クロフモドキ	Ⅰ-2-c																									1			1	1			4			
80		マダライモ	Ⅰ-1-a	1	1											1	1											1	1			4	4					
81		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a																													1	1					
82		ジュズカケサヤガタイモ	Ⅰ-1-a													1	1																					
83		イタチイモ	Ⅰ-2-c	1	1																																	
84		ヤナギシボリイモ	Ⅰ-2-a													1			2	1			1	1			1					2	2		2	1			1
85		ヤセイモ	Ⅰ-2-a																									1	1									
86		キヌカツギイモ	Ⅰ-2-a																	1	1																	
87		イボカバイモ	Ⅰ-2-c	1		1										1			1																			
88		イモガイ科不明		1			2																									1			1			
89	タケノコガイ科	キバタケ																														1			1			
90	トウガタガイ科	オオクチキレ	Ⅱ-2-c																																			
91	カラマツガイ科	コウダカカラマツガイ																																		1	1	
92	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8																													1	1					
93	ナンバンマイマイ科	イッシキマイマイ	Ⅴ-8																																			
94	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9	16	15	1	5									66	59	7	19	6	6	0	1	43	41	2	13	2	2			191	175	16	55	105	102	3	14
95	コウイカ科	コブシメ																																				
96	巻貝科	巻貝不明										1			6	1			12					1			3					1			11	1			1
合計				38				7				6				172				18				83				10				438				132			

番号	種名	出土地	３グリッド			４グリッド															グリッド不明								個体数
		種類	Ⅱ層遺構			Ⅰ層			Ⅰ層下部			貝集中地			土坑１			土坑２（下層）			Ⅱ層遺構			Ⅰ層			Ⅰ層下部			層所不明			
			個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	個体	完形	頂	破片	
1	ミミガイ科不明		1			1																													1
2	ニシキウズ		1			1					5	3	2	4					2	1	1			1			1								22
3	ギンタカハマ										1			1																					2
4	サラサバテイ		1		1	9					1			1					6	1	5	4		1			3	2		2		1		8	1	1	37
5	オキナワイシダタミ																							2	2											3
6	リュウキュウカタベ										1			1																						2
7	ヤコウガイ													1	1			1										1		1	1			3			5
8	ヤコウガイの蓋										1			3																			1			2
9	チョウセンサザエ			1		1	1			1		4	3	10							2	1		3	1	2		1		1			1			10
10	チョウセンサザエの蓋		3	3							23	23		1	4	4			1	1											8	8				150
11	コシダカサザエ										1		1		4	4			1	1				6	5	1										12
12	カンギク										2	2			6	6								1	1						1		1			16
13	オオベソスガイ										1		1																							2
14	ヒメイシダタミアマオブネ										1	1												1	1											5
15	コシダカアマガイ		1	1							3	3			3	3								3	2	1										11
16	キバアマガイ										1	1																								1
17	マルアマオブネ		3	2	1	1					5	5			18	18								1	1											33
18	オオマルアマオブネ														2	2								1	1		1									4
19	アマオブネガイ										2	2			7	7								2	1	1	1									24
20	ニシキアマオブネ		1	1							2	1	1		2	2																				10
21	ドングリカノコ		1	1											2	2																				3
22	イガカノコ																																			1
23	カノコガイ										1	1																								1
24	ヌノメカワニナ																																			1
25	オニノツノガイ		1			1													1			1						1		1	1		1			10
26	コオニツノガイ		1		1																			1	1											2
27	メオニノツノガイ		1	1							2	1	1																							5
28	キイロカニモリ		1	1																																1
29	カヤノミカニモリ										5	2	3																			1				7
30	イワ（ウミニナ）カニモリ										1			1	5	5																				9
31	タケノコカニモリ										4	3	1	3																						15
32	ヨコワカニモリ																																			3
33	ゴマフニナ		2	2											1	1								2	1	1										15
34	リュウキュウウミニナ		2	2							3	2	1											2	1	1										17
35	イボウミニナ																																			3
36	センニンガイ		1			1					7		7	7					4		4										3		3	1			43
37	オハグロガイ																																			1
38	フトスジムカシタモト																																			1
39	ネジマガキ		1		1						13	9	4						2	2				1		1					1		1			44
40	マガキガイ		1	1							9	6	3						5	5				1		1		1	1		1		1	1	1	43
41	クモガイ		1		1	1					2		2	2					1		1										1		1			7
42	ヤクシマダカラ										1			2					1	1				1	1						1		2			7
43	ホシダカラ																																			1
44	ヒメホシダカラ																																			2
45	ホシキヌタ										1			1										1			1				1		1			4
46	ナツメモドキ		1	1							2	1	1						1	1																8
47	ハナビラダカラ		2	2							3	3			1	1								2	2		1				1	1				39
48	キイロダカラ																																			6
49	ハナマルユキ										1		1																		1	1				7
50	タカラガイ科不明																							1			1									1
51	トミガイ														1	1								1	1											2
52	リスガイ																							1	1											2
53	ホウシュノタマ		1		1																															1
54	スミレダマ？		1		1						2	2																								3
55	シオボラ		1			1									1			1						1	1											3
56	ホラガイ																																			3
57	ガンゼキボラ																							1	1											3
58	ウネレイシダマシ																							1			1									2
59	シロレイシダマシ																							1	1											2
60	ツノテツレイシ										1	1																								1
61	オニコブシガイ																											1		1						4
62	コオニコブシ										4	4		1										1		1					2	2		1	1	16
63	フトコロガイ																																			1
64	オリイレヨフバイ										1	1																								1
65	イボヨフバイ										4	3	1		4	4																				15
66	アワムシロ										1	1																								4
67	ヒメオリイレムシロ										4	4	0																							6
68	アツムシロ														1	1																				1
69	リュウキュウムシロ										1	1																								5
70	ホラダマシ														2	2								1	1											6
71	イトマキボラ										2		2	3					1	1		1									1		1	1	1		2	13
72	ナガイトマキボラ																																			1
73	ハシグロツノマタモドキ																		1	1																1
74	リュウキュウツノマタガイ																		1	1																2
75	ツノマタモドキ		1	1											1	1			1		1															3
76	チトセボラ																																			1
77	チョウセンフデ																																			1
78	ナンヨウクロミナシ										1	1							1			1														12
79	クロフモドキ										1			5																	1		2			4
80	マダライモ										4	4		1	1	1			1	1				1	1						2	2				16
81	サヤガタイモ										1	1																								2
82	ジュズカケサヤガタイモ																																			1
83	イタチイモ																																			1
84	ヤナギシボリイモ		1		1	1					1	1																1		1						9
85	ヤセイモ																		1			1														2
86	キヌカツギイモ										2	2		1																						3
87	イボカバイモ																																			2
88	イモガイ科不明																							1			1									3
89	キバタケ																																			1
90	オオクチキレ																														1	1				1
91	コウダカカラマツガイ																																			1
92	オキナワヤマタニシ		1		1						2	2												2	2											6
93	イッシキマイマイ		1		1																			1			3									2
94	オキナワウスカワマイマイ		38	28	10	24	3	3			177	158	19	70	30	28	2	8	6	5	1	1	1	1	97	89	8	27	2	2			13	13	1			796
95	コブシメ		1			1					1			1																							2
96	巻貝不明																														1		1				6
	合計		73				4				315				93				41				1		144				10				43			4		1632

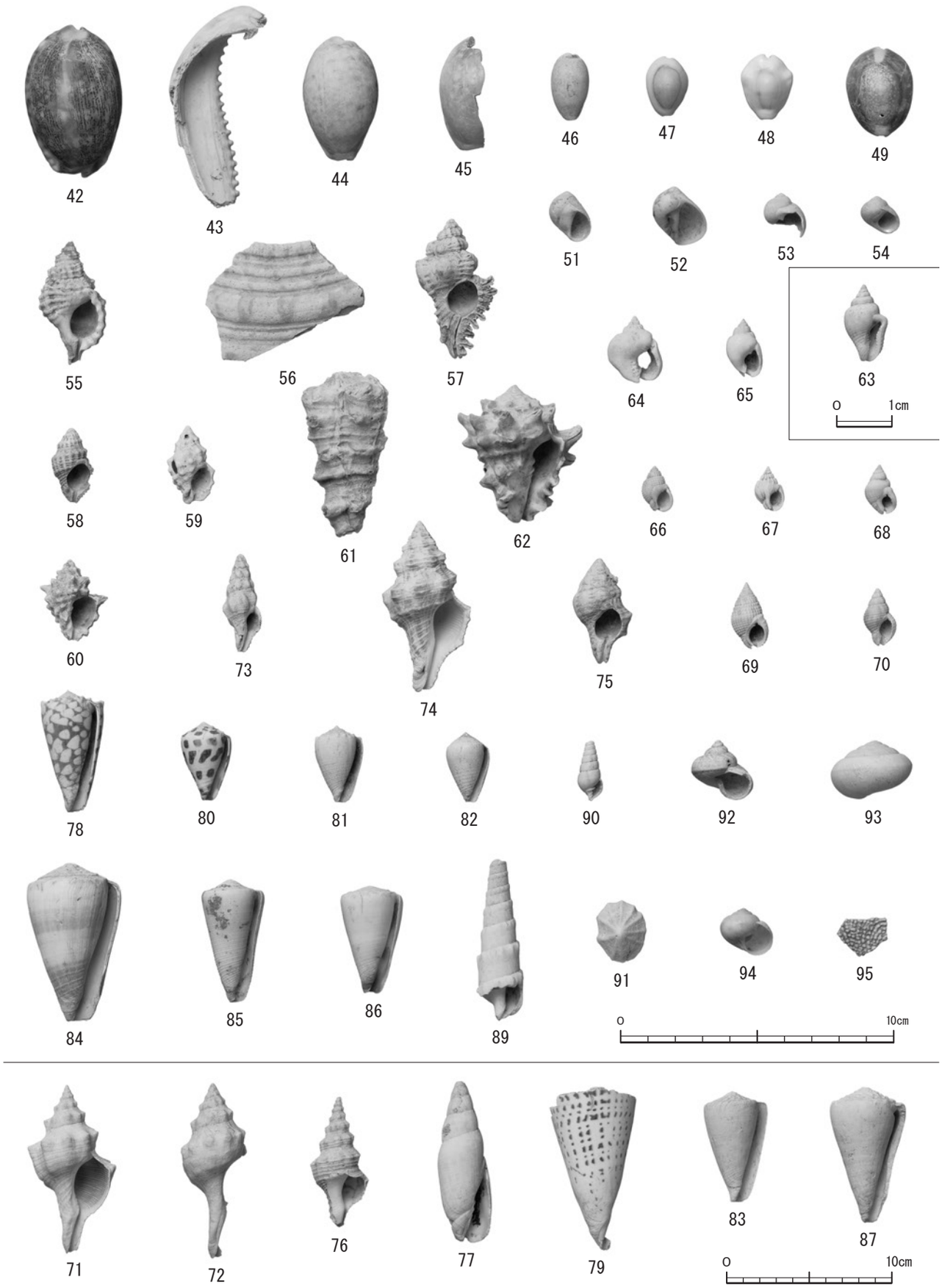
第 32 表　貝類遺体出土状況（二枚貝）

| 番号 | 科名 | 貝種名 | 生息地 | 1グリッド Ⅰ層 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 1グリッド Ⅰ層下部 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 1グリッド Ⅱ層遺構 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 2グリッド Ⅰ層 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 2グリッド Ⅰ層下部 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 2グリッド Ⅱ層 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 2グリッド Ⅱ層遺構 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 3グリッド Ⅰ層 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 3グリッド Ⅰ層下部 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 | 3グリッド Ⅱ層 個体 | 完形（L） | 完形（R） | 殻頂（L） | 殻頂（R） | 破片 |
|---|---|---

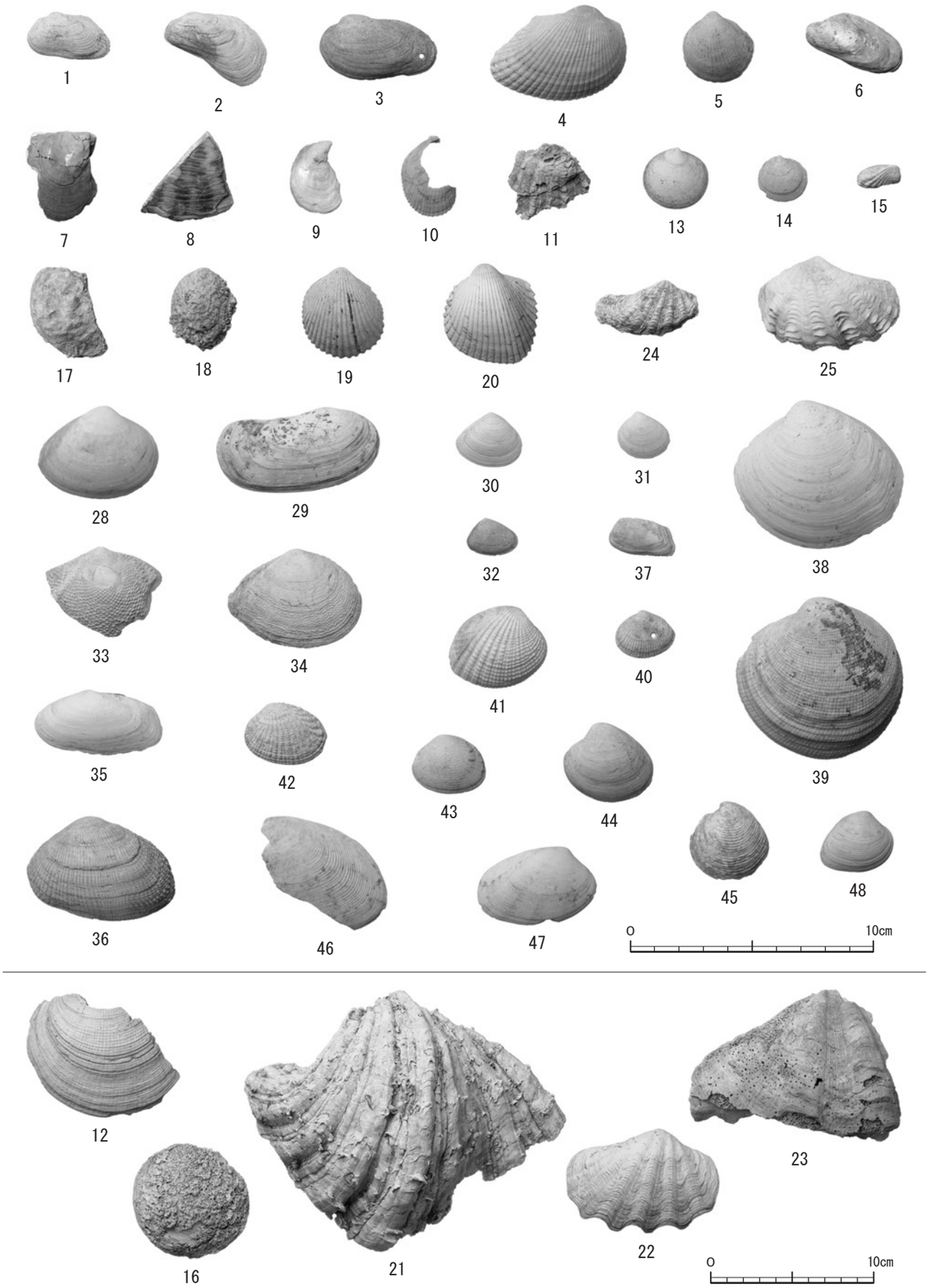
番号	出土地 / 種類	3グリッド		4グリッド																グリッド不明						個体数
		Ⅱ層遺構		Ⅰ層		Ⅰ層下部		貝集中地		土坑1		土坑２（上層）		土坑２（下層）		Ⅱ層遺構		層序不明		Ⅰ層		Ⅰ層下部		
	貝種名	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	個体	完形（L R） 完形（L R） 数頂（L R） 数頂（L R） 破片	
1	エガイ					3	3 1	2	2 1	1	1					1	1							13
2	カリガネエガイ	1	1			1	1															2	2 1	13
3	ベニエガイ																							3
4	リュウキュウサルボウ									1	1			1	1	1	1 1					1	1	7
5	ソメワケグリ	1	1			3	3 3																	9
6	リュウキュウヒバリガイ	1	4			1	1																	14
7	アコヤガイ	1	1			1	1	1	1							1	1 1			1	1			15
8	クロチョウガイ					1	1 1																	4
9	カイシアオリの一種																							2
10	ユキミノガイ																							0
11	メンガイの一種															1	1							2
12	ツキガイ																							1
13	ウラキツキガイ	1	1			7	4 7											1	1			2	2 2	47
14	ヒメツキガイ															2	1 1 1 1 1							5
15	トマヤガイ															1	1							2
16	シロザル																							2
17	カネツケキクザル																					1	1	9
18	キクザルガイ科の一種					1	1									1	1					1	1	3
19	リュウキュウザル					2	1 1 1																	7
20	カワラガイ	1	1 1			9	7 8 1 1			2	2											3	2 1	58
21	シャゴウガイ	1	1			1	3	1	1	1	1					3	1 2 1							11
22	ヒメシャコガイ	4	4 1 15	3	3 1	19	8 10 11 7 88	2	2 2 2	10	4 8 2 18							1	1	2	2 3	7	5 2 2 1	138
23	ヒレシャコガイ	1	1			1	3			1	2					2	1 1 12			1	1	1	3	8
24	ナガシャコガイ					1	5																	3
25	オオシラナミ									1	1													11
26	シラナミ類																							1
27	シャコガイ科不明																			1	2			2
28	リュウキュウバカガイ	1	1			1	1									1	1							9
29	オオトリガイ	1	1			1	1 2																	5
30	イソハマグリ	16	15 9 1 1	4	3 4	99	99 90 2			6	6 2 1					1	1	5	5	2	2	10	8 10	376
31	ﾅﾐｺﾏｽｵ	1	1 1			11	8 11	46	46 37							19	19 16 1 1					2	2	99
32	リュウキュウナミノコ	1	1			1	1 1	1	1	1	1					3	2 3							13
33	サメザラ															1	1							3
34	リュウキュウシラトリ	1	1			2	1 1 1 1															3	2 1 1 2	16
35	マスオガイ					1	1 1									1	2							4
36	リュウキュウマスオ					7	1 4 2 3 1	1	1 1	1	1											1	2	23
37	フナガタガイ															1	1 1							2
38	シレナシジミ	1	1 1 10	1	2	17	8 5 9 6 43	2	1 2 1	4	2 1 2 1 10									1	3	4	3 3 1 13	73
39	ヌノメガイ					2	2 3									1	5					1	1	8
40	カノコアサリ															1	1					1	1	3
41	アラスジケマンガイ	27	7 23 3 4 11	8	5 5 3 1	238	218 216 20 21 16	145	143 119 2	35	25 21 10 5 1	1	1			49	38 35 11 4 17	5	1 5 1	7	5 7	70	61 64 5 6 3	1471
42	ホソスジイナミガイ					7	2 6 1	2	2 2							3	1 3 1					3	3	84
43	イナミガイ					1	1									3	1 3 1							4
44	ユウカゲハマグリ																							3
45	オイノカガミ					1	1									1	1					1	1	7
46	リュウキュウアサリ																							1
47	ヒメリュウキュウアサリ					1	1																	1
48	スダレハマグリ	1	1 2			5	3 5 1 3	3	1 3							1	1					1	1 1	27
49	二枚貝不明	1	1													1	4					1	1	6
	合計	63		16		446		206		64		1		1		97		12		15		116		2628



図版２　巻貝（１）　※番号は第 31 表と一致



図版３　巻貝（２）　※番号は第 31 表と一致



図版４　二枚貝　※番号は第 32 表と一致

14．脊椎動物遺体（図版５・６、第 33 ～ 46 表）

脊椎動物遺体も貝類遺体と同様にピックアップ資料である。種の同定は当センターの現生標本と県内出土資料の比較により、県埋文（2005）などを参考にして、明確に認識できるものについてのみ行った。なお同定には、魚骨は菅原広史、哺乳類は並木基真の協力を受けた。

出土した脊椎動物遺体の種類は、第 33 表に示したとおり、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類である。その詳細については、各表に示したが、数量については原則的に種や科が同定できたものに限っている。

魚類　同定対象としたものは、主に前上顎骨、歯骨、主上顎骨、各骨、方骨など顎骨周辺部位と、一部は咽頭骨、棘、椎骨も対象とした。

種別としては、カツオが多く同定できたことが注目されるが、大半は近代の遺構である土坑１・２から多く出土しているので、比較的新しい消費のものと思われる。コブダイ型やフエフキダイ科の計測できる資料によると、沖縄本島の資料であるが今帰仁城跡や首里城跡などと比べると、全体的に大型の傾向があるようである。また、同定出来なかったが、椎径が 3.8cm と大型の椎骨（10）が出土していることも注目される。

爬虫類　ウミガメが出土している。

鳥類　ニワトリと同定できるものと種が不明なものがあった。脛骨・肋骨が多いようである。

哺乳類　ネズミ・ネコ・イヌ・ウマ・イノシシ／ブタ・ヤギ・ウシが確認できた。イノシシとブタの識別については、今回は保留した。出土量から多いものはウシとイノシシである。

イノシシは、下顎骨があまり摩滅していないものが多く、成獣の中でも若齢の個体が多いと想定される。

ウシは、中手骨（52）の骨長（GL）185mm を測ることから、推定高 110 ～ 115cm と比較的小型の個体が想定される（西中川編 1991 に基づく）。

人為的な損傷　哺乳類を中心に、イヌ・ウマ・イノシシ／ブタ・ウシで確認された。量的にウシが最も多い。また、魚類の椎骨についても確認している。損傷のタイプについては、久貝（2006）による「カット・マーク」（刃を左右に往復させる傷）が圧倒的に多い。ただ、46 は「チョップ・マーク」（比較的厚い刃物による打撃痕）と思われた。イヌ寛骨（11）は深さ２mm の鋭利な傷が平行して２条見られる。ウマ寛骨（17）やウシ肋骨（47）は割口が非常に平滑なため、非常に鋭利な刃物で一度に切断したものであろうか。ウシ仙骨（43）は横位の切傷から下位が折れたような状態であり、刃物で叩き割ったものと思われる。このように、ウシにおいては豪快な解体なされたことが想定される。また、ウシ脛骨（53）は黒変しており、被熱したものと思われる。魚類は傷が残りにくいが、椎骨（８）では横位方向の傷が確認された。

出土傾向　Ⅱ層及びその遺構からは全般的に脊椎動物遺体の出土は少ないが、ウシ・イノシシ／ブタ・イヌ・トリ、魚類ではハマフエキ・クロダイが出土している。このような傾向は、石垣島・西表島などの中森期の遺跡に

第 33 表　脊椎動物遺体一覧

軟骨魚綱	CHONDICHTHYES
メジロザメ科	Carcharhinidae

硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ハタ科	Serranidae
アジ科	Caragidae
フエダイ科	Lutjanidae
クロダイ属	*Acanrrhpagrus* sp.
フエフキダイ属（ハマフエフキ）	*Lethrinus* cf.L..nebulosusu
フエフキダイ属（キツネフエフキ）	*Lethrinus* cf.L..miniatus
ベラ科（コブダイ型）	Labridae cf. *Semicossyphus reticulatus*
イロブダイ	*Balbometopon bicolor*
ナンヨウブダイ	*Scarus gibus*
ナガブダイ	*Scarus rubroviolaceus*
スマ	*Euthynus affinis*
カツオ	*Katsuwonus pelamis*
ハリセンボン科	Didontidae

爬虫綱	REPTILIA
ウミガメ科	Cheloniidae

鳥綱	AVES
ニワトリ	*Galus galus*

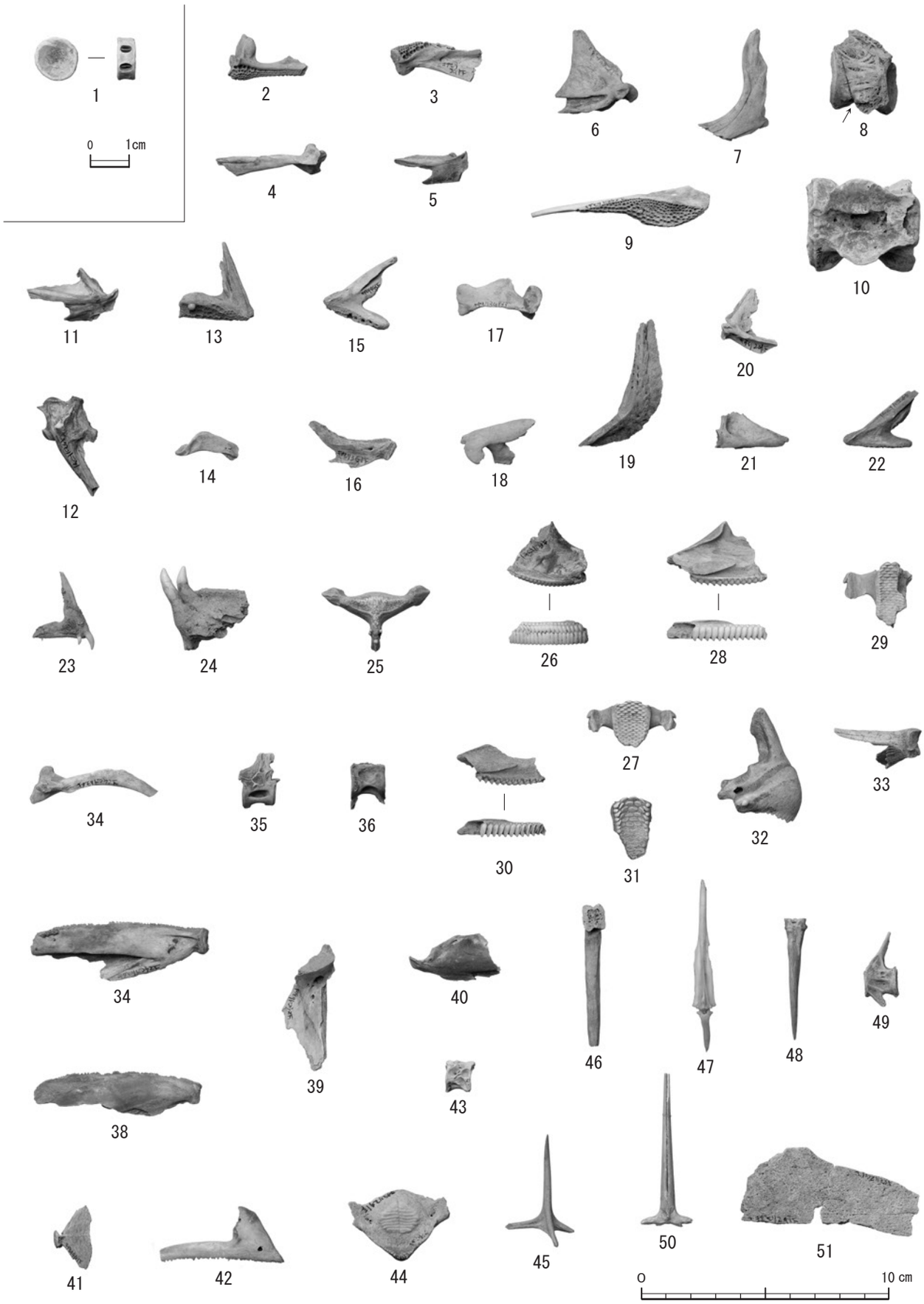
哺乳綱	MAMMALIA
ネズミ科	Murinae
イヌ	*Canis familiaris*
ネコ	*Felis catus*
ウマ	*Equus Feres*
イノシシ/ブタ	*Sus scrofa*
ヤギ	*Capra hircus*
ウシ	*Bos taurus*

第 34 表　魚類出土状況

グリッド			1グリッド		2グリッド							3グリッド					4グリッド				不明	総数	左/右
層序・遺構			Ⅰ層	焼土遺構	Ⅰ層下部	土抗3	土抗6	P40	P41	P44	P58	Ⅰ層下部	Ⅱ層	Ⅱ層下部	P30	P33	Ⅰ層下部	土抗1	土抗2 下層	P4	Ⅰ層下部		
科	種	部位(左/右)																					
メジロザメ科		脊椎骨										1										1	
ハタ科	種不明	前上顎骨			0/1																0/1	2	0/2
		主上顎骨				0/1						1/0					0/1				1/2	6	2/4
		歯骨										0/1										1	0/1
		角骨			0/2																	2	0/2
		方骨			1/0	1/0																2	2/0
		前鰓蓋骨															0/1					1	0/1
		擬鎖骨			1/1					0/1								0/1	1/0		0/1	6	2/4
		脊椎骨										1/0										1	1/0
アジ科？	種不明	上咽頭骨																	1			1	
		脊椎骨										1										1	
フエダイ科	種不明	角骨																1/0				1	1/0
		舌顎																1/0				1	1/0
タイ科	クロダイ	前上顎骨		0/2	1/0																	3	1/2
		主上顎骨			1/0																	1	1/0
フエフキダイ科	キツネフエフキ	前上顎骨																1/0				1	1/0
	ハマフエフキ	前上顎骨										0/1	0/1				1/3					6	1/5
		主上顎骨			1/0			1/0								0/1						3	2/1
		歯骨										1/0										1	1/0
		口蓋										1/0						1/0				2	2/0
		角骨																			0/1	1	0/1
		方骨			0/1		0/1										1/0					3	1/2
		前鰓蓋骨				1/0																1	1/0
	種不明	前上顎骨																			1/0	1	1/0
ベラ科	コブダイ	前上顎骨																0/1	1/0			2	1/1
		歯骨			0/1																0/1	2	0/2
		下咽頭骨			1							2					2				1	6	
ブダイ科	イロブダイ	上咽頭骨																0/1				1	0/1
		下咽頭骨															1					1	
	ナガブダイ	上咽頭骨															1/0					1	1/0
		下咽頭骨																1				1	
	ナンヨウブダイ	上咽頭骨																1/0				1	1/0
		下咽頭骨																1				1	
	種不明	前上顎骨															1/0	0/1	1/0			3	2/1
		方骨															0/1					1	0/1
		脊椎骨										1										1	
カツオ・スマ類		前上顎骨																	0/1			1	0/1
		脊椎骨										2							1			3	
カツオ		主上顎骨																1/0	1/0			2	2/0
		脊椎骨																12				12	
		腹椎												1				1				2	
		尾椎																1	1			2	
カツオ？		主上顎骨																	1/0			1	1/0
		歯骨																	2/2			4	2/2
		角骨																	2/0			2	2/0
		主鰓蓋骨															1/0					1	1/0
		終尾椎															1					1	
ハリセンボン科		上顎骨			1							1										2	
		棘	31		1																	32	
科・種不明		鋤骨																1				1	
		前鰓蓋骨																	1/3			4	1/3
		主鰓蓋骨																	0/1			1	0/1
		擬鎖骨																1/0				1	1/0
		脊椎骨	1		6	4			1			1					4				2	18	
		棘																	1			1	
		背鰭棘																1				1	
		第2臀鰭棘			5												2					7	
		臀鰭血管間棘															2			1		3	
		不明									1				1							2	
総計			31	2	25	7	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	23	29	21	1	11	174	
グリッド小計			33		37							19					74				11		

第 35 表　魚類・爬虫類図版掲載一覧

No.	科	種	部位	右／左	グリッド	層序	遺構	備考
1	メジロザメ科		脊椎骨		3G	Ⅰ層下部		
2	ハタ科	種不明	前上顎骨	右		Ⅰ層下部		
3			歯骨	右	3G	Ⅰ層下部		
4			主上顎骨	右	4G	Ⅰ層下部		
5			角骨	右	2G	Ⅰ層下部		
6			方骨	左	2G		土抗3	
7			擬鎖骨	左	2G	Ⅰ層下部		
8			脊椎骨		3G	Ⅰ層下部		キズあり
9	アジ科？	種不明	上咽頭骨		4G		土抗2下層	
10			脊椎骨		3G	Ⅰ層下部		
11	フエダイ科	種不明	角骨	左	4G		土抗1	
12			舌顎	左	4G		土抗1	
13	タイ科	クロダイ	前上顎骨	左	2G	Ⅰ層下部		
14			主上顎骨	左	2G	Ⅰ層下部		
15	フエフキダイ科	ハマフエフキ	前上顎骨	右	4G	Ⅰ層下部		
16			歯骨	左	3G	Ⅰ層下部		
17			主上顎骨	右	3G		P33	
18			口蓋	左	3G	Ⅰ層下部		
19			前鰓蓋骨	左	2G		土抗3	
20			方骨	右	2G	Ⅰ層下部		
21			角骨	右		Ⅰ層下部		
22		キツネフエフキ	前上顎骨	左	4G		土抗1	
23	ベラ科	コブダイ	前上顎骨	左	4G		土抗2下層	
24			歯骨	右	4G	Ⅰ層下部		
25			下咽頭骨		4G	Ⅰ層下部		
26	ブダイ科	イロブダイ	上咽頭骨	右	4G		土抗1	
27			下咽頭骨		4G	Ⅰ層下部		
28		ナンヨウブダイ	上咽頭骨	左	4G		土抗1	
29			下咽頭骨		4G		土抗1	
30		ナガブダイ	上咽頭骨	左	4G	Ⅰ層下部		
31			下咽頭骨		4G		土抗1	
32		種不明	前上顎骨	右	4G		土抗1	
33			方骨	右	4G	Ⅰ層下部		
34	カツオ		主上顎骨	左	4G		土抗2下層	
35			腹椎		4G		土抗1	
36			尾椎		4G		土抗1	
37	カツオ？		歯骨	左	4G		土抗2下層	
38			歯骨	右	4G		土抗2下層	
39			主鰓蓋骨	左	4G	Ⅰ層下部		
40			角骨	右	4G		土抗2下層	
41			終尾椎		4G	Ⅰ層下部		
42	カツオ・スマ類		前上顎骨	右	4G		土抗2下層	
43			脊椎骨		3G	Ⅰ層下部		
44	ハリセンボン科		上顎		2G	Ⅰ層下部		
45			棘		1G	Ⅰ層		
46	科・種不明		鋤骨		4G		土抗1	
47			臀鰭血管間棘		4G		P4	
48			第2臀鰭棘		4G	Ⅰ層下部		
49			脊椎骨		3G	Ⅰ層下部		
50			棘		4G		土抗2下層	
51	ウミガメ科		助骨板		2G	Ⅰ層下部		



図版５　魚類・爬虫類　※番号は第 35 表と一致

おける一般的な傾向である。一方、近代の遺構である土坑１・２は獣骨が出土しておらず、カツオを中心とした魚類が出土している。このカツオはⅡ層では出土しないため、この遺構もしくは近代の特徴と思われる。

第 36 表　カメ出土状況

グリッド 層序・遺構 科	部位	1グリッド Ⅰ層	1グリッド P47, P51	2グリッド Ⅰ層下部	総計
ウミガメ科	助骨板	1	1	1	3

第 37 表　トリ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	出土地	個数
トリ	肋骨	破片	－	2G土抗3	1
	脛骨	遠位端	左	3GⅠ層	1
	趾骨	遠位端	－	3GⅠ層下部	1
	中足骨		右	3GⅠ層下部	1

第 39 表　ネズミ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	出土地	個数
ネズミ	大腿骨	近位部～遠位部	左	3グリッドⅠ層下部	1
		近位部	左	3グリッドⅠ層下部	1
		近位端～遠位骨体はずれ	左	2グリッドⅠ層下部	1
	脛骨	近位部～遠位端	左	3グリッドⅠ層下部	1

第 38 表　ニワトリ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	出土地	個数
ニワトリ	大腿骨	近位端～骨体	右	3グリッドⅠ層下部	1
	脛骨	近位端～骨体	左	3グリッドⅠ層下部	1
	趾骨	完存	－	4グリッドP11	1

第 41 表　イヌ出土状況

グリッド 層序・遺構 種類	部位	残存部位		右/左	1グリッド 土抗8	3グリッド Ⅰ層下部	3グリッド Ⅱ層	4グリッド Ⅰ層下部	4グリッド 土抗2下層	総計
イヌ	胸椎			－					1	1
	中手骨	Ⅳ		左		1				1
		Ⅴ	(中足骨？)	右		1				1
				左			1			1
	寛骨	腸骨部	キズあり	右					1	1
	脛骨	近位部	キズあり	右	1					1
	中足骨	Ⅴ		左				1		1
小計					1	2	1	1	2	7
グリッド小計					1	3		3		7

第 42 表　ヤギ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	出土地	個数
ヤギ	下顎骨	dm_3, dm_4, M_1, M_2	右	4グリッドⅠ層下部	1
	頸椎	破片	－	4グリッドⅠ層下部	1
	胸椎	－	－	2グリッドⅠ層下部	1
	椎体	－	－	2グリッドⅠ層下部	1

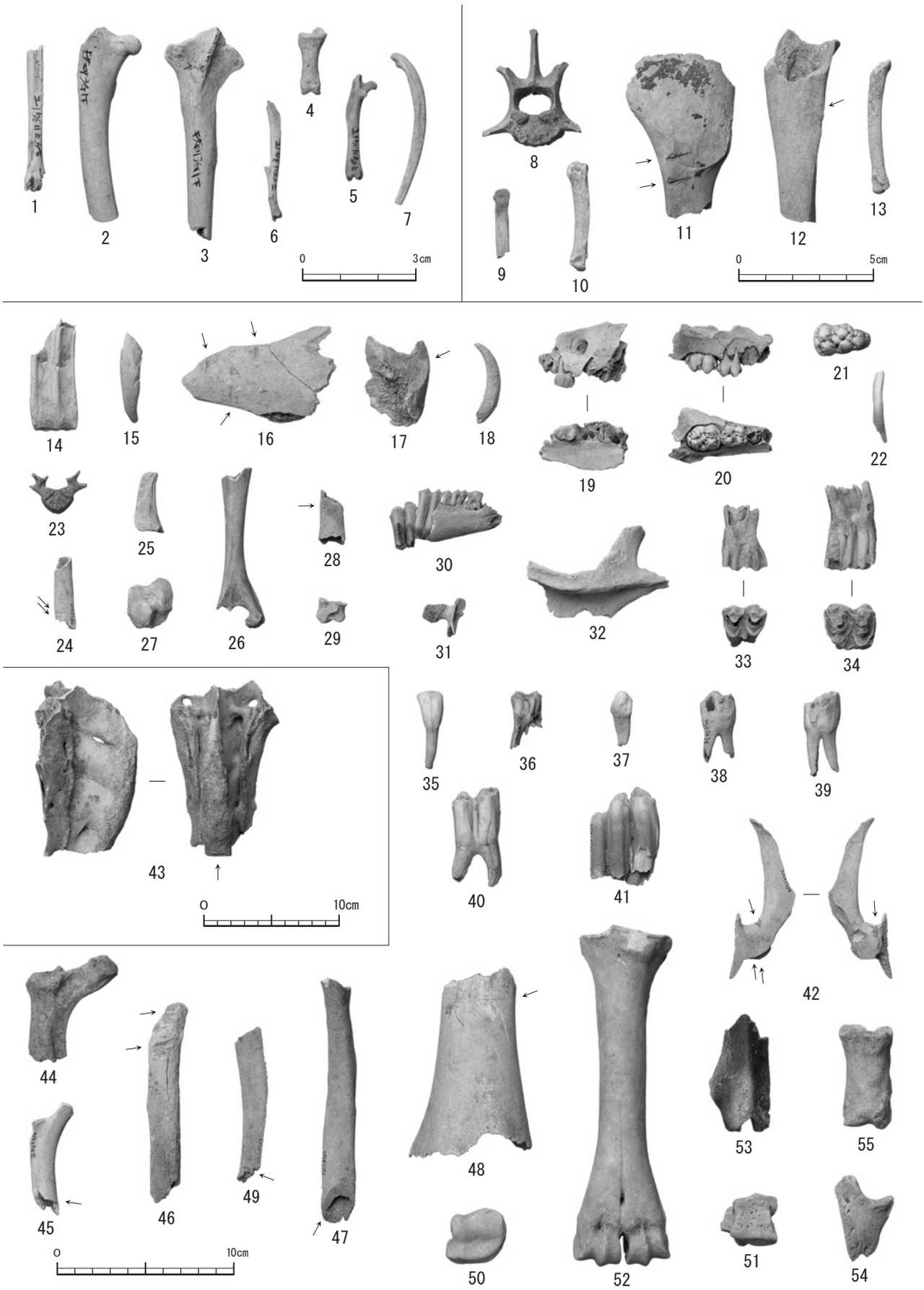
第 40 表　ネコ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	出土地	個数
ネコ	肋骨	近位端	左	2グリッドⅠ層下部	2
		破片	左	2グリッドⅠ層下部	1

第 43 表　鳥類・哺乳類図版掲載一覧

No.	種類	部位	残存部位	右／左	グリッド	層序	遺構	備考
1	トリ	中足骨		右	3G	Ⅰ層下部		
2	ニワトリ	大腿骨	近位端～骨体	右	3G	Ⅰ層下部		
3		脛骨	近位端～骨体	左	3G	Ⅰ層下部		
4		趾骨	完存		4G		P11	
5	ネズミ	大腿骨	近位端～遠位骨体はずれ	左	2G	Ⅰ層下部		
6		脛骨	近位部～遠位端	左	3G	Ⅰ層下部		
7	ネコ	肋骨	近位端	左	2G	Ⅰ層下部		
8	イヌ	胸椎			4G		土抗2下層	
9		中手骨	Ⅳ	左	3G	Ⅰ層下部		
10			Ⅴ	左	3G	Ⅱ層		
11		寛骨	腸骨部	右	4G		土抗2下層	キズあり
12		脛骨	近位部	右	1G		土抗8	キズあり
13		中足骨	Ⅴ	左	4G	Ⅰ層下部		
14	ウマ	上顎骨	P^3～M^2	左	4G	Ⅰ層下部		
15		上顎骨or下顎骨	Ⅰ	不明	2G	Ⅰ層下部		
16		下顎骨	破片		3G	Ⅱ層下部		キズあり
17		寛骨	破片	左	1G	Ⅰ層下部		キズあり
18	イノシシ	上顎骨	I^1	右	2G	Ⅱ層		
19			P^3	左	3G	Ⅰ層下部		
20			P^4,M^1,M^2	右	3G	Ⅰ層下部		
21			M^3	左	4G	Ⅰ層下部		
22		下顎骨	I_2	右	4G	Ⅰ層下部		
23		腰椎			4G	Ⅰ層下部		
24		肋骨			3G	Ⅰ層		キズあり
25		肩甲骨	遠位端	左	3G	Ⅰ層下部		
26		上腕骨	近位部～遠位部	左	3G	Ⅰ層下部		
27		脛骨	近位骨端のみ	左	3G	Ⅰ層下部		
28			遠位部	不明	3G	Ⅱ層		キズあり
29		腓骨	遠位端	右	2G		P40	

No.	種類	部位	残存部位	右／左	グリッド	層序	遺構	備考
30	ヤギ	下顎骨	dm_3, dm_4, M_1, M_2	右	4G	Ⅰ層下部		
31		椎体			2G	Ⅰ層下部		
32	ウシ	側頭骨　頬骨突起		左	2G	Ⅰ層下部		
33		上顎骨	M^1	左	3G	Ⅰ層下部		
34			M^2	右	4G	Ⅰ層下部		
35		下顎骨	dm_3 or dm_4	右	4G	Ⅰ層下部		
36			I	左	4G	Ⅰ層下部		
37			P_2	左	4G		土抗1	
38			P_3	右	2G	Ⅰ層下部		
39			P_4	右	4G	Ⅰ層下部		
40			M_2	右	2G	Ⅰ層下部		
41			M_3	右	3G	Ⅰ層下部		
42			筋突起	右	2G	Ⅰ層下部		キズあり
43		仙骨			4G		土抗1	キズあり
44		肋骨	近位端	右	4G	Ⅰ層下部		
45				左	3G	Ⅱ層		キズあり
46				右	1G	Ⅰ層下部		キズあり
47				右	4G		土抗1	キズあり
48		橈骨		右	4G	Ⅰ層下部		キズあり
49		尺骨		左	2G		土抗3	キズあり
50		2+3手根骨		右		Ⅰ層下部		
51		中間手根骨	完存	右	3G	Ⅱ層		
52		中手骨	完存	右	4G		土抗1	
53		脛骨	遠位端	左	2G	Ⅰ層下部		被熱
54		基節骨	完存	右	3G	Ⅰ層下部		
55		末節骨		右	2G	Ⅰ層下部		



図版６　鳥類・哺乳類　※番号は第 43 表と一致

第 44 表　イノシシ／ブタ出土状況

種類	部位	残存部位		右/左	2グリッド Ⅱ層	2グリッド P40	3グリッド Ⅰ層	3グリッド Ⅰ層下部	3グリッド Ⅱ層	4グリッド Ⅰ層	4グリッド Ⅰ層下部	4グリッド 土抗1	不明 Ⅰ層下部	総計
イノシシ/ブタ	上顎骨	I^1		右	1									1
		M^3		左							1			1
		P^3		左				1						1
		P^4, M^1, M^2		右				1						1
		破片		左				1						1
				右								1		1
	下顎骨	I_1		左					1					1
		I_2		右				1			1			2
	上顎骨or下顎骨　不明	歯の破片		一							3			3
	肩甲骨	遠位端		左				1						1
	上腕骨	近位部～遠位部		左				1						1
		遠位骨端はずれ		左						1				1
		破片		右				1	1					2
	腰椎			一							1			1
	肋骨	破片	キズあり	右									1	1
				一			1							1
	大腿骨	骨頭のみ		一							1			1
	脛骨	遠位部	キズあり	一					1					1
		近位骨端のみ		左				1						1
	腓骨	遠位端		右		1								1
小計					1	1	1	8	3	1	7	1	1	24
グリッド小計					2		12			9			1	24

第 45 表　ウマ出土状況

種類	部位	残存部位		右/左	1グリッド Ⅰ層下部	2グリッド Ⅰ層下部	3グリッド Ⅰ層下部	3グリッド Ⅱ層下部	4グリッド Ⅰ層下部	4グリッド 土抗1	総計
ウマ	上顎骨	P^3～M^2		左					1		1
	下顎骨	P_4		右		1	1				2
		破片	キズあり	－				1			1
		破片		－						1	1
	上顎骨or下顎骨 不明	切歯		－		1					1
		歯・破片		－					1		1
		破片		－			1				1
	寛骨	破片	キズあり	左	1						1
小計					1	2	2	1	2	1	9
グリッド小計					1	2	3		3		9

第 46 表　ウシ出土状況

種類	部位	残存部位		右/左	1グリッド Ⅰ層	1グリッド Ⅰ層下部	2グリッド Ⅰ層下部	2グリッド 土抗3	2グリッド 土抗6	3グリッド Ⅰ層	3グリッド Ⅰ層下部	3グリッド Ⅱ層	3グリッド P32	3グリッド P33	4グリッド Ⅰ層下部	4グリッド 土抗1	不明 Ⅰ層下部	総計
ウシ	上顎骨	M^1		右							1			1				2
				左							1							1
		M^2		右											1			1
				左											1			1
		M^3		左									1					1
	下顎骨	dm_3 or dm_4		右											1			1
		I		左											1			1
				－											1			1
		P_2		左												1		1
		P_3		右			2											2
		P_4		右							1				1			2
		M		左											1			1
		M_1		左					1									1
		M_2		右			1											1
		M_3		右							1							1
		筋突起	キズあり	右			1											1
	上顎骨or 下顎骨 不明	歯の破片		－											6			6
		破片		－							1							1
	側頭骨	頬骨突起		右						1								1
				左			1											1
	棘突起		キズあり	－											1			1
	橈骨		キズあり	右											1			1
	尺骨		キズあり	左				1										1
	2+3手根骨			右													1	1
	中間手根骨			右								1						1
	中手骨	完存		右												1		1
		遠位端		左	1													1
		近位部～遠位部		左											1			1
		破片		左			1											1
	肋骨	近位端	キズあり	右											1			1
		破片	キズあり	左						1								1
			キズあり	右		1										1		2
			キズあり	左								1						1
	脛骨	遠位端		左			1											1
	仙骨		キズあり	－												1		1
	寛骨	破片		左													1	1
	足根骨	第4中心		左											1			1
	基節骨	完存		右							1							1
				左							1							1
				右			2								1			3
	中節骨	破片		右							1							1
				左							1							1
	末節骨			右			1											1
小計					1	1	10	1	1	2	9	2	1	1	19	4	2	54
グリッド小計					2		12			15					23		2	54

第４章　喜田盛遺跡土坑墓出土の人骨

１．はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成 22 年度に行われた石垣島喜田盛遺跡の発掘調査によって、３体の埋葬人骨が出土した。人骨の所属年代は供伴する遺物や層序から 15 世紀後半～ 16 世紀と考えられている。喜田盛遺跡は平成 12 年度にも発掘調査が行われており、５体の埋葬人骨が出土している[1)]。石垣島の同時代埋葬人骨は蔵元跡遺跡[2)]、石垣貝塚[3)]、登野城遺跡[4)] などでも報告されているが、今回出土した人骨も石垣島グスク時代人の特徴を知る貴重な追加資料と思われる。以下に人骨の概要を報告する。

２．出土人骨および調査方法

出土人骨

出土人骨の一覧を第 47 表に示す。この他に１層からも少量の骨片、歯などが検出されているが、詳細は不明である。

第 47 表　出土人骨一覧

人骨番号	性　別	年　齢
1号土坑墓人骨	女性	成年
2号土坑墓人骨	不明	乳児
3号土坑墓人骨	不明	幼児

年齢区分と人骨の計測法

人骨鑑定の際に用いた年齢区分は Knussman(1988) [5)]を参考に、乳児（出生―１歳）、幼児（１―約６歳）、小児（約６―約 14 歳）、若年（約 14―約 20 歳）、成年（約 20―約 40 歳）、熟年（約 40―約 60 歳）、老年（約 60 歳以上）とした。計測は Knussman(1988) [5)] に従った。

歯の調査方法

歯はそれぞれの人骨について歯種同定を行い、全体の数量を求め調査を行った。調査項目は咬耗・齲歯・エナメル質減形成とした。咬耗度とそれによる年齢推定については Brothwell（1981）[6)] を参考にし、歯の萌出による年齢推定については、Ubelaker（1989）[7)] を参考にした。また、エナメル質減形成については、山本（1988）[8)] の論考を参考にした。

３．人骨所見

１）土坑墓１人骨（女性・成年）

出土部位：ほぼ全身骨が残存する埋葬人骨である。出土した時点では保存状態は比較的良好と思われたが、骨質が脆く、取り上げの際に破損した部位が多かった。

性別・年齢の推定：四肢骨の筋付着部は明瞭であるが、眉弓および乳様突起の発達が弱いことから、本人骨の性別は女性と推定した。年齢は後述の歯の所見（第４節参照）および頭蓋主縫合のほとんどが癒合していることから 30 歳代と推定した。

２）土坑墓２人骨（性別不明・乳児）

出土部位：比較的保存状態の良好な埋葬人骨で、ほぼ全身骨が残存している。

性別・年齢の推定：性別は未成人のため不明である。年齢は残存する歯の形成状態（第４節参照）および四肢骨のサイズ等から生後９ヶ月前後の乳児と推定した。

３）土坑墓３人骨（性別不明・幼児）

出土部位：下半身のみが検出された。確認できた部位は右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨である。

性別・年齢の推定：性別は未成人のため不明である。年齢は下肢骨のサイズが土坑墓２人骨よりやや大きいことから、１歳～２歳位の幼児と推定した。

４．歯

１）土坑墓１人骨

咬耗　歯は永久歯 21 本確認された。歯式を下に示す。下顎左側の第３大臼歯は未萌出だが、上顎右側第２大臼歯遠位側面に齲歯が認められることから、第３大臼歯が萌出していた可能性がある。Brothwell（1981）[6] を参考に、大臼歯の咬耗度によって年齢を推定すると 20 歳代と考えられるが、上顎右の第３大臼歯が萌出していた可能性も高く、前歯の咬耗も比較的進行しているため、30 歳代に達していたと考えられる。人骨の所見を考え合わせると被葬者は大臼歯の咬耗があまり進んでいない 30 歳代女性が妥当であろう。

	7	6	5	4	3	2	1	1	×	3	4		6	
			5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	×

生活痕　歯には全体的に多量の歯石が付着しているが、特に下顎右側に付着する量が多い傾向がある（図版７ａ）。相対的に右側で頻繁に咀嚼活動を行った可能性が示唆される。上顎右第２大臼歯遠位側面に歯髄空まで達するＣ４段階の齲歯が認められる（図版７ｂ）。その他の歯に齲歯は認められない。

下顎左犬歯に２本のエナメル質減形成が認められる（図版８ｃ）。山本（1988）を参考に年齢を推定すると、４歳～ 4.5 歳、4.5 歳～５歳に連続してなんらかの身体ストレスを受けたことがわかる。右側は多量の歯石により観察することができない。

２）土坑墓２人骨

歯は乳歯 15 本確認された。歯式を下に示す。Ubelaker（1989）[7] を参考に、歯の萌出状況による年齢を推定すると９ヶ月前後と考えられる。特徴的な生活痕等は観察されなかった。

E	D	C	B		A		C	D	E
E	D	C	B				C	D	E

５．人骨の生活痕

土坑墓１人骨において変形性関節症や骨膜炎などの病変が認められた。変形性関節症は、各々の関節にみられ、関節組織の退行性変化（関節軟骨の変性）とこれに伴う増殖性変化（骨棘の形成）などにより関節の形態が変化する現象である。加齢現象や長期にわたる関節への負荷、機械的ストレスなどの要因で発生するとされている[9）10)]。

土坑墓１人骨では、上腕骨・尺骨・橈骨、手指骨、足指骨において変形性関節症がみられた（図版８ｄ・ｅ・f)。骨の保存状態が悪く、主に肘関節や指関節の観察しかできなかったが、やや重度の変形性関節症が確認できた。肘関節は、特に局所的機械的ストレスによって引き起こされることが多く、肘関節を酷使するような肉体労働者に多くみられる[9] とのことから、土坑墓１人骨についても肘関節により負荷のかかる動作（労働）に従事してい

た可能性が考えられる。また、手指骨にも認められることから、手作業に従事していた可能性も示唆される。下肢については、足指骨に変形性関節症を認められたが、他の関節が残っていないため、詳細は不明である。

その他に、骨膜炎が認められた。骨膜炎は骨にみられる炎症の一つで、下肢にみられる骨膜炎は衛生状況などの生活環境の厳しさを反映するストレスマーカーとして用いられることが多い。土坑墓１人骨では、脛骨、腓骨にみられた。より重度な骨髄炎は確認できなかったが、骨の膨隆も確認され、骨膜炎が進行していた状態が確認された（図版８ｇ）。このことから、土坑墓１人骨の生活環境は厳しかった可能性が考えられる。

６．形質

土坑墓１人骨

骨の保存状態が悪く、特に、頭蓋骨は接合が困難だったため、形態学的調査は四肢骨についてのみ行った。頭蓋骨については、現場での観察および清掃作業時の観察から、一般的に中世人の特徴とされる長頭および歯槽性突顎の傾向が確認されている（図版８ｈ）。

四肢骨は筋付着部が明瞭で筋肉質の体型であったことが推定される。四肢骨の計測値を第 48・49 表に示す。上肢骨も下肢骨も男性並みの計測値を示しており、全体としては頑丈な体格だったと考えられる。大腿骨の柱状性は認められない。十分な計測値が得られなかったので、集団の比較など、詳細な分析は出来なかった。

第 48 表　土坑墓１人骨の上肢骨計測値

	右	左
上腕骨		
5 中央最大幅	22	23
6 中央最小幅	17	16
7 最小周	57	60
7a 中央周		68
6/5 体断面示数	77.3	69.6
尺骨		
3 最小周		34
11 体矢状径		12
12 体横径		18
11/12 体断面示数		66.7
橈骨		
3 最小周		37
4 体横径	17	16
5 体矢状径	10	10
5/4 体断面示数	58.8	62.5

(mm)

第 49 表　土坑墓１人骨の下肢骨計測値

	左
大腿骨	
6 体中央矢状径	25
7 体中央横径	27
8 体中央周径	80
6/7 体中央断面示数	92.6

(mm)

特記事項

土坑墓１人骨は検出時にはほぼ全身骨が確認されたが、取上げ後の清掃、復元過程では、骨が極端に脆く、また変形した部分も多かったことから、頭蓋骨および下肢骨の接合は難しかった。全体的にサイズが大きい割に、緻密質の厚さが薄く、特に下肢骨の骨質は脆弱である（図版８i）。写真左の正常な脛骨断面の緻密骨厚に比べて、極端に薄い緻密質であることが分かる。埋葬地周辺環境の影響も否定できないが、本人骨の健康状態はおそらく骨粗鬆症のような状況にあったのではないだろうか。さらに、生活痕の項でも述べたように、本人骨にはほぼ全身の関節に変形性関節症が認められ、関節周辺部の骨破壊も認められる。全身の関節の変形と骨粗鬆症を伴う臨床例として、自己免疫疾患の関節リウマチが考えられるが[11]、ここでは事実関係の指摘のみを行い、今後の課題としたい。

７．まとめ

１）石垣島喜田盛遺跡から、埋葬人骨３体（女性１体、幼児１体、乳児１体）が出土した。所属年代は考古学的所見から 15 世紀後半～ 16 世紀と推定された。

２）土坑墓１人骨（成年、女性）の調査結果を以下に要約する。

・歯には多量の歯石が付着しており、右上顎第２大臼歯には歯髄腔に達する齲歯が認められた。また、左下顎犬歯に４～4.5 歳、4.5 ～５歳に連続して身体ストレスを受けたことを示すエナメル質減形成が２本認められた。

・変形性関節症や骨膜炎など、生活環境や衛生環境の厳しさを示す病変が認められた。

・骨質が脆く、十分な形態学的分析は出来なかったが、骨の計測値は全体的に筋肉質な体型だったことを示唆している。しかしながら、緻密質の厚さが極端に薄いことから、健康状態はあまり良好ではなかったことも示唆された。

なお、本報告は４を片桐千亜紀、５を徳嶺里江、それ以外を土肥直美で分担執筆した。

参考文献

１）土肥直美・譜久嶺忠彦（2004）喜田盛遺跡出土の人骨.「喜田盛遺跡」石垣市文化財調査報告書第 28 集，石垣市教育委員会，pp. 129-142.

２）土肥直美・北條真子（1997）八重山蔵元跡遺跡出土の人骨.「蔵元跡発掘調査報告書」石垣市文化財調査報告書第 21 集，石垣市教育委員会，pp. 129-142.

３）土肥直美（2009）石垣貝塚出土の人骨.「石垣貝塚発掘調査報告書」石垣市教育委員会，pp. 129-142.

４）土肥直美（2009）登野城遺跡出土の人骨．石垣市教育委員会，印刷中 .

５）Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.

６）Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.

７）Ubelaker DH (1989) Human Skeletal Remains, Teraxacum, Washington, DC.

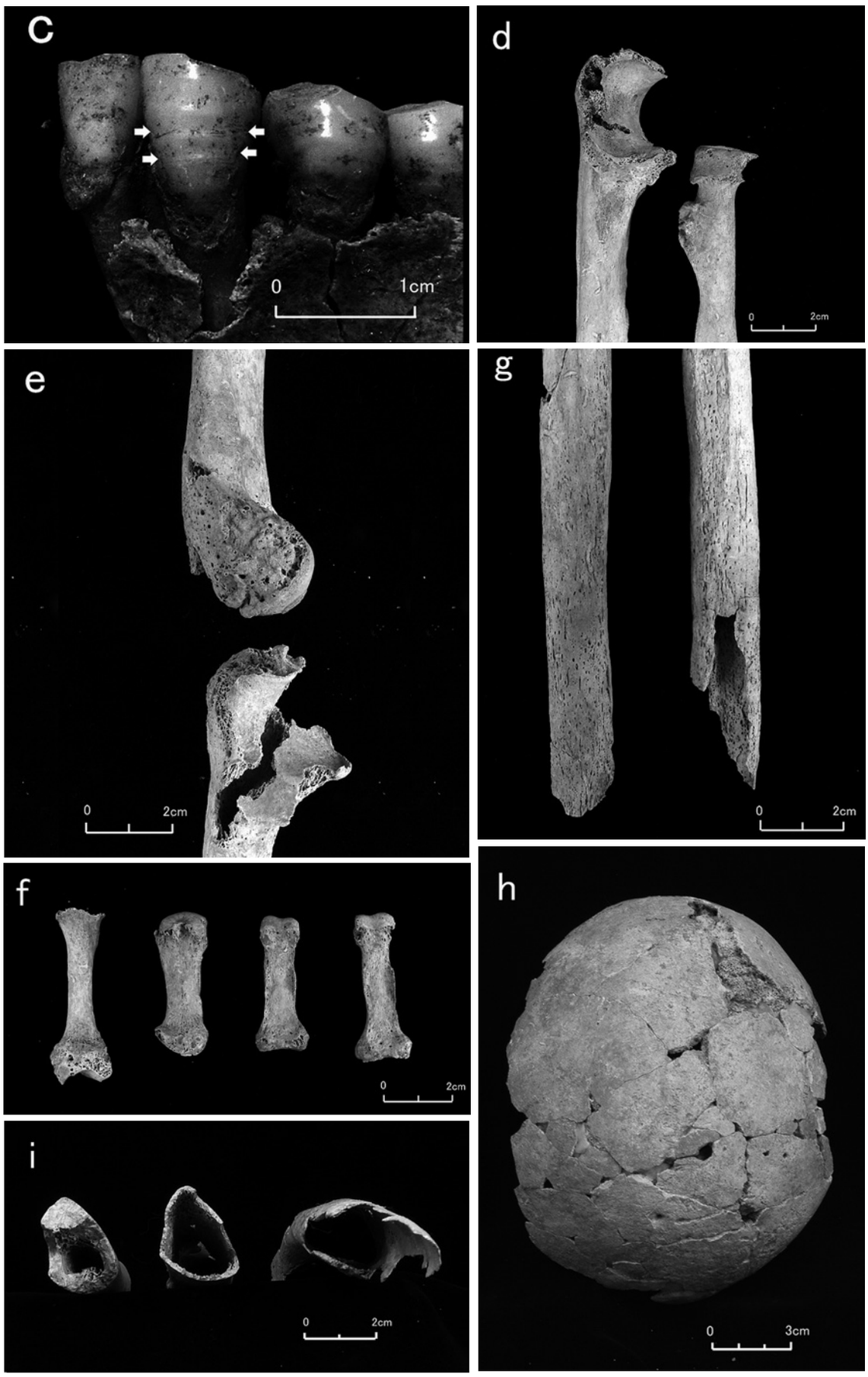
８）山本美代子（1988）日本古人骨永久歯のエナメル質減形成．人類学雑誌，96, 417-433.

９）鈴木隆雄（1988）『骨から見た日本人』，講談社

10）福島一彦 (1988)「西南日本弥生人の骨病変について」『福岡医誌』79（2）

11）小竹　茂（2005）Ⅱ．骨粗鬆症の病型と病態、５．関節リウマチと骨粗鬆症．日本内科学会雑誌 94，649-655.

図版7　人骨（1）



図版８　人骨（２）

第５章　総括

ここまで、平成 22 年度の喜田盛遺跡（以下、本遺跡）における発掘調査の事実記載をまとめてきた。今回の調査により、県道真栄里新川線に伴う一連の発掘調査が終了したことになる。そこで、今回の調査成果を整理し、これまでの本遺跡の調査内容もまとめて、現時点での地域における位置付けを検討したい。なお、本稿での中森期の年代観は、土器は新里（2004）、陶磁器は瀬戸ほか（2007）に基づいている。

第１節　調査成果のまとめ

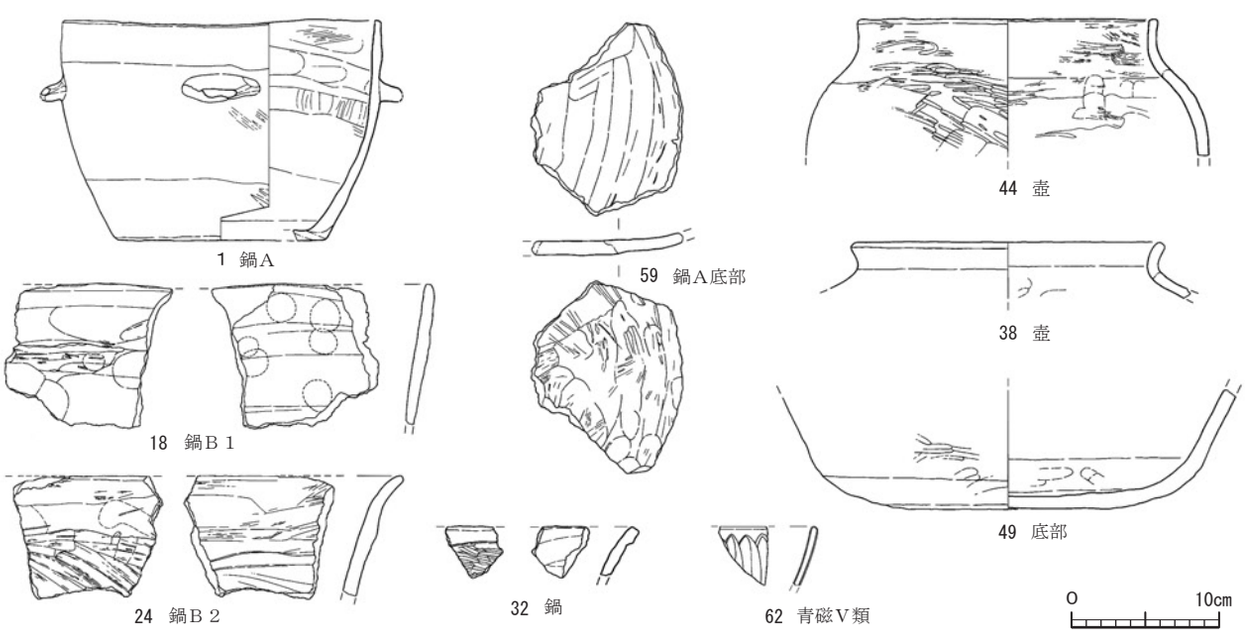
本遺跡は、石垣島南東部の海岸砂丘上に位置し、中森期を主体として近世・近代に及ぶ集落跡である。本節では、今回の調査成果のまとめとして、中森期、近世、近代に分けてその内容を整理する。

中森期　遺物の組成より中森期の主体時期を検討する。土器が全体の約７割と最も多く出土しており、その中でも鍋Ｂが主体である。更に見ると、外に開く胴部形態である石垣タイプⅡに相当する鍋Ｂ１、これと上村タイプの中間的なものと考えられる鍋Ｂ２が多い。陶磁器で最も多い青磁はⅤ（雷文・外反碗）・Ⅵ（細蓮弁文碗）類、白磁はＤ群皿（内湾皿）が主体である。中森期の青花は少ないが、Ｃ（蓮子碗）・Ｄ（腰折碗）・Ｅ（饅頭心碗）群碗、漳州窯系と時期幅が見られる。このような陶磁器の組成は、14 世紀後半～ 17 世紀前半の幅をもつが、その主体は 15 世紀後半～ 16 世紀前半と考えられる。この年代観は、土器においても大きく矛盾しない。

中森期の遺物の様相としては、土坑３が最も良好である。土器では古い傾向である鍋Ａ（１・59）、鍋Ｂ１（18）、鍋Ｂ２（24）、壺（18・44）などと、青磁Ⅴ類（剣先蓮弁文）が共伴しており、中森期の一様相を示している（第 24 図）。出土個体数は、土器 15 点、青磁１点、褐釉陶器２点と、土器が８割を占めている。

遺構には、３基の土坑墓、焼土遺構、土坑３・７などやピット群がある。ピットは近世の遺物が少量出土するものが 28 基あるが、土坑墓を避けるような分布状況であることから、大半は中森期の可能性が高いと考えられる。このような土坑墓とピット群の分布からは同時性があったものと思われ、地上に何らかの目印があったのかもしくは、建物群に近接して墓を営むいわゆる屋敷墓とされる風習などがあったと推測される。

土坑墓は、検出段階より解剖学的見地により取り組んだため、詳細な埋葬姿勢を検討できた。土坑墓１は壮年女性（30 代）の仰臥強屈葬でその姿勢から紐などで縛って埋葬されたものと考えられ、また膝蓋骨がないこと



第 24 図　土坑３出土土器・青磁

から埋葬時には既になかった可能性がある。土坑墓２は乳幼児（９ヶ月前後）が足はやや曲がった状態であるが自然な埋葬と考えられ、土坑墓１との意識の違いが感じられる。土坑墓３は検出時に多くの骨を取り上げてしまったが、大腿骨は原位置で確認できため、土坑墓２と同様な状況で幼児が埋葬されていたものと思われる。

ピット群はその規模から柱穴と考えられるが、明確な建物プランの復元は困難であった。ただ、一案としてピットの深さが 30cm を測る深いものをピックアップしてみると、土坑墓を境界として、東側と西側でピットのまとまりが確認でき、何らかの配列を有していたことは言えよう（第 25 図）。

焼土遺構は、長さ推定 250 ～ 280cm の細長い平面形で、断面がＵ字状を呈するもので、非常によく被熱している。県内での類例はないが、この遺構自体が煙道とも考えられるが、周辺が全く被熱していない。

自然遺物の傾向をまとめる。脊椎動物遺体は、ウシ・イノシシ／ブタ・イヌ・トリ、ハマフエフキ・クロダイ等が出土しており他遺跡と大きな違いはない。貝類はアラスジケマンガイが圧倒的に多く、マガキガイを主体とする石垣島南東部の遺跡とは異なった傾向である。ちなみに、遺構においてはホソスイジイナミガイ・イソハマグリ・ナミノコマスオなど、包含層であるⅡ層よりもバラエティがあるといった特徴が見られる。

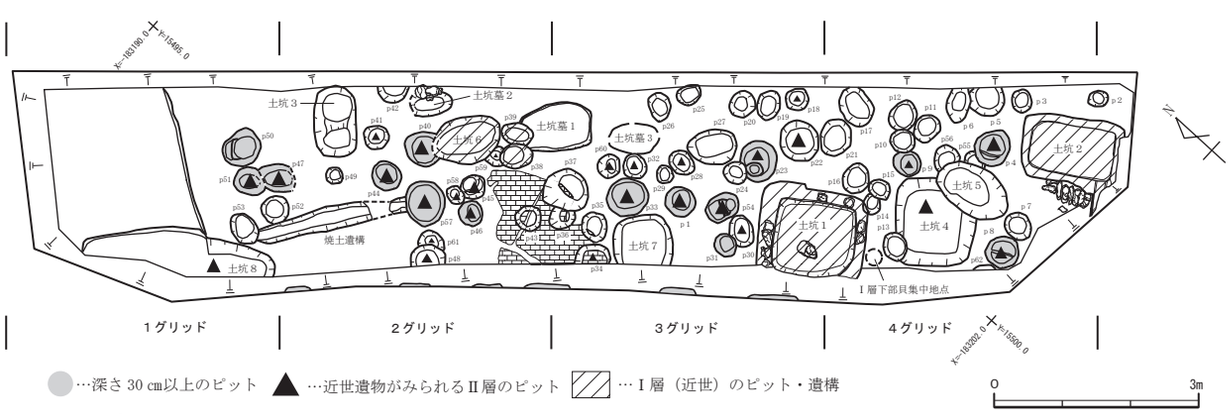
以上、遺物からは 15 世紀後半～ 16 世紀が主体と考えられ、遺構としては建物が土坑墓３基と同時性をもって存在する集落跡の一部であったことが想定される。

近世　当該期と考えられる遺構は、先述したように埋土がⅡ層のもので近世の遺物が出土しているピットが 28 基、土坑では４・８などがある（第 25 図）。しかし、いずれも少量であることからこれらが明確に近世としてよいかの判断を保留せざるを得ない。ただ、Ⅰ層下部の貝集中地点ではナミノコマスオが比較的多いという特徴がⅡ層の遺構との共通性が高いことから、当該期の遺構ではないかと思われる。

遺物から近世における主体年代を検討する。青花では、福建・広東系が概ね 18 世紀ごろ (新垣 2003)、徳化窯系が 18 ～ 19 世紀（陳 1999）と考えられている。本土産では肥前が圧倒的に多く、17 世紀後半～ 18 世紀前半のものが主体的に出土している。沖縄産では 18 世紀代とされる灰釉碗（碗Ａ）が比較的出土しているが、それよりも新しいとされる白化粧碗（碗Ｂ）も見られる。また、沖縄産の灰釉碗や無釉陶器には八重山産と考えられるものが若干見られる。パナリ焼の可能性があるものも見られたが、少量である。

以上、17 世紀後半～ 18 世紀前半の遺物が多い一方それ以降のものは少ないことや明確な遺構がないことから、当地域では明和（1771 年）の大津波で海岸沿いの集落は壊滅したとされておりその影響を想定させる（島袋 2002）。上層であるⅠ層下部に白砂のラミナが部分的に見られるが、津波による砂礫の痕跡であった可能性もある。

近代　Ⅰ層下部を埋土とする土坑１・２・６やピット 38・39 がこの時期に相当する。土坑１・２は漆喰か貼土を壁・床面に施すことにより水が溜められるような構造となっている。ただ、最終的には廃棄場として使われており、ウシの他、カツオ類の骨が多く出土している反面、貝類が少ない。遺物では、蹄鉄、軍杯や統制陶磁器、また台湾産陶器などが出土している。また、有孔貝製品の多くはⅠ層下部から多く出土している。脊椎動物遺体



第 25 図　ピット・土坑の時期区分検討図

や貝類遺体はⅠ層下部が最も多く、カツオ類、ヤギ、チョウセンサザエなど、下層であるⅡ層やその遺構では見られないもしくは少ないものが出土している。

以上、近代においては、この場所は宅地の一角であったものと思われる。なお、Ⅰ層上部で確認された石灰岩製礎石は、層序からは現代となるがかなり古い段階と考えられる。

第２節　喜田盛遺跡における中森期の様相について

平成 12・13 年度の調査成果（石垣市教委 2004）も含めて、本遺跡における中森期の様相を検討する。

平成 12・13 年度調査の概略　この調査では、中森期（報告書では 15 ～ 16 世紀）、近世（同 17 ～ 19 世紀）に形成された集落跡とされている。中森期の遺構は、土坑墓５基、炉跡４基、石組３基、貝集中地点、柱穴群が検出されている。土坑墓は、姿勢が確認できるものは屈葬で、１号が小児、２号が幼児、３号が熟年男性、４号が若年男性、５号が熟年女性である。柱穴群については非常に密集しており、やはり建物プランは確定できないが、後述するがその分布密度にはやや差がある。炉跡は今回の調査のものと平面形が径約 50cm の円形であることが異なっているが、深さ 10 ～ 20cm で、埋土は多くの炭火物を含み床面が被熱している点は共通する。石組は掘り込みがなく、径約 50cm の円形に拳大の礫を完結しない形で弧状に並べており、その性格は不明である。この石組に近接して幅 0.6 m、長さ２mの範囲にアラスジケマンガイが集中する地点がある。

出土遺物においては青磁香炉、メノウ製勾玉、北宋銭など今回の調査で出土していないものも見られるが、全体の傾向では大きく変わらない。近世の遺物は、徳化窯等青花や本土産陶磁器などが今回よりも多く出土すること、寛永通寶の出土、また東端の 16・17 地点では完形に近いパナリ焼が出土することなどが特徴的である。

中森期における遺構の分布状況　第 26 図は、平成 12・13 年度及び今回の調査で確認された遺構図をつなぎ合わせたものである。これにより、中森期における遺構の分布状況について見ていきたい。

土坑墓が近接している範囲をくくると、大きく５グループに分けられる。それによると、東端にＡ群（１基、幼児）、約 20 m北にＢ群（２基、男性）、約 20 m北西にＣ群（１基、小児）、約 10 m西にＤ群（３基、女性・乳児・幼児）、約 45 m北西にＥ群（１基）となり、男性と女性の墓が距離を置くことや女性の墓に子どもが近接する傾向が読み取れる。なお、土坑墓の埋葬方向は、Ｃ群のみが東に 40°、他は西に 40°である。また、炉跡は調査区西側に２地点に分かれており、この間（市グリッド 106 ～ 109）においては柱穴がまばらである。

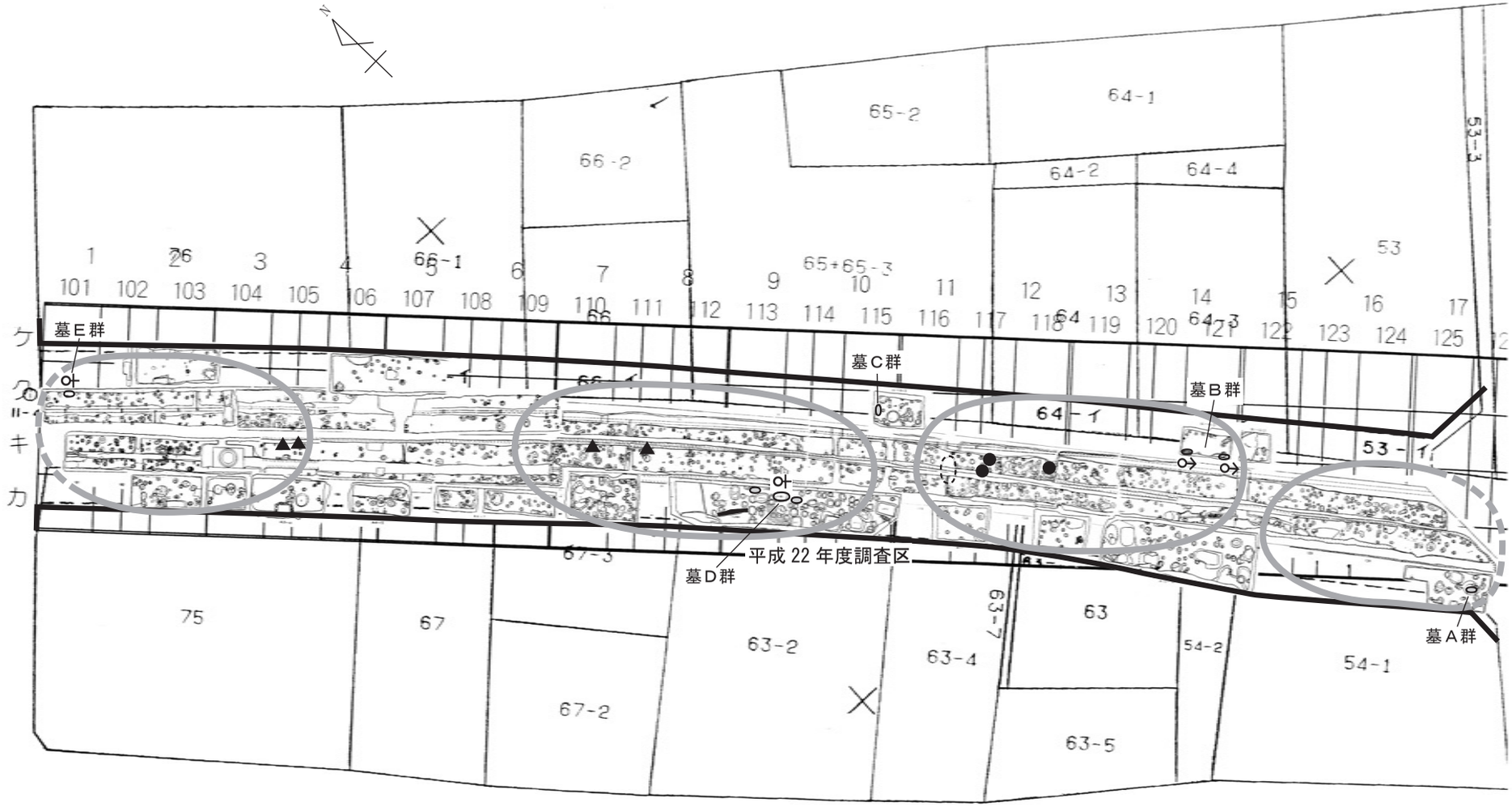
以上の遺構分布から、柱穴群を仮にグルーピングすると、土坑墓や炉跡を境界として一単位 20 m前後の範囲で捉えるならば、４つのグループがあると考えられる。具体的な建物跡が復元できていない状況で断定は出来ないが、この一単位を緩やかなまとまりをもった屋敷地であったのではないかという仮説を提示しておきたい。

文献・家譜から見た慶田盛村　喜田盛遺跡周辺に関する同時代史料については明確ではないが、近世以降の文献・家譜にはその存在を窺わせる。『八重山島年来記』の 1589（万暦 17）年には、「慶田盛村いしとの石垣親雲上頭成る、勤続 13 年間」の記載があり、方言では「キドゥムリィ」と発音され、現在の小字「喜田盛」の由来とされている（石垣市総務 2002）。大濵永亘は文献・家譜に基づき、1500（弘治 13）年のオヤケアカハチ・ホンカワラの乱に殺害された那礼当が居住していた場所を、本遺跡に北接する 12 ～ 15 世紀に隆盛したビロースク遺跡一帯と考え、16 世紀以降は那礼当の嫡子である美良底大屋子保久利思（山陽姓の元祖）がこの喜田盛遺跡一帯に移住したと想定している。また、この慶田盛村には、川平村から移住した仲間満慶山の子孫の嘉善姓一門である石垣永将らが 1624 ～ 42 年の八重山キリシタン事件に関係していたとする。参考として、喜田盛遺跡一帯に移住した各一門の大宗（元祖・始祖）の末裔者の屋敷と指摘されている地番を下記に挙げる（大濵 1999・2006）。

① 53 番地　憲章姓五世英住小宗（1669 ～ 1741 年）・六世英定小宗（1724 ～ 1755 年・五世英住の二男）。彼らの元祖である大宗英乗（不明～ 1601 年）が先述の石垣親雲上とされている。

② 63 番地　上官姓五世正房小宗（1654 ～ 1734 年）。先祖が久米村の程氏京阿波根親雲上とされている。

③ 64 番地　山陽姓七世平安座長載（1760 ～ 1805 年）。初代は那礼当を父とする美良底大屋子保久利思。



第 26 図　喜田盛遺跡遺構分布図

④ 65 番地　大史姓大宗高教（生卒年不明）。父はオヤケアハカチ・ホンカワラの乱で 1500 年殺害された波照間島の明宇底獅子嘉殿の三男・環宝与人遠戸。

小結　本遺跡は、15 世紀後半～ 16 世紀に隆盛した集落跡で、建物跡に混在し土坑墓が点在する形で分布し、緩やかな屋敷地的なまとまりがあったことを想定した。近世の遺構は明確に把握出来ないため、集落の縁辺部であった可能性も考えられるが、17 世紀後半～ 18 世紀前半の遺物は比較的多く、特に調査区東側でパナリ焼が多く出土していることから、この時期にも集落域として機能していたものと思われる。その一方で、18 世紀後半～ 19 世紀の遺物は比較的少なく、再び多くなるのは近代以降であることから、先述した津波の影響を受けたものと考えられる。文献・家譜からは、16 世紀以降には石垣島における有力者の居住地であったと想定されているが、それを裏付ける顕著な遺構・遺物は確定できない。ただ、本遺跡が 16 世紀に隆盛していることは文献・家譜とは矛盾がなく、地域の歴史や位置付けを考える上で非常に貴重で重要な事例と思われる。

第３節　喜田盛遺跡の四箇地域及び石垣島周辺における位置付け

さて、石垣島には海岸沿いを中心に中森期の集落跡が多く分布するが、本遺跡が位置する南部地域には特に集中している（第４図）。本遺跡が所在する新川を含めて、石垣・大川・登野城の４字に当たる範囲は、古くから「四箇」と言われた中心地である。この四箇地域は東西に約４km に亘る市街地で、今回の調査原因となっている県道真栄里新川線が走っており、多くの中森期の集落跡が分布しており、その様相をまとめてみる。

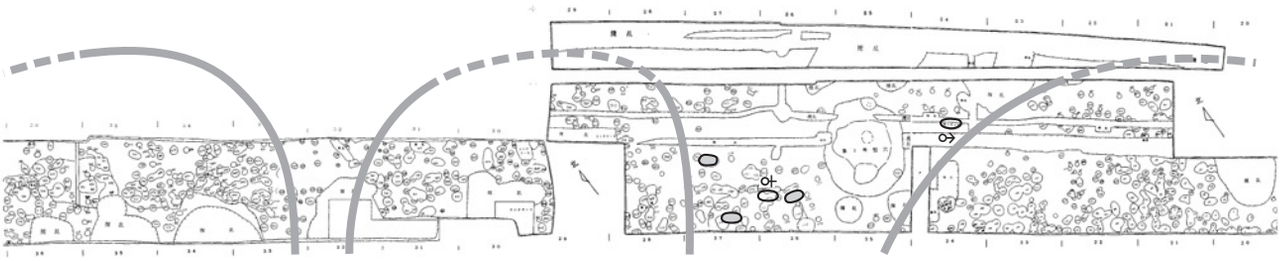
四箇地域における中森期の集落跡の調査　四箇地域の沿岸部は、現在では埋立てが進んでしまっているが、本来は砂丘地に当たり旧海岸線までは 100 m前後と非常に近い一帯である。この砂丘地には、本遺跡、平川貝塚、石垣貝塚、大川東遺跡、登野城遺跡が分布しており、やや内陸の地点にカワバナ遺跡群、山原貝塚が位置し、ビロースク遺跡のみが丘陵上に立地している（第 27 図）。以下、これらの遺跡の報告事例を見ていくことにする。

ビロースク遺跡（石垣市教委 1983、県教委 1994、大濵 1999）　本遺跡より約 500 m北側に、標高約 10 ～ 20 mの小丘陵に位置し、縁辺に石積を設けてその内部に建物跡を配しており、土坑墓も２基確認されている。遺物では白磁玉縁碗やカムィヤキなど 12 世紀のものが見られるが、その主体は白磁ビロースクタイプに代表される 13 世紀後半～ 14 世紀である。また、天目などの希少な陶磁器や勾玉や北宋銭が複数出土している。

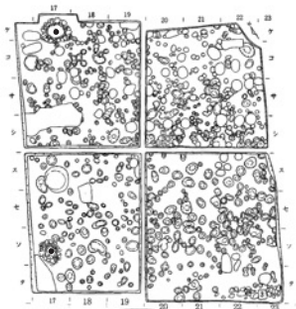
カワバナ遺跡群（県教委 1979・大濵 1999）　ビロースク遺跡より約 300 m西側の小丘陵に位置し、青磁・白磁・褐釉陶器・天目などが採集されている。この遺物から見ると、15 世紀頃が主体と考えられようか。

平川貝塚（石垣市教委 1993 ｃ）　本遺跡より約 500 m南東側に位置しており、多くの柱穴群、礫集中部、土坑墓５基、竪穴状遺構が確認されている。柱穴群については、建物プランの復元は出来ていないが、その分布状況から、一案として大きく３つに分けられる。土坑墓は、女性が埋葬される１号墓の中心に、その５m以内に幼児、小児の墓が３基分布する。１号墓より約 10m 南側に離れた地点に、男性が埋葬される５号墓が位置する。これらの埋葬方向は西に 40°である。遺物からは、白磁Ｃ３群や土器では石垣タイプＩが多いことから 15 世紀前半が主体と考えられるが、16 世紀前半までは継続する。青磁では、盤・瓶などの大型もしくは希少品が見られる。

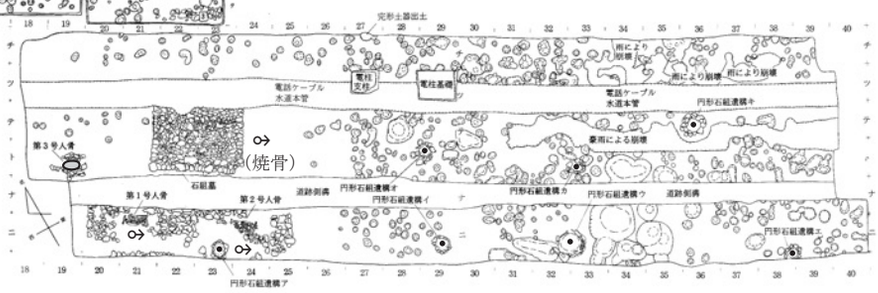
石垣貝塚（石垣市教委 1993 ａ・ｂ）　平川貝塚より約 200 m南東側に位置しており、多くの柱穴群、円形石組７基、焼骨が収められる石組墓の周辺に、礫や板石を配し埋葬された人骨３体が確認された。柱穴群は墓の周辺にはほとんど分布していない。円形石組は、径及び深さ 0.5 ～ 1 mの土坑の周縁・壁面に礫を積み上げた遺構であるが、地山が砂層であることから井戸とは考えにくい。この遺構は、各々が約 10 m程度の間隔をあけて分布している。墓であるが、石組墓以外も、屈葬された人骨の周辺には多くの礫が見られていること、埋葬方向が西に 30°と共通しており、石組墓と一体の遺構とも考えられる。焼骨も含めて、全て男性の墓である。遺物からは、15 世紀代もかなり多いが、景徳鎮産・漳州窯系青花が比較的出土することから 16 世紀にも隆盛し、17 世紀前半に及ぶ可能性はある（石垣市総務 2010）。青磁は盤・香炉も見られ、勾玉も出土している。



平川貝塚　（石垣市教委 1993 c より引用一部改変）



四箇地域関連遺跡位置図



墓の性別

♂…男性

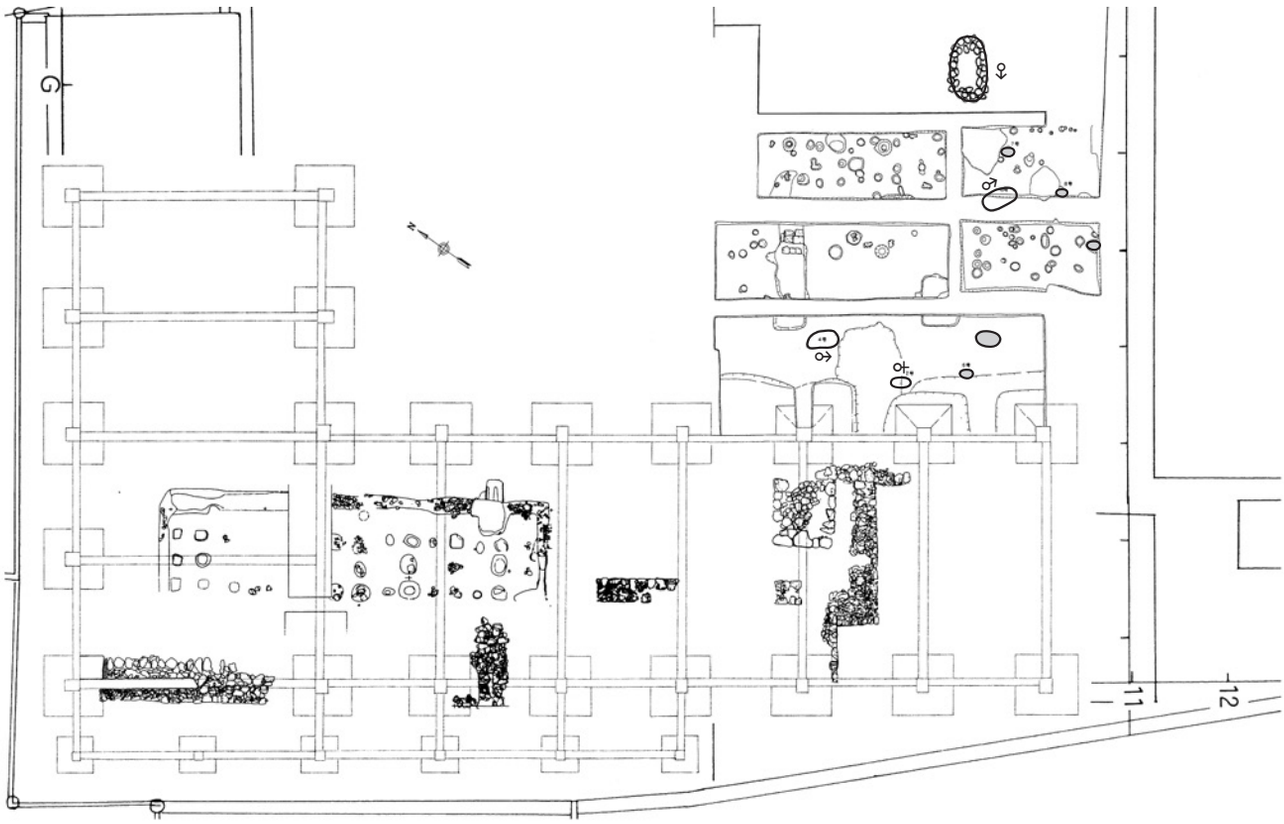
♀…女性

○…若年・乳幼児・不明

●…円形石組

◎…柱穴群のグループ

石垣貝塚　（石垣市教委 1993 a・b より引用一部改変）



登野城遺跡（八重山蔵元跡）　（石垣市教委 1997 b より引用一部改変）

0　10m

第 27 図　四箇地域関連遺跡

登野城遺跡（石垣市教委 1997 b） 石垣貝塚より約 500 m南東側に位置しており、近世における八重山地域の中心であった蔵元跡とほぼ重なっているが、中森期にも多くの遺構・遺物が見られ、柱穴群と石組墓 1 基と、土坑墓 9 基が確認されている。柱穴群は比較的まばらであるため、建物が密集しない場所であったと想定される。確認された墓は径 15 m程度の範囲に集中しており、その被葬者は男性が 3 基、女性が 1 基、若年・乳幼児が 4 基となっており、明確な分布差はここでは見つけられない。ただ、墓の主軸方向が石組墓のみが東に 40°、他は西に 50°となっており、直交するような形で異なっている。また、別の調査区では柱穴群が密集する地点で土坑墓が数基分布するところもある（大濵 2009）。出土遺物からは、青花は少ないようであるから、平川貝塚に近い 15 世紀前半～ 16 世紀前半が主体と思われる。ここでは、北宋銭や勾玉が複数出土している。

山原貝塚（玉口・西村・大川・浜名ほか 1960） 登野城遺跡より約 600 m東側に位置しており、標高約 5 m の砂丘上に形成され、北側は台地縁辺となっている。住居跡とされる方形石組が確認されているが、具体的な様相は不明である。出土遺物としては、カムィヤキも出土するが、白磁Ｃ３群、青磁Ⅳ・Ⅴ類、褐釉陶器、土器では石垣タイプＩが主体なので、14 世紀後半～ 15 世紀が主体と思われる。また、北宋銭、鉄鍋も出土している。

集落跡の変遷 以上の事例から、四箇地域における中森期の集落跡の変遷についてまとめる。本地域でも最も古い遺跡は、小丘陵に位置するビロースク遺跡で 12・13 世紀から形成されてピークが 14 世紀である。14 世紀後半になると台地縁辺に位置する山原貝塚が形成されるが、白磁Ｃ３群が比較的出土している平川貝塚や登野城遺跡は砂丘地でもこの時期に形成され始めている可能性が高い。15 世紀前半にはビロースク遺跡、後半には山原貝塚が廃絶する一方、他の遺跡は 16 世紀も継続している。これらの遺跡でも 16 世紀後半には出土遺物の量は少なくなっていが、石垣貝塚や本遺跡は 17 世紀前半代の資料も比較的見られるなど、遺跡ごとにピークや廃絶に若干の差があった可能性がある。

このように、四箇地域では 15 世紀にそれまで隆盛を迎えたビロースク遺跡が縮小を迎える一方、砂丘地を中心に多くの遺跡が形成されていく。16 世紀後半には、出土遺物から見ると縮小傾向が見え始める集落跡も現れるが、砂丘地の利用は 17 世紀前半まで見られるという傾向を追うことができる。

遺構や遺物から見た集落跡の特徴 四箇地域における集落跡の特徴としては、建物跡と墓が比較的近接して分布することが挙げられる。現時点では小面積であった山原貝塚以外では土坑墓が確認されており、石組墓は石垣貝塚と登野城遺跡でしか確認されていないので、この墓が有力者層の存在を示す可能性も考えておきたい。ただ、墓の埋葬方向を見ると土坑墓と石組墓においても多くは西に 40°前後であり、この方向は概ね南側の海岸線と並行して分布しており、海の方向もしくは日の出入りなどを意識した規範であった可能性も想定される。

さて、墓・建物跡の分布状況については、次の２パターンが見られる。

①柱穴群に混在するように、１～数基で１グループを形成し、女性と子供の墓は隣接するが、男性はやや離れて位置する（本遺跡、平川貝塚）。

②柱穴群とは明確に場所の区別が見られ、男性が埋葬される石組墓を中心に墓域を形成する（石垣貝塚、登野城遺跡）。

出土遺物では、陶磁器では盤や天目、勾玉や北宋銭、鉄製品などの希少品と思われるものがあるが、今のところ遺跡により明確な偏りはないと言えるが、登野城遺跡ではやや目立つ印象もある。一方、骨製尖頭器が中森期ではどの遺跡でも出土しており、共通点の一つと言える。

このように、四箇地域の集落跡は顕著な階層差は見つけがたい状態ではあるが、15 ～ 16 世紀に多くの人々が幾つかの集落に分かれ、各集落では緩やかなまとまりである屋敷地を構成しながら大きな差はないような状況で暮らしており、一部は石組墓に埋葬された人々もいたのであろう。

石垣島及び周辺の様相 それでは四箇地域より視点を広げて、石垣島及び周辺の中森期における集落跡を見ていきたい。中森期の集落跡については、大濵永寛がその概観をまとめており、特に立地の観点による説明が重要で

ある。それによると、12 世紀以前まで海岸低地砂丘に限定されたが、14 ～ 16 世紀にかけての遺跡は急増し海岸低地砂丘や海岸近くの展望の利く小高い丘、緩やかな傾斜地、丘陵の先端部など様々な展開が八重山諸島内の至る場所に認められ、16 世紀を境に利用が破棄される遺跡が目立つとのことである（大濵 2009）。

また、四箇地域の集落跡は石垣による区画はなかったが、石垣島ではフルスト原遺跡に代表されるように八重山地域では、石垣により幾つかの区画を巡らせるものが 14 ～ 15 世紀に隆盛を迎える（県教委 1994、国歴民 1999）。フルスト原遺跡では、15 基の野面積の石垣が平面略方形状に幾つもくっつくように石囲いがある集落跡である。標高 20 ～ 25 mの石灰岩台地上の縁辺に位置し、遺跡の北東は崖になっており、海岸までは約 1 km である（石垣市教委 1984）。この遺跡では 16 世紀の遺物は少ないため、四箇地域とは隆盛時期にやや差がある。

一方、西表島を見ると、例えば上村遺跡（県教委 1991）や慶来慶田城遺跡（県教委 1999）では同様に幾つもの石囲いで構成される集落跡であるが、15 ～ 18 世紀の遺構・遺物が確認されており、フルスト原遺跡などと比べると長期間継続したものと思われる。ここでは、青磁は盤・香炉・小杯などの様々な器形、緑釉水注やタイ産鉄絵陶器など希少品が見られ、また貯蔵具とされる褐釉陶器壺も比較的見られる。このことは、大濵永寛が言うようにこれら石囲いを有する集落跡が貿易の拠点であった可能性を示すものと考えられ（大濵 2009）、この両遺跡ではその重要性からより長く継続したとも想定される。

まとめと課題　以上、本遺跡は 15 世紀後半～ 16 世紀に隆盛した集落跡で、この遺跡を含む四箇地域の砂丘地には当該期には数箇所の集落跡が比較的密集する形で分布する。集落内部は建物跡が密集して見られ、屋敷地的なまとまりをもち墓が幾つかのグループで点在するような状況である。この様相から、明確な有力者の存在は見えがたいが、墓には土坑墓と石組墓があり、後者は少なく地点的にも限られており、階層差である可能性も想定される。一方、当地域から北東約 3 km に位置する石垣囲いがあるフルスト原遺跡は 14 ～ 15 世紀を中心としており、16 世紀については廃絶・縮小していた可能性が高い。一方、本遺跡を含めた当地域では 16 世紀も隆盛している。このような中森期における集落様相は、1500 年のオヤケアカハチ・ホンカワラの乱を契機として琉球王府が八重山諸島を直接的な関与した影響とする見解もあり（島袋 2005・大濵 2006）、今後、様々な側面から検討していくことが必要であろう。

引用文献

新垣力　2003「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究 1 』沖縄県立埋蔵文化財センター

阿利直治　2011「壺屋焼と八重山焼について」『琉球陶器の来た道－展覧会講座、講演会資料編－』沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館

石垣市教育委員会　1982『大田原遺跡』石垣市文化財発掘調査報告書第 4 号

1983『ビロースク遺跡』石垣市文化財発掘調査報告書第 6 号

1984『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財発掘調査報告書第 7 号

1987『崎枝赤崎貝塚』石垣市文化財発掘調査報告書第 10 号

1993 a『石垣貝塚』石垣市文化財調査報告書第 17 号

1993 b「石垣貝塚発掘調査報告書－宅地建設に係る記録保存調査－」『黒石川窯址』同報告書第 15 号

1993 c『平川貝塚』石垣市文化財調査報告書第 18 号

1993 d『黒石川窯址』石垣市文化財調査報告書第 15 号

1997 a「ピュウツタ遺跡発掘調査報告書」『名蔵貝塚発掘調査報告書』同市文化財発掘調査報告書第 22 号

1997 b『八重山蔵元跡』石垣市文化財調査報告書第 21 号

2000『石垣島の岩陰遺跡』石垣市文化財調査報告書第 25 号

2004『喜田盛遺跡』石垣市文化財調査報告書第 28 号

石垣市総務部市史編集課　2002『村むら探訪－新川村の移り変わり－』石垣市史巡検 Vol. 7
2007『研究史－八重山考古学のあゆみ－』石垣市考古ビジュアル版 1
2010『八重山の民間交易隆盛期　中森期－中国陶磁器・人口の急増－』石垣市考古ビジュアル版 6
黄慎智　2009「鶯歌狗母鍋研究」『鶯歌陶博物館研究集刊 2008・2009』鶯歌陶瓷博物館
大濵永亘　1999「新川のビロースク（美良底）遺跡とその周辺」『八重山の考古学』先島文化研究所
2006「慶田盛村の繁栄と古謡」『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』先島文化研究所
大濵永寛　2009「先島の 14 世紀から 16 世紀の遺跡について」『名蔵シダタル海底遺跡共同研究報告書』先島文化研究所
沖縄県教育委員会　1991『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 98 集
1999『慶来慶田城跡』沖縄県文化財調査報告書第 131 集
1979『石垣島の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 22 集
1980「神田貝塚」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第 30 集
1984『カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第 58 集
1985『アラスク村跡遺跡・ウイヌスズ遺跡発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第 62 集
1994『グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島－』沖縄県文化財調査報告書第 113 集
沖縄県立埋像文化財センター　2005『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』同センター調査報告書第 28 集
2009『嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東方古墓群』同センター調査報告書第 50 集
片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹　2011「更新世人骨の発見－沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡－」『季刊　考古学』第 114 号
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
金武正紀　1994「土器→無土器→土器－八重山考古学編年試案－」『南島考古』第 14 号　沖縄考古学会
久貝弥嗣　2006「新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層出土の動物遺体に見られる傷痕」『紀要沖縄埋文研究 4 』同センター
黒住耐二　1987「遺跡出土貝類の生息場所類系化の試み」『石川市古我知原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 84 集　県教委
合田芳正　1986「八重山式土器についての一試案－与那良、成屋、ヤマバレー遺跡出土土器の分析をとおして－」『南島考古』第 10 号　沖縄考古学会
国立歴史民族博物館　1999『村が語る沖縄の歴史－歴博フォーラム「再発見・八重山の村」の記録－』新人物往来社
佐賀県立九州陶磁資料館　1998『沖縄のやきもの－南海からの香り－』
島袋綾野　2002「新川の遺跡」『村むら探訪－新川村の移り変わり－』石垣市史巡検 Vol. 7
2005「近世琉球における「村」と「遺跡」－八重山近世村跡に関する一考察－」『廣友会誌』創刊号
新里貴之　2004「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」『グスク文化を考える』新人物往来社
瀬戸哲也・玉城靖・仁王浩司・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究 5 』沖縄県立埋蔵文化財センター
高宮廣衛　1981「編年試案の一部修正について」『南島考古』第 7 号　沖縄考古学会
田中克子　2002「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）－福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌』第 10 号　博多研究会
玉口時雄・西村正衛・大川清・浜名厚ほか　1960「石垣島＜山原貝塚＞」『沖縄・八重山』滝口宏編
陳建中　1999『徳化民窯青花』文物出版社
那須孝悌・趙哲済　2003「地層の見方」『環境考古学マニュアル』同成社
西川寿勝　2008「賜杯考（後編）－軍杯の考古学－」『大阪文化財研究』第 33 号　（財）大阪府文化財センター
西中川駿　1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』文部科学省科研費研究成果報告書
福建博物館　1997『漳州窯－福建漳州地区明清窯址調査発掘報告之一－』福建人民社
向井亙　2003「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.23　日本貿易陶磁研究会
森　毅　2001「大坂城下町跡 SK01」『季刊考古学』第 75 号　雄山閣

1．完掘後全景（東より）

2．完掘後全景（西より）

3．遺構プラン検出状況（東より）

4．完掘後西側（西より）

5．４グリッド完掘状況

図版９　調査区全景

1．土坑墓１平面プラン検出状況

2．土坑墓１半裁状況

3．土坑墓１人骨検出状況

4．土坑墓１完掘状況

5．土坑墓１人骨検出状況（拡大）

図版 10　土坑墓１

1．土坑墓２平面プラン検出状況

2．土坑墓２人骨検出状況

3．土坑墓２人骨検出状況（拡大）

4．土坑墓２完掘状況

5．焼土遺構完掘状況

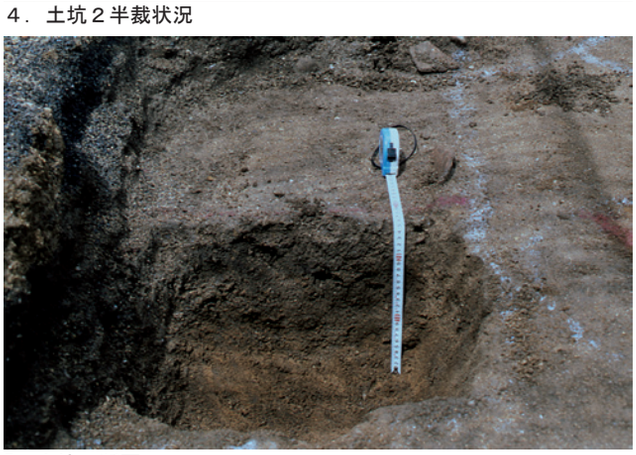
6．焼土遺構堆積状況

図版 11　土坑墓２・焼土遺構

1．土坑　1完掘状況

2．土坑１半裁状況

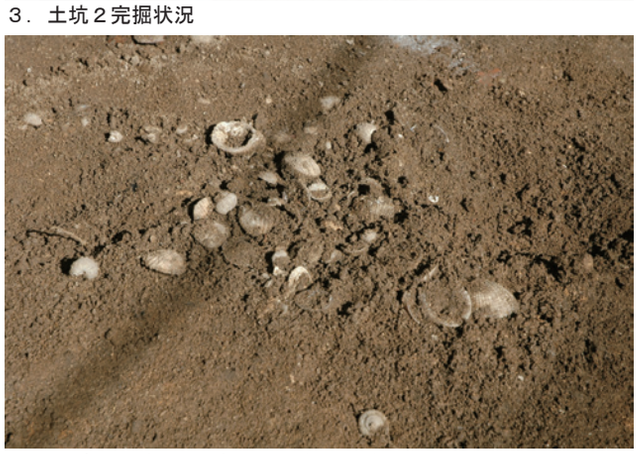
4．土坑２半裁状況



5．土坑３断面

3．土坑２完掘状況

6．土坑４断面



7．４グリッドⅠ層下部貝出土集中地点

図版 12　土坑１・２・３・４

１．土坑８断面

２．ピット１断面

３．ピット 23 断面

４．ピット 36 土器出土状況

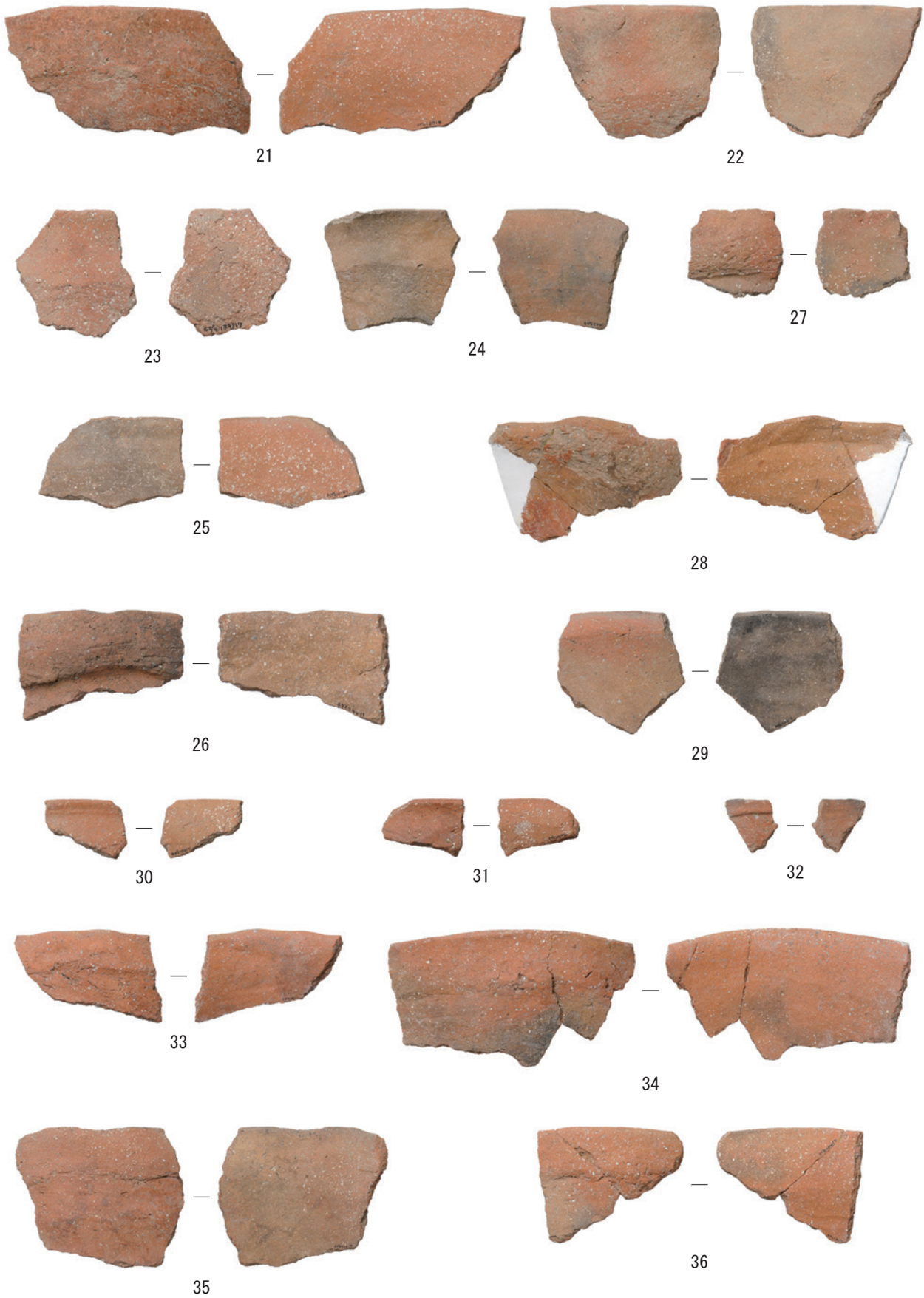
５．グリッド南壁断面

６．２～４グリッド南壁断面

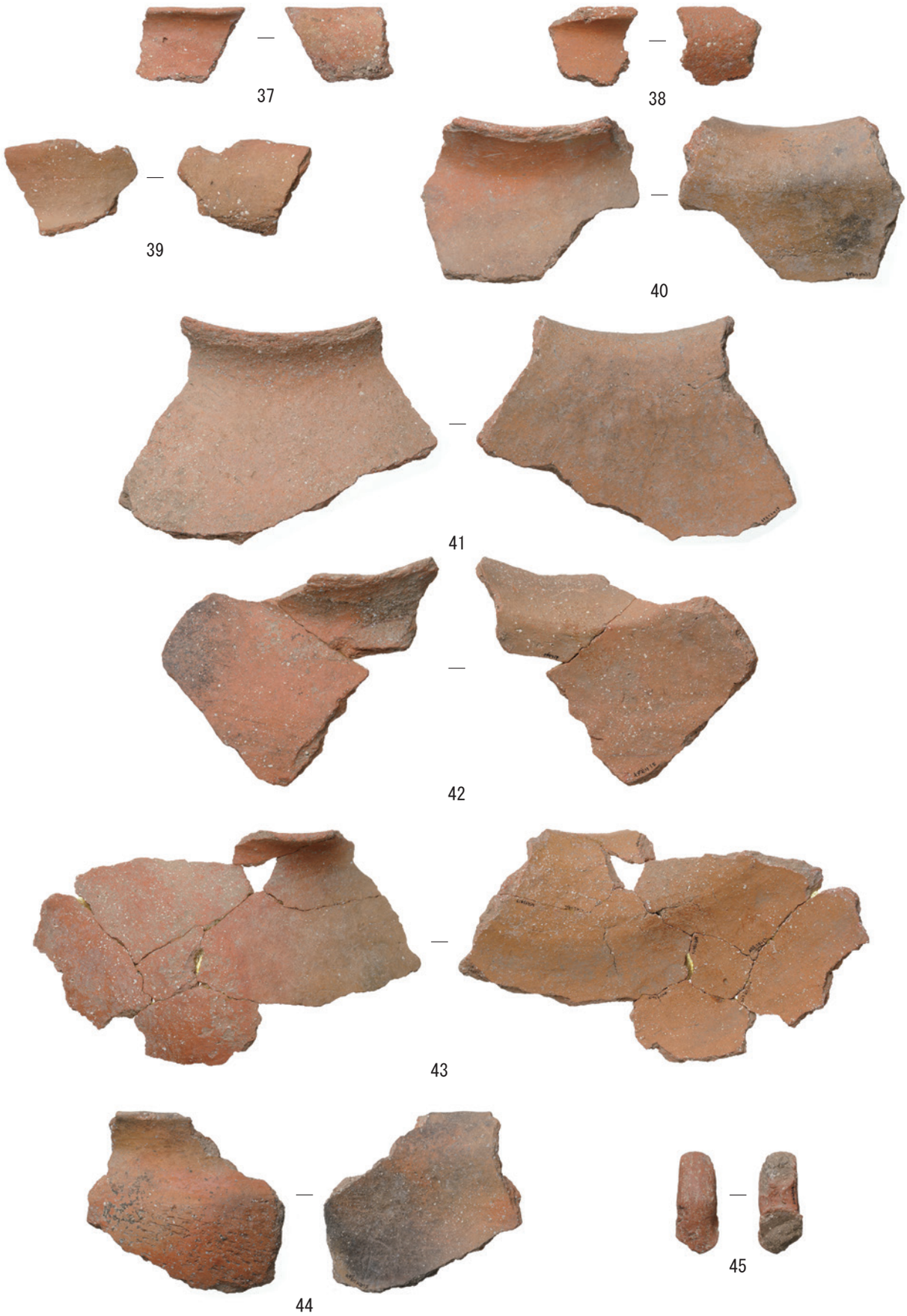
７．２グリッド南壁断面

図版 13　土坑８　ピット１・23・36　２～４グリッド断面

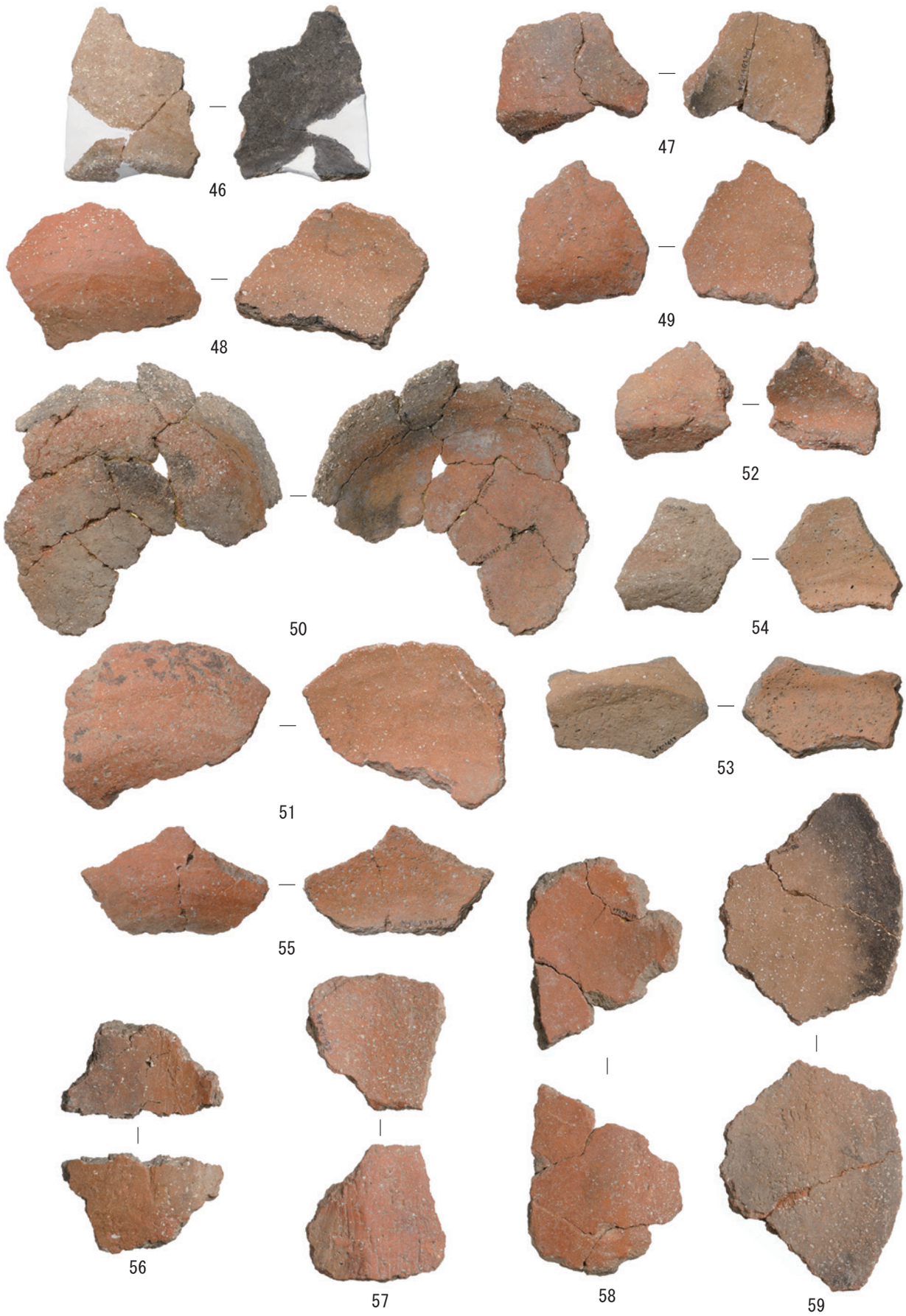
図版 14　土器（１）



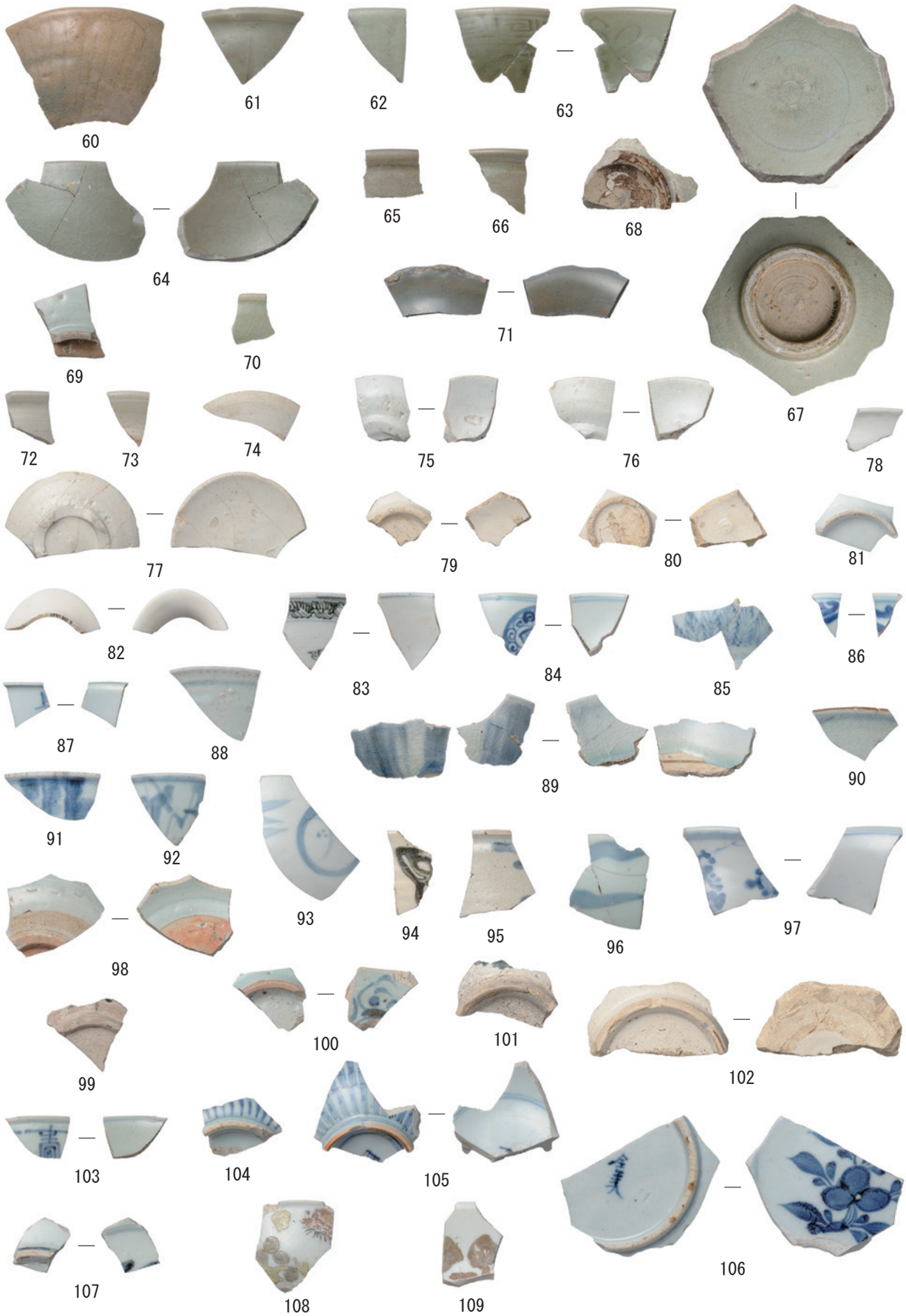
図版 15　土器（２）



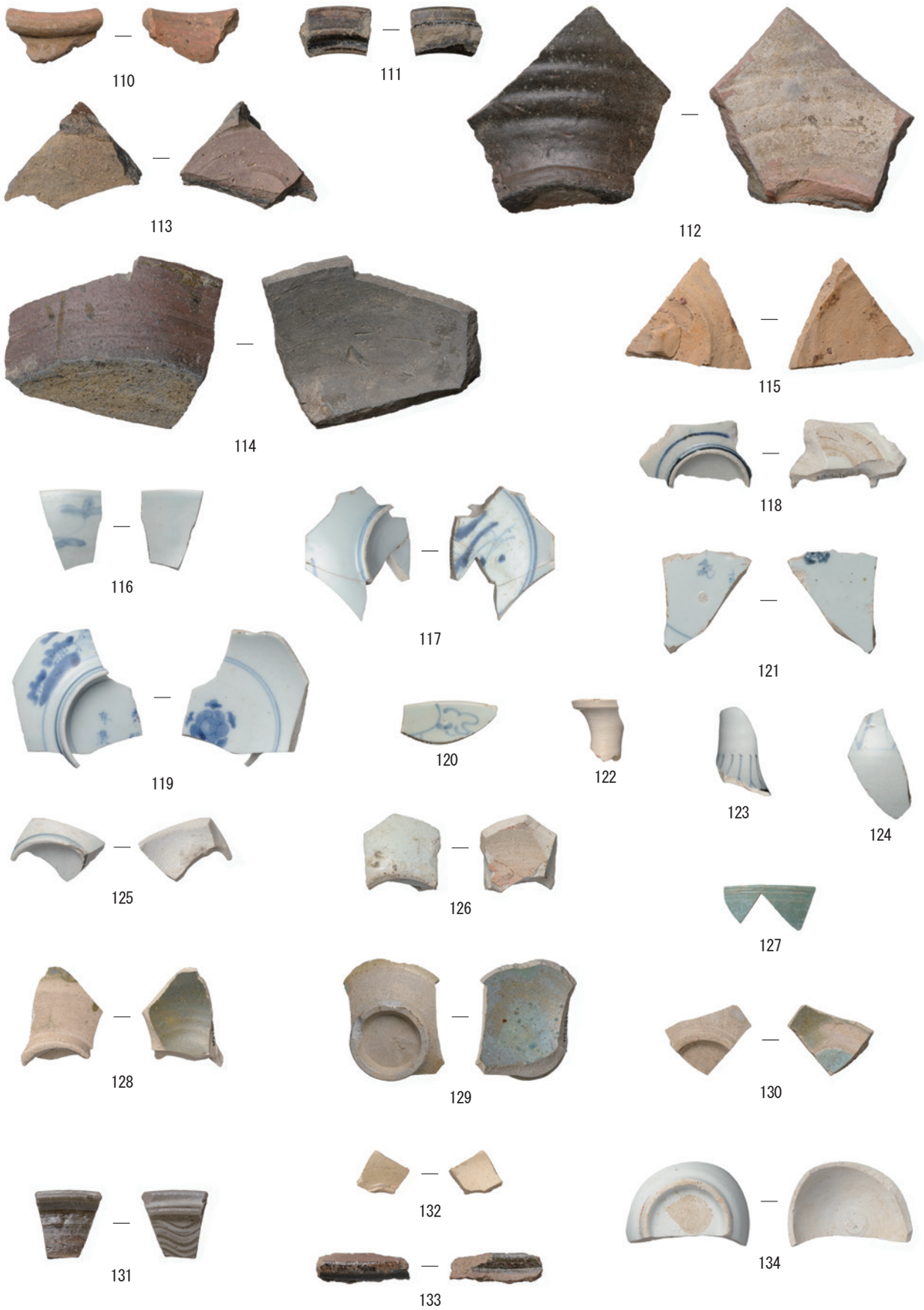
図版 16　土器（３）



図版 17　土器（4）



図版 18　青磁（60～71）・白磁（72～82）・青花（83～107）・中国産色絵（108・109）

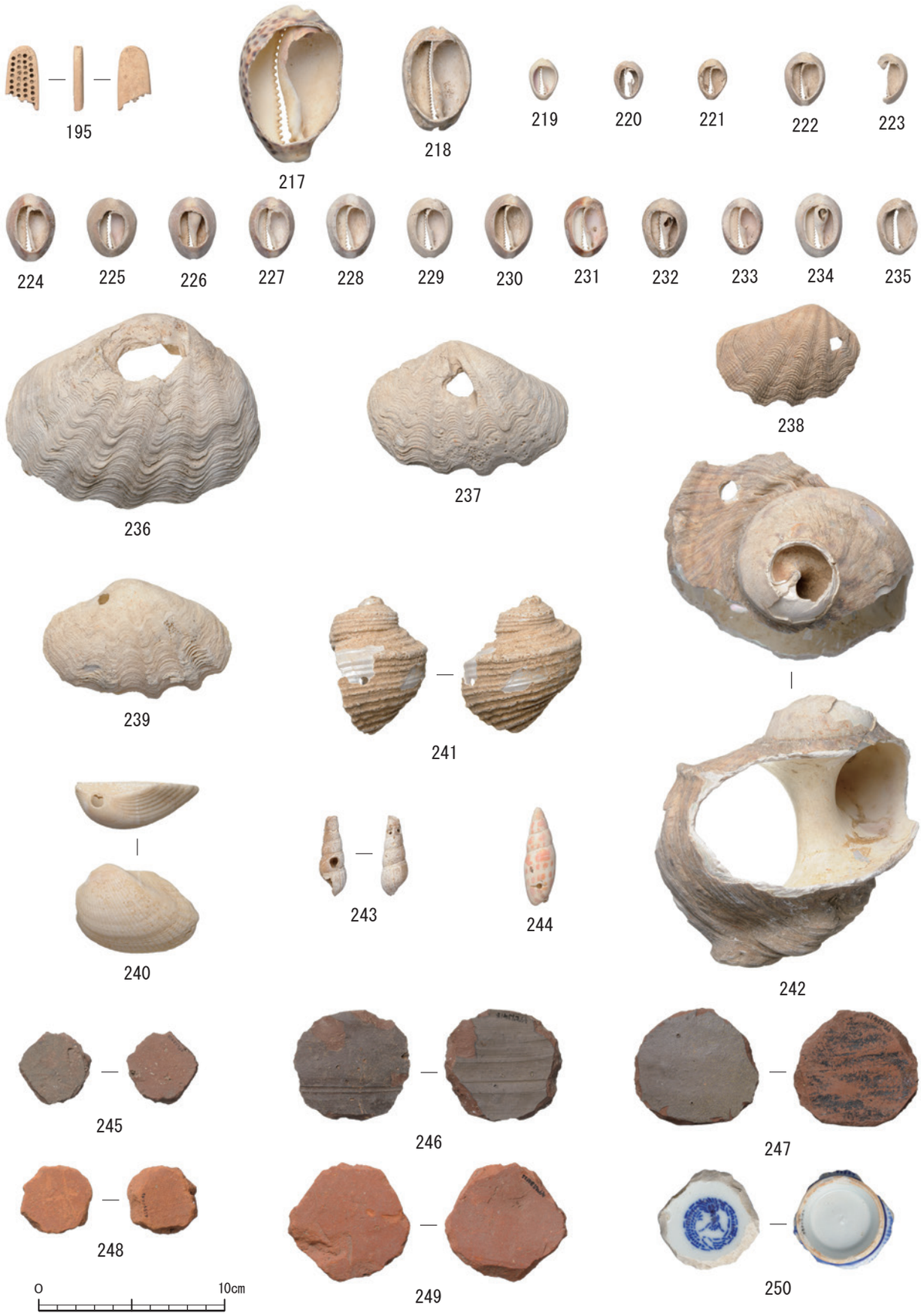


図版 19　中国産褐釉陶器 (110～113)・タイ産褐釉陶器 (114)・台湾産陶器 (115)・本土産陶器 (116～134)

図版 20　沖縄産施釉陶器（135～161）・沖縄産無釉陶器（162～170）

図版 21　沖縄産無釉陶器（171～184）・陶質土器（185・186）・金属製品（187～190）・骨製品（191・192）
石製品（193・194）

図版 22　近代陶磁器（196～216）



図版 23　骨製品（195）・貝製品（217～244）・円盤状製品（245～250）

報　告　書　抄　録

ふりがな	きだもりいせき
書名	喜田盛遺跡
副書名	平成22年度　県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	瀬戸哲也・片桐千亜紀・徳嶺里江・土肥直美
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原193-7　TEL　098-835-8752　FAX　098-835-8754
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
喜田盛遺跡（きだもりいせき）	沖縄県（おきなわけん）石垣市（いしがきし）字新川（あざあらかわ）63－2	47207		24°20′46″	124°9′10″	20100707～20100806	50㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜田盛遺跡	集落	中森期（15～17世紀）	柱穴群、土坑5、土坑墓3	土器・中国産陶磁器(青磁・白磁)・貝類遺体・獣魚骨	平成12・13年度石垣市調査区と隣接しており、県道工事に伴う調査は今回で完了。
		近世～近代	土坑3、礎石	本土産陶磁器・中国産陶磁器(青花)・近代陶磁器・台湾産陶器・金属製品・石製品・骨製品・貝製品・貝類遺体・獣魚骨	

要　約

県道真栄里新川線街路改良工事に伴う喜田盛遺跡の記録保存目的の発掘調査を実施した。本遺跡は、既に平成12・13年度に石垣市教育委員会が発掘調査を行っており、中森期を主体とした集落跡の様相がより明確にできた。遺構には、多くの柱穴群が分布しており、それを避けるように土坑墓が3基確認された。出土遺物の特徴から、中森期でも15世紀後半～16世紀が主体であることも確認できた。近世については17～18世紀の遺物は見られるが、それ以降の遺物は少なく、明和（1771年）の大津波の影響を受けたことが想定された。近代には、宅地として利用され、多くの近代陶磁器が出土する中で、台湾産陶器も見つかったことは近代史を考える上でも重要な資料と思われる。

総括として、本遺跡が位置する四箇地域の中森期における集落跡の様相をまとめ、15～16世紀に幾つかの集落跡が各々屋敷地的なまとまりを持ちながら、それに近接して数基の墓が営まれていることを確認できた。今後の課題としては、約3km北東に位置するフルスト原遺跡のように、石垣囲いを有する集落跡との関係性などについて検討していく必要があろう。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第59集

喜　田　盛　遺　跡

平成22年度　県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査

発行年月日　2011年3月31日
編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原193-7
TEL　098-835-8751・8752
印　　刷　株式会社　東洋企画印刷
〒901-0305　沖縄県糸満市西崎町4-21-5
TEL　098-995-4444